

# 奇譚クラス

新しい風俗文獻誌

奇譚クラス

KITAN CLUB

11

私を驚かせて下さい。

辻村 隆



# 絢を競う艶姿115ポーズ

巻頭裸身緊縛一頁大扉  
ながしめ 絹川文代  
荒縄全裸緊縛 大塚啓子  
落ちた腰巻九態(野外) 大塚啓子  
円い乳房 愛川悦子  
浴室におびえて九態 愛川悦子  
恍惚悦膚の末 絹川文代  
いためられた乳房 桜井葉子  
耐えられる? 桜井葉子  
月経帯の強制 二態 大塚啓子  
手吊りと逆手吊り五態 大塚啓子  
全裸悦膚態 大塚啓子  
白痴美の誘惑 大塚啓子  
はねかえす縄 大塚啓子  
うろうろして 大塚啓子  
雪白の肌は縄にまみれて 大塚啓子  
六態 大塚啓子  
優姿ハダカ縛り 絹川文代  
忘却の彼方 絹川文代

## ◎豪華な内容とモデル陣◎

股間縛り背正面二態 絹川文代  
捕われの麗人二態 絹川文代  
過責め二態 大塚啓子  
浴室にて責める四態 大塚啓子  
何にをしようと言うの 桜井葉子  
新人懸集八景 桜井葉子  
いじめぬく二態 絹川文代  
メンスバンドの猿轡 絹川文代  
観念横臥の四二態 絹川文代  
変形手足しほり四態 愛川悦子  
裸身をさらして六態 愛川悦子  
豊満くらべ 九態 桜井葉子  
亀甲縛り正背面二態 愛川悦子  
怒めしき縄目二態 大塚啓子  
後手首腰縄 四態 大塚啓子  
新人緊縛ポーズ集八態 桜井葉子  
隅から隅まで4態 愛川悦子  
鏡面万華鏡様(裏表) 愛川悦子  
四十項目 百十五ポーズ



## 『緊縛フオトアラベスク』

略号(あらべすく) 特価 五百円

△収載内容V二十六項目、写真七十七葉

- 鏡 愛川悦子
- 銘花二輪 花坂道子
- 鉄鎖 大塚啓子
- 蹄観 大塚啓子
- 庭園にて 絹川文代
- 謎の微笑 田中芳代
- 田中悠子表情集(一) 田中悠子
- 誇る脚線美 田中悠子
- この足どうかしら 田中悠子
- 裏と表と 愛川悦子
- 落陽の丘 愛川悦子
- ポリウムの花園 大塚啓子
- 緊縛美の綾 大塚啓子
- 亀甲縛り 愛川悦子
- 吊責折檻 村井知可子
- 立木縛り 村井知可子
- 豊醇 愛川悦子
- 乱れ髪三景 大塚啓子
- 椅子と絨緞 愛川悦子
- 姐上の美鯉 絹川文代
- 限定版特別号第一集として、最近撮影の新人モデルの各種緊縛ポーズを網羅し、文字通り表紙から裏表紙に至るまで、可憐なモデル嬢の緊縛姿態にて埋めました。(限定版特別号は一切書店売りを致しませんから、直接発行所宛お申込み願います)

## 限定版 特別号

## 別冊奇譚クラス 五百円 別特 号

第一グラビヤ										第二グラビヤ									
東京	不	不	不	不	不	不	不	不	不	東京	不	不	不	不	不	不	不	不	不
東京	不	不	不	不	不	不	不	不	不	東京	不	不	不	不	不	不	不	不	不
東京	不	不	不	不	不	不	不	不	不	東京	不	不	不	不	不	不	不	不	不
東京	不	不	不	不	不	不	不	不	不	東京	不	不	不	不	不	不	不	不	不
東京	不	不	不	不	不	不	不	不	不	東京	不	不	不	不	不	不	不	不	不
東京	不	不	不	不	不	不	不	不	不	東京	不	不	不	不	不	不	不	不	不
東京	不	不	不	不	不	不	不	不	不	東京	不	不	不	不	不	不	不	不	不
東京	不	不	不	不	不	不	不	不	不	東京	不	不	不	不	不	不	不	不	不
東京	不	不	不	不	不	不	不	不	不	東京	不	不	不	不	不	不	不	不	不
東京	不	不	不	不	不	不	不	不	不	東京	不	不	不	不	不	不	不	不	不



- ### 第一口絵
- 大奥きしよー
  - 鬼面の顔
  - 耐苦のハシゴ
  - 墓地に揺れる奴隷
  - 迫り来る淫靡器
  - 木立ちの中の囚女
  - 煙に咲いた麗人
  - 非情の聲
  - 電灯に揺れる舌吻
  - 回転木馬
  - 刺青される女
  - 苦悶の宙吊り
  - アクロバチスト急進
  - 恐怖のコンクリート部屋
  - 空倉庫の怪事
  - 暴虐の部屋

- ### 第二口絵
- 黒皮の牢獄
  - ゴム紐との闘い
  - 受刑の服
  - 変形驚愕 縛縛り
  - 消えぬ灯
  - 草の精
  - 強まりゆく痛覚
  - 迫り来る羞恥
  - 素と名の大
  - 迫上といけにえ
  - 狙われる美囚
  - 車中のものがみ
  - 踏みみじられる女
  - ハンモック椅子
  - 耐苦の座褥
  - 煙燻と媚肌

表紙裏 第二表紙 姫君様之図 第三表紙 新製品奇譚









奇譚クラブ 十一月特大号 目次

目次表 川柳「マニヤ幻想句」……佐保忍・伊 純れい子・西  
イノージ「リンチに遭う小娘」……北原 純子・西

第一グラビヤ	
緊縛美の祭典……構成・塚本 鉄三	
庭園の美観……梨花	美しき干物……梨花
ゴム布の嵌口……明川	豊満と乳房……桜井
膚はコードにくびれて……大塚	涕 泣……純れい子・西
組写真	燭 台……大塚
責めに憑かれて……梨花	

第一口絵	
女相模「外掛け」……提供・雪崎 京人	
スケを張れ……	滝れい子・西
坊主の嫉妬……	滝れい子・西
車輪とムチ……	四馬 幸・西
深夜のオフイス……	四馬 幸・西
悪童日記……	南村 俊平・西
学生馬……	滝れい子・西
殉 死……	滝れい子・西

アブ双曲線	
大輪の妖花……明川	組写真
	構成・塚本 鉄三

第二グラ	
連装組写真	エビレバリプレイ……大塚
女性の血紅切腹……梨花	バントの猿轡……大塚
Mフォト組写真	足と手と……前本
ハイヒール……明川	人身御供……梨花

第二口絵

雑踏の中の孤独「わたしを賣めて下さい」……長日脚……辻村 隆	
奇譚クラブの性格について……衣 軍一……64	
奇譚二十九夜物語(第八夜)……辻村 隆……64	
「東映」最近の興りシーン……東山 映史……77	
女学生の切腹「野に散る花」……黒木 節夫……78	
マゾヒストの告白「生涯の灯は何処に」……小林 誠吾……96	
女子又シリーズ第五「熱戦」……雪崎 京人……96	
シナリオ「ジェラシー」……兵 与志夫……96	
色鮮やかな緊縛フォト撮影の実際……塚本 鉄三……107	
《若奥様の悦楽ムード》《首綱と足首縛りの一例》……原白 英二……107	
猿轡雑考……	原白 英二……107
切腹実見記と雑感……	田地 隆規雄……126
ファンタジー・マゾヒスティカ……	山本 節夫……133
切腹と白足袋と女官「果しなご夢」……	桜 恵之助……133
女相模物語……	雪崎 京人……133
連装SM小説「宇宙のどこかで」……	佐治 麻造……141
創作 異 教 徒……	草薙 久人……142

奇クサロン	
作者の姓名についての私見	浣腸風物詩
私の描いた費面	切腹レポート
風流 サド 談 義	我が思いを托して
あるカメラマンの自伝	絹川文代さんの麗姿
「愚問と打撃」の構想	公衆便所の奥さん
告白「解剖」について	或る現実の断片
「クリスター」万才	玉鶴 落穂集
麗えあれば憂なし	「痴人」設立試案
マゾ画「お化粧」	連作「小 女」

創作「樹の壁」……横村 奏……187	
ある路上通手の異変「げいにく」……	北村 浩二……190
大奥裸女血斗の果て……	吾 蘭 博……204
灸責め熱海の一夜……	保田 徹……210
わが甘美なるもの(愛好家の証言)	……とよま かつひ……215
手記 私の美談……	笹 緑……218
麻生保氏の生活と意見……	麻生 保……220
おまじない(一) 悪夢の一夜(第二話)……	恒川 文彦……221
告白 足の美しい女……	中平 靖……234
色鮮やかな「火星への招待」……	三好 謙……235
読者通信……	



川柳マニア幻想句

美

小女のポニーに引かす

金の馬車

親

分の女は

佐保 忍心作  
淹れい子画

姫

ひより  
落城の火に映えて

医

師なれば浣腸も  
これ仕事なり

女

王様 奴隷めここに坐します

お

み足

を戴く夢を

今果す

ク

ラマー  
のモデル

縛りもOK

# 庭園の美観

三鉄本塚構成







美  
し  
き  
干  
物



梨  
花  
悠  
紀  
子



ゴム布の散口





絹  
川  
文  
代





櫻井 葉子

豊満と乳房





膚はコードにくびれて







涕

泣

(ていきりう)







縄解かれたれど

組写真 責めに憑かれて











梨花悠紀子

燭

台







女相撲 『外掛け』 雪崎京人・提供



スケを張れ（テレビ「部長刑事」より）

主人が出張中で若奥さんと女中さんだけの家へ入った強盗。

# 坊主の嫉妬

「隠し男を白状するんだ、ホーラ、ホラ、擦ったいゾ」







## 車輪とムチ

重い車輪を背負ったまま、苛酷なムチを逃れるため彼女は身悶えた。

# 深夜のオフィス

浮気の制裁に彼女は自分の職場で裸身を晒さねばならなかった。





## 悪童日記

今日ハダレモイナカッタカラ、二丁目のミー

コニ兄チャンノユニホームヲキセテ、シバッテイジメテヤッタ。



『 学 生 馬 』 「重いんだから、もう勘忍してヨ」

「駄目、駄目、もう一回まわらないと休ませないからね」





殉 死

「殿、妾もお伴させて頂きます」

大輪の妖花





組寫眞

エビしばりプレイ









女性の血紅切腹









バンドの猿轡



大塚啓子





# ハイヒール





出演している男性モデルは応募した読者です

『マゾ・モデル募集』









足と手と

前本妙子

人 身 御 供





# 雑踏の中の孤独

「わたしを責めて下さい」後日譚

辻村

隆



箕田編集長の懇請で、東浦ひかるを阪急の螢ヶ池の自宅で撮って以後、日ならずして、私は熱のさめないうちにと再び彼女を訪れ、旅館に連れ出して数十葉の嗜虐ポーズをものにした。この時は、殆んど写真をとることに終始しただけなので、蛇足のようにも思えて取えて筆にできなかったが、読者の方のうちに、この時の彼女の髪型や容貌が、最初の比較べて、幾分変わっていることにお気付きの事と思う。

精しく説明すると、六月号に於ける「目下飼育中」や「影法師」それに台所のガスコンロを引曳り出してきて体にのせた「白く輝くもの」七月号の「滅茶苦茶」八月号の「ハンガーを用いての縛り経過」九月号の「鼻責め二題」。以上は第一回撮影のものである。

七月号のローソクを使った「燭台」九月号の「珍妙な飾物」「海老責」が第二回撮影のものである。が、最初の撮影では殆んど顔をかくしていた彼女が、私の頼みで第二回は顔を洪々曝した。しかし、彼女は故意に眉毛を太くつくり、眼隈などでわざとまずい化粧をして、すっかり容貌を変えるだけの、細心の努力を払っていた。

この時の撮影のものは、何れ回を重ねて、



又、奇クのグラビヤを賑わすことである。

近藤一氏外、読者通信でも東浦ひかるについて、いろいろ御批判もあり、箕田編集長からも尻をつつかれ乍ら、私の重い腰が仲々にあがらず、やっと、その気になった折も折、東浦ひかるから一風変わった便りを貰って、恰度いい機会と許り、不精な私もどうやら逢う腹をきめた。

○

午後一時、阪急梅田のK喫茶で、東浦ひかるは私を待っていた。イエローの夏着も涼やかに、ひだの多いプレーツスカートを金色の細いバンドでぐっと胴を締め、素脚に桃色のサンダルシューズの軽やかな装いは、誠に印象的だった。

かなりポリウムのある彼女なのに、妙に細っそりとした。室内の冷房が、熱気のもった私の皮膚に快よく泌み亘っていった。彼女は私の近づく姿を逸早く認めた時、心持ち、緊張と羞恥に顔をこわばらせ、泣き笑



いのような表情で私を迎えた。第二回目のカメラに納まった時から、既に四カ月の月日が流れている。

懐かしさと四カ月の空白が、微妙に交錯して、私達はしばし無言で相手をみつめた。

「奇クのグラビヤ見た?——」

「ええ、見たわ、でも、なんだか、私と違ってみたいで……」

「そうかなあ。まあ、まあ、うまく撮れたつ

もりなんだけど、気にいらなかったかな」

「ええ、はつきりとはうつっているわ。だけど、何かしら自己嫌悪を感じちゃって……私って、こんな嫌な顔をした女だったのかしらって……」

「あの時の化粧のせいだよ。今の貴女のその素顔なら、うんと引立つただけどなあ」

素顔とはいって見たが、ひかるは、その日はカラー化粧に、薄色の目立たぬ紅をさしていたし、気付かぬ程度のアイシャドウをも施していた。おとなしい家庭の娘の、これが

が精一杯の晴化粧だったかも知れない。私は、不躰けに、ムードある喫茶にふさわしくない言葉を端的に切出した。

「先日のお便り拝見したよ。東浦さんの御希望の、緊縛された上から服を来て、街を歩いて見たいという、あれ、今日やって見ていいの?——」

ひかるはパツと頬をそめ、あわててうつむいた。無意識にコールコーヒのストローをく



るくる指に巻きつけたり、伸ばしたりして、被虐の想念に沈思した様子だった。

「でも……実際には不可能なんでしょう」

小声でいって、ひかるは私の想念を推量するように、そっと上眼をつかった。

「両手を後手に縛って、なんてことは衆人環視の中では不可能だね——だけど、限界ぎりぎりまでは出来ないこともないさ。OKなら早速席をかえて実行にうつすよ——だって、君の手紙、ここに持ってるけど、人眼に曝されて、例えば心齋橋筋を縛られた儘歩いて見たい——そんな被虐の願望が、レター一杯に書かれてあったじやないの。まあ、いろいろと想像は自由だが、生憎と私は専ら実行派の方でね」

「……………」

「勿論、白昼、貴女を後手に縛って街を歩ける筈もないよ。常識の問題だ……。まあ、私に任して御覧——。貴女の望みの幾分かは叶えて上げられると思うから……」

「莫迦な変った女と、笑っていらっしやるんじゃないの——」

ひかるは、そっと両手で臉を覆った。

「とんでもない。暑く苦しい不快指数を吹き飛ばしそうに気分爽快ですよ」

「貴方が『わたしを責めて下さい』の文章でお書きになったように、本当に私、魔性なのかしら——」

「誰にだって、ハイド氏の心はあるものですよ。貴女だって私だって……。この喫茶で、声を密めて、こんな話していったって、はたから見れば、中年の男と若い女のデートのたのしいひとときにしか見えやしない」

「危険な橋を渡って見るわ。わ、た、し」

ひかるはつぶやくようにいった。

私達は肩を並べて喫茶を出た。

実行の道程へ急ぐ為に——。

○

味のデパートと銘打つM館は、こじんまりとした食事の為の個室が一階、二階、三階と数知れずあった。

注文の料理を運び終ると、呼鈴を押すまで誰もやって来ない。食事に事よせて、安直な刹那の情事を愉しむ若い男女もかなりある、という話である。私達も食事かたがた、この狭苦しい粗末な密室を利用した一人に過ぎないのだから、あながち若い連中の事もとやかく言えない。

とあれ、私とひかるは勿々に軽い食事を済ますと、仕事にとりかかった。

「客がこんでいるようだ。愚図愚図しているといつ追い立てられぬとも限らんからね、さあ、早いとこ脱いだ脱いだ——」

私はひかるの羞恥をさっと振切るように、命令口調でいった。声につられて、ひかるは一瞬躊躇したが、思い切ったように素早く次々と脱いでいった。水色のパンティ一枚になって跣まる彼女に私は素早く近づいて、両手を軽く横に上げさせると素肌の乳房の上に二巻き、細目の縄をまきつき、乳房の下で更に二巻きして、乳房の谷間で結んだ。その縄を臍の辺りまで二線に伸ばし、腰で再び二巻きした上、股に廻して結びをつくり、その儘臀部の合間から背に締めあげて、努めて結び目を小さくして繋ぎ止めた。首縄にしたかったが、夏の薄着では、襟から覗くおそれもあるので、残念乍ら胸から下にしたのだ。

ひかるは一、二歩いた。

「大丈夫、大急ぎで元の通り着るんだ。但しブラジャーは、つけない——。貴女の希望だからね」

私にいわれる迄もなく、急いでひかるはシユミーズをかぶりブラウスに手を通した。後ろに廻って私もホックをかけるのを手伝ってやる。



ふち飾りのついたブラジャーを小さくたたんで、ひかるはハンドバッグに押し込んだ。

「〇嬢の物語」のどこか似かよった一節を想い出し乍ら、私はこれから二人で心齋橋筋の雑踏と人の浪に揉まれようとしている。

○

乳房の上下で締めつけた縄の強さが、ひかるの服の上からでも胸部をぐんと大きく張りさらせていた。

ひかるはぎこちなげに、そろそろと小股で歩を運んだ。時々腰を撫でるのは、腰縄の上からしめている金色のベルトが、縄に擦れ合うからであらうか――。

時折、無意識に彼女の手は、プリーツスカート裾を押えていた。

「秋ぐちになって、そろそろオーバーの着る頃になると、縛った素肌に、じかにオーバーを羽織るのさ。悪くないよ――どう？」

ひかるはキラキラと瞳を輝かせ、じっとりと汗ばんだ顔をハンカチでぬぐい乍ら、かすかにうなずく。

戒橋のたもとの喫茶で小憩した。

ひかるは、数度腰をもじもじさせ、やや両脚を開き気味にして、椅子に腰を落した。

「気分はどう――」

私はわざと冗談めかして笑ってきく。

「汗でべっとりよ。それに股ずれしたのかしら、ヒリ、ヒリ痛むわ……」

ひかるはさも息苦しげに、胸を弾ませ、両掌をぐりぐりとテーブルで揉みつけるようにして、感情の昂ぶりを押えていた。紅潮した頬は、あながち暑さのせいだけではなく、被虐の想念の流域を遊弋しているに違いなかった。

私は辺りを見廻し、他のテーブルの注視のないのを見定めて、扇子をそっとテーブルの下で開き、バタバタとスカートの下からあおいでやった。スカートの裾がゆらめいて、ひかるは慌てて両脚を揃えた。

「バカねえ――。変なことしないで――」

ひかるは羞らい気味で、めっと軽くにらんで私をたしなめたが、チラッと眉をしかめて苦しげだった。

服を通してそっと肌に触れて見た。縄の堅い感触を指先に感じて、それが意外に強く、深く、びったりとひかりの胸に喰い込んでいるのに驚きに、私は慌てて立上った。

苦しげに息を弾ませ、のろのろ歩くひかるに私は手を貸して、ようやく御堂筋で車を拾った。クッションにぐったりともたれて彼女

は肩で息をしていた。心持ち顔が蒼白めてくる。

「病人なんだ。どこでもいいから、近くのホテルへつけてくれ給え――」

私はあたふたと運転手に叫んでいた。

「もう少し、辛抱出来る？」

「ええ、大丈夫よ。暑いのと疲れたのとで、息苦しくなってきたの。すこし、きつすぎたのよ。ちっとも加減なさらないのね――」

「いいよいいよ。そうそうに解放してあげよう」

私達のこの会話も、運転手にとっては、無意味な睦言の一種としか聞きとれないのだらう。

駐車場所に途迷い乍ら、洪水のような車の浪をぬって走っている。

ひかるは眼を閉じて、しきりに胸の辺りをこすっていた。縄の位置を少しでも変えて、ラクになりたがっているのだ。

投げ出した両脚は、知らず知らずかなり大またに開いていた。おそらくそこへも手をやりたいに違いあるまいが、私の手前、流石に手をやりかて、辛うじて腰を蠕動さすだけでこらえていた。

○





ホテルの一室、連れ込み旅館特有の、狭い場所を精一杯に活用した、ゆとりを忘却した個室であった。不完全ながら冷房が、ようやく私達を暑さから解放してくれた。

事実、ひかるはすべてから解放されたかのように、ほっとした姿で椅子に脚を組んで座っていた。

縄目の跡が、桃色づいて、白い肌に見事に

浮彫のように、胸に腰に、くっきりとしるしを残していた。

一時間以上の散策の跡型は、消えるべくもなく、ひかるの肌を線条に染めていたのだ。

「気分はどう？」

既に何度目かの同じ言葉を、再び私は投げた。

「すっかり、よくなったわ……」

ひかるは大胆なポーズで赤裸々に立上ると、うーんと大きく体一杯にのびをした。

「フィルム一本ぐらいなら、いけそうかい」

「……」

ひかるはそれに応えず、

「もうお湯が入ったでしょう。」

私、失礼してちよっと汗を流してくるわ——」

と、狭い浴槽の扉をあけていた。無言は肯定のしるしである。

何分にも狭い一室のことだから、大したポーズもとれない。私も相当暑さと気疲れで参っていたし、フィルム一本が関の山だと、のろのろ仕度にかかった。

ひかるは鳥の行水で、四五分であがって来た。素顔に還って、湯上りのテラテラ光る頬が、瑞々しく新鮮に部屋の灯りに映えた。

「やっぱり撮るのね？」

「いけないかい——」

「フフ、いけなくなんかないわ。だけど、顔をうつすんでしよう？」

「そりゃあね……」

「だったら、わたし、魔女の御化粧をしなくちや」

「してやろうか？」

「いいわ、自分でする。うんとどぎつく、まずくネ」

ひかるは眉棒をバッグからとり出すと、ぐいぐいとこすりつけるように太く描いた。瞼にも黒く目張りを濃く入れた。半ば濡れた髪を故意に真中からわけける——。真赤な口紅を唇からはみ出る程にぬりつける。

「どう、いやな女になったでしょう」



「どうして、そんな変な顔にするの？」

「顔をうつすからよ——」

「だったら、素顔の方がずっと美しいのに」

「分りきったこと聞かないで——私の普段の顔じゃ困ることぐらい、わかってそうなものよ。フフ、これはハイド氏の顔よ」

誠に女は不思議である。眼を閉じたひかるの顔は、まるで別人のように毒々しく不自然だった。私は思わず口をつく嘆息と共に、モデルでない、いわば一女性読者の心理の葛藤が分る気もした。

「何しろ狭い部屋だから、自由がきかない。大撮して行くよ。」

無地の壁をバックに、私は腰掛を据える。

「この腰掛の上へ、行儀よく向うむきに座って御覧」

「これでいい？」

ひかるは私の指図通りに腰掛けの上に行儀よく正座した。

腰に縄を廻して、腰掛に通し、正座のまま動けぬよう固定すると、別の縄で両手を後ろに縛って、これも腰掛につないだ。

「わたし責めて下さい——、これが貴女の本心だ。そうだろう——」

「……………」

ひかるは急に何をいい出したのかと、私の方を振り向いてニコツと笑って肯定する。

私はひかるの赤い方の口紅で、彼女の背に「わたし責めて下さい」と二行に書いた。

「あらッ、何と書いたの？」

「わたし責めて下さい、ってね。いいだろ」

「改めて宣言したみたい——」

「これを最初に思いついたらね」

私は真赤に背に書いた文字に向ってシャッターを切った。

その姿の儘で、よいしょよいしょと腰掛を一廻転させると、正面を向いたひかるの胸に更に太く大きく「わたし責めて下さい」と三列に書いた。ひかるは私の為すが儘に眼を閉じている。毒々しい顔に隠れた、一枚下の可憐なういういしい顔が、閉じた眼の蔭にフツと浮かび上る。

神妙な、任せきったひかるに、私の嗜虐の心は拡がる一方である。

かねて作っておいた鼻環を、ひかるの鼻孔を拡げて挿入した。

「あッ——」

ひかるは驚いてパッチリと眼を見開く。

「鼻環だよ——よく似合うよ——」

私の嗜虐心が、ひかるの人格を無視したよ

うな言葉を平気で吐かす。鼻孔の左右から喰い込んだ環の尖端が、彼女の鼻障子を刺激するのか、彼女はしきりに小鼻をピクつかせている。

観念して閉じた眼の鼻責めの姿を一枚——

鼻責めは、多分に私の嗜虐心をそゝった。

腰掛けの縄を解き、書いた口紅を拭き落して今度は立ち姿で、前両手縛りにして、鼻環に更に縄を通して引張る。

鼻環の縄を引張ると、彼女は眉をしかめ、痛みをこらえて、鼻環につれて顔を突出してくる。鼻環の縄を引っ張って、縛った儘の彼女をぐるりと、狭い部屋で一周させる。

ポーズのいいところでシャッターをきる。

ひかるの顔から羞恥が消えて、マゾの愉悅が占め始める。

「こうして、心斎橋筋を歩いて見たいと思わないかい？」

「思うわ」

「調教師が、貴女のお尻をピシピシ鞭で打って引き立て、行くのだ。首に「わたし責めて下さい」と札をぶら下げてね——」

ひかるは肩をびくびくと震わせる。息が弾んでくる。そして無言……。暗示にかゝったように、部屋の中央に佇立して、さながら心





齊橋筋を引かれゆく女の如く首を垂れる。

閉じた瞼の奥が、そのありうべからざる状態を幻想しているに違いない。

既に半刻前、厳しく全身を縛られて、その雑踏を彼女は縫って来たのだ。幻影がダブツて、マゾの想念は自虐の浪に身を委ねているかのようである。

「貴女は戎橋の橋の真直中で、人垣に取囲まれて、叫んでいる。誰でもいい、私を責めて

の怪に憑かれたように、二三度大きくうなずいた。

「そうに違いない——。叫んで御覧、叫ぶんだ。貴女の願望を、責めて下さいと」

「責めて下さい……いいの。いゝのよ——。私は責めてほしいの。明け暮れ、その思いで一杯だったわ。今日の日が、どんなに待遠しかったか……」

うわ言のように、ひかるは瞼を閉じてつぶ

下さい。責めて、責めて、死ぬほど責めぬいて下さいと絶叫している——」

「……」  
「事実、貴女は、責められることを望んでいる。責めて欲しいのだから。そうだろう？」

「……」  
ひかるは物

やく。本心を吐露する、それはマゾの赤裸々な姿に外ならなかった。

「悠紀子さんのように吊ってやろうか——」  
「吊って……お願い。何故私を逆吊りにしないの。沢山の人の見ている前で、逆吊りにしないの……」

「ようし、同好の士を集めた真中で、お前を血のしたゝる程、鞭でなぐってやる——」  
「いゝわ。いゝわ。皆の见ている前で思いきりぶって——」

「荷物のように、雁字搦目にして、泥にまみれさせて引ずり廻してやろう——」  
「覚えているわ。大塚さんが泥にまみれて、のたうち廻っていたあの写真を——」

私は催眠術を使っていない。併し、ひかるの如く、自ら責められるのを喜ぶような典型的なマゾ質の女は、私の暗示に易々としてかゝり、うわ言の様にくり返して叫んでいるのだ。私はひかるを更に改めて後手に犇々と縛り、腹で菱形にして股縛りをした。鼻環は相変わらず箠めた儘であった。

無残な形態が脳裡に去来して、私は新らしくフィルムを装填した。

転がし、引曳り、狭い部屋を転々と反側するひかるを、私は凡ゆる角度からカメラに納



めた。そのすべてを、ここに発表出来ないのが残念であるが――。

激しい歡喜が汐騒のように去って、ひかるは静かに床に打伏していた。

縄を解き終っても、彼女はその儘身じろぎもせず、粗い息を肩に現わしてしばし妄想の浪間にただよっているかのようであった。

○ 浴槽で汗を落して戻ると、ひかるは濃い化

粧を拭いとり、いつもの素顔に還っていた。先刻まで悶え、叫び、愉悦にのたうち廻ったのが、まるで他人の様に思えた。

「疲れた？」

「えゝ、少し……でも――」

「でも何だい……」

「満足だったわ」

ひかるは消え入りたい風情に小声でつぶやくと、そそくさと衣類をつけ出した。



おこりの落

ちたあとの空しさ、白々しさが私にはやり切れなかった。それは恐らく、ひかるにとっても同じ事が云えるだろう。

否、ひかるは一応願望を達してはいたが、私にとつて、今の状態はさながら、

不燃焼化合物が、身内にもややくすぶっている様であった。はかし切れぬ残渣をその儘かゝえ込んで、私達は部屋を出た。

▲唯一の心配は、私を縛った上で、ひかるの体を汚さないだろうかと言うことです。私の意に反した行為をなさらない、信用出来る男性の方をお願い申し上げます。▼

最初に受取ったひかるの便りの、この一文が、いつも鉄壁のように身内にのしかゝって私は我儘な心を押さえ続けている。

▲余りにも紳士ぶって、これじや自縄自縛、むしろ、ひかるは、私の積極的な行動を心ひそかに待ち受けてはいないだろうか▼

私は、悠紀子の場合も、今又ひかるの場合も、いつも憶病になり勝ちで、あたちヤンスを逃がしているように思えて仕方がない。嗜虐が一種の代替行為の役目を果しているとすれば、又以て瞑すべしであるが――。

私が望めば、ひかるとは又逢えるかも知れない。併し可憐なひかるに対して、私は矢張り善良な紳士でありたいとねがっている。

△編集部注△ 十月号のグラビヤ写真で辻村隆氏提供の「鼻環の引廻し」三枚が掲載されていますので御参照下さい。

新しい風俗文献研究誌

奇 譚 ク ラ ブ

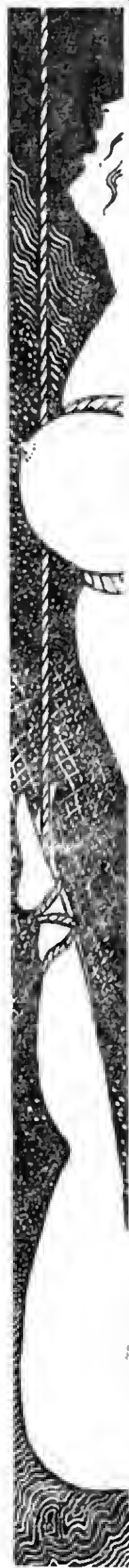
新装十一月特大号

1961年 11月 号

(第15巻 第11号 通刊第159号)







## 奇譚クラブの性格について

「エロ」も「文献」も

### 衣 軍 一

先ごろ「奇譚クラブがエロ雑誌である」と云う投書について「いや、エロ雑誌ではなく、文献雑誌である」と云う趣旨の文章を拝見した。そこで私も、さてどちらなんだろうかと考えてみた。その結果到達した結論は「両方とも本当らしい」と云うことであった。

エロという言葉の語源について調べてみたことはないが、エロスⅡキューピットに似ているところを見ると、本来は私たちがいま使っている言葉よりはいくらか品のいいものなのかも知れない。しかし現在私たちが使っているエロという言葉は、性的欲望、それも「劣情」と云ったような、あまり上品でない性慾を刺激するもの、そう云うものを表わす言葉として使われているようである。少くとも私

などは、そう云う受取り方をして「エロ」という言葉を日常生活の中で消化している。もっとも性慾に上品も下品もないかも知れないが、性慾にも種族の保存のために絶対必要な、ギリギリの線のもの、そうでもない、むしろその乱用に属するものがあるようだ。そしてこの乱用が結構楽しい。これも神の恵みだとさえ思える。神の恵みだとすれば「上品な」必要ギリギリの性慾も「劣情」も五十歩百歩なのかも知れない。

ところで奇譚クラブの読者が、それを買って最初の一ページをひるげるとき、果して性的刺激というものを全然期待していないものだろうか。まず飛び出してくるのは裸形の女性が、あられもなく縛

られている写真や口絵である。私などには非常にエロチックにみえる。むしろそういう口絵や写真がなければ淋しい。しかも普通の雑誌では裸はただの裸だが、奇譚クラブにおいては裸のうえに縛ったり、鞭打ったり、つるしたり、人間……といったはいいすぎかも知れぬが、我々の中にある変態趣味を満足させてくれる。縛ったり鞭打ったり、同性が愛し合ったりしない、ふつうの男女の仲を正常とするならば、女を縛りたがったり、切腹したり、ふんどしをするのとは異常な性的刺激を覚えると云うことは、やはり変態性慾の一種と云うべきだろう。私たちが奇譚クラブを買い求めるのは、このような異常性慾に対する刺激としてのエロを期待するからではないのだろうか。私は奇譚クラブをひろげる時、半ば以上変態的エロを期待している。もしこれがなければ奇譚クラブがいかにも淋しくなることか。そう云う意味で私は「奇ク」をエロ雑誌だと思っている。

ついでだが、変態性慾者と云うと、それだけで犯罪者のごとく顔をしかめる人もいるようだし、またそう云う一般的空気に気押されてか自分の変態的傾向を「変態じゃない、変態じゃない」と一生懸命否定して力んでいる人がいるらしいが、これはこっけいだ。自分の性慾の在り方が少しでもノーマルでないと気が付いたら、へんに力まずに、その事実を卒直に認めることだ。自分が変態だからと云って客観状況に何の不都合も起りはしない。人間の性慾は万人がみな同じものを持っているようにみえるが、その現れ方はまことに複雑微妙だ。これはもともと造化の神の手に属するものだからなのだろう。無味かんそうな正常型から、ある意味では非常に尖鋭化され高度化された変態まで人の性慾は複雑な現れ方をしている。自分の性慾が類型的に変態の中に入ると云って、その事実を否定してみてもはじまらないし、変態である自分自身をいやがる必要もない。まして自分を変態であると認めることが、自分を犯罪者の仲間入りさせるような気になることなど毛頭ないのだ。犯罪と云うものは、

変態とは何んの関係もない全然別の面、別の性格によって起されるものだとは私は確信している。変態でない正常な性慾による恋愛関係や三角関係によっても往々、犯罪は起されるし、また利権慾や、名譽欲によっても、殺人や傷害が行なわれている。要するに、変態であらうとなかろうと、何かのショックや慾望に対して自制心を失ってしまいう弱い人間が犯罪を起すのだと思う。私は自分のことを変態だと思っているが、決して社会の正義に反するようなこととはしないつもりだし、自然を統べ、人間の性慾にすら、このような多様性を与えてくれた神を信じ感謝してもいる。

話がわき道にそれてしまったが、要するに私は奇譚クラブがエロ雑誌としての一面を持っており、しかもそれが特色であり、それはそれで一こう差しかえないと思っている。「谷崎の『鍵』が中央公論に連載されたからといって中央公論をエロ雑誌だとは誰も云わないだろう」というようなお話もあったようだが、これについては私は中央公論と奇譚クラブを同じ土俵の上にのせて論ずるのは、ちよっとムリな議論のような気がする。「中公」と「奇ク」は発行の目的もねらいも違ふのだ。人間の生活や性格にはいろいろの面があって、ご飯も食べれば、酒も飲み、また宇宙ロケットや世界の情勢について議論したりもする。そしてまた夜ともなれば奥さんを愛したりもするのである。中央公論はこの議論の方の面、知の面をねらいとして売っているのであり、奇クは夜、奥さんと二人きりの時の面、性の面とでもいうべき面を受け持っている、といっていると思う。従って売る方も買う方も「奇ク」と「中公」ではその目的が違ふと思う。「中公」を読む時の読者は例えばエドガー・スノーの毛沢東会見記から激動する世界情勢の中での中共の将来の動きをさぐろうとし、トインビー博士の言葉の中からケネディ政権の行く手を考えてみる。「中公」を購読する目的はそういうところにあるのであって、たまたま、連載小説が「鍵」であったとしても、それは「中

公」本来の目的とは違ったおそえものなのである。しかし人間はそういう議論をしたり、評論を読んだりするだけでは満足できない。知識欲とともに食欲も性慾もある。しかも私を含む「奇ク」の読者のほとんどは、その性慾が大なり小なり異常であり、変態的であると云っていいと思う。そのような異常な性慾に投じたのが、奇譚クラブなのであって、そこにこそ「奇ク」存在の意味があり、我々が「奇ク」を買う目的は、正直なところ「変態的刺戟としてのエロ」を期待してであると思う。「奇譚クラブ」は「中央公論」や「世界」とは目的の違う、「エロ雑誌」でいいと思う。

一方、私は奇譚クラブの文献的価値も決して否定しない。むしろ高く買っている。しかしその価値は奇クの中の小説や創作からではなく、多くの場合、読者通信と告白から発見される。私は読者通信を読んで人間の性の複雑さにびっくりする。私自身はふんどしを締めることに異常な性的魅力を感じ、また女をふんどし一本にして縛っていたためつきたいというサディズムとともに、裸の自分を責めたいというマゾヒズムがからみ合った、複雑な変態性慾を持っているが、芯になっているのは「ふんどし」に対する異常性だと思っている。しかし私は、以前からふんどしに魅惑されるものが私一人だけだとは決して思っていなかった。この広い世界のどこかに、必ず私と同じような性癖の者がいるに違いないと確信に似た気持を持っていた。人間の性がいかに多様であっても、それは必ずいくつかに類型できるものだと思っていたわけだ。しかもふんどしは男がするものとされているが、ふんどしを締めることに対して強いよろこびをいだくものは、男ばかりでなく女にもあるのではないだろうか、九千数百万の日本人のうち半分を占める女性のうちの何パーセントかに同じような性癖のものがいるのではないだろうか、と信じていた。これは女性の中にも男性と同じようにサディストもマゾヒストもいるということから類推したわけだ。

果せるかな「奇ク」の投書の中から男性はもちろんのこと、女性のフンドシ・ファンがいることを知って、私は「やっぱり思っていたとおりだ」と思わずニヤリとしたものだ。変態性慾の研究というのが、心理学なのか生理学なのか、或いは医学の分野に属するものなのか、私はよく知らない。しかし変態性慾を研究するものにとって奇譚クラブの投書が提供する資料の価値は相当大きいのではないかと思う。そのような意味で私は「奇ク」の文献雑誌としての面も高く評価しているのである。

要するに私はこの文章の冒頭に述べたように「奇譚クラブはエロでもあるし、文献雑誌でもある」と思うのだ。どちらかでないければならないことはないのであって、どちらか抜けてしまっても、奇譚クラブは本来の面白さを失ってしまうのではないかと思う。私などは、自分自身が変態なのであって、別に変態性慾を研究しようという気もないから、「奇ク」の資料的価値は認めながらも、むしろそのエロの面からの刺激の方を楽しんでいる。エロであっていけないなどということは一つもないと思う。「英雄色を好む」ともいうではないか。「奇ク」からエロが抜けてしまったら、私は「奇ク」を買わなくなるだろう。

しかし「もっとエロをどぎつくしろ」というご意見に対しては、「これは編集方針にまかせるべきだ」と私は思っている。奇譚クラブの編集、発行当局者といえども、奇クを発行し売ることによって収入を得、メシを食い、妻子を養わなければならぬ、と考えるければならぬだろう。だとすれば、エロをどぎつくし過ぎて発禁をくらったり、発禁ぐらいならまだしも、廃刊にでもなるようなことになれば、編集者はたつきの道を考え直さなければならなくなる。またあまりそのことにこだわりすぎて面白くないものを作れば売れなくなる。編集者は取締り当局の顔色をみながら、読者の要望もいれ、行きすぎにならぬよう、つり合いのとれたところで編集し



てゆかなければならないわけだ。ゆきすぎて本が出なくなれば、編集者はもちろん、読者にとってもアブハチとらずだ、まかせておけばいいと思う。

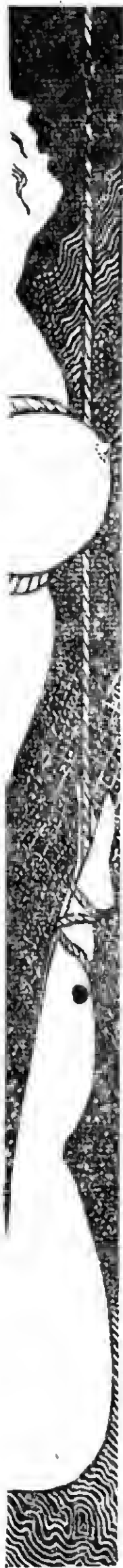
このことに関連して、私がかつとも恐れるのは、エロ雑誌の行き過ぎが言論統制復活のキッカケを作らないかということだ。いまの日本ほど自由にもののいえる国は恐らくないだろう。右にしろ左にしろ、しゃべり放題だ。ダンスをしていたというだけで逮捕され裁判にかけられたという軍政下の韓国は論外としても、ソ連や中共のような全体主義の国からみれば、しゃべれる、書けるということに關しては我々は天国にいるようなものだ。このような自由な状態を永久に続けさせたいと思う。しかし破防法、警職法騒ぎから、安保デモ後の政治暴力防止法案と、遅々としてではあるが、“自由の行きすぎ”取締りの動きを示している。この程度ならまだいいしたことはないし、むしろ当然と思う面もあるが、兎に角、行きすぎは禁物である。取締り当局や、為政者だって利口な奴ばかりではない。どんなことで折角の言論の自由をだいなしにされるかわからない。私はこの際、全エロ雑誌に警告したい。「行きすぎて言論統制のキッカケをつくるな」

最後に「奇ク」への注文をつけさせていただくならば、もう少し読者の体験、告白の面を広げた方がいいのではないか。体験や告白の方が、小説より迫力を持っているし、ここにこそ資料、文献としての価値があり、「奇ク」本来の面目があると思う。もっとも、これは小説が小説ともいえないようなものが多いからかも知れない。

小説家でない読者が書く小説だから仕方がないといえばそれまでだが、あまりにもひどいものが連載されている。しばったり、鞭打ったりする場面をただ羅列するだけで、そこに何の必然性もなく、そんなものを読んでいる自分が情けなくなってくるようなものがある。変態は変態なりに“こういうこともあり得るだろう”と人生を感じさせないまでも、人を納得させるような小説が欲しいと思う。それが望めないとするならば、むしろ体験や告白の方がずっと面白いし、説得力を持っている。その意味で私は読者通信欄をもっとひろげた方がいいと思う。この欄からうかがえるいろいろな人の性癖はそれ自身貴重な資料であると思うし、これは「奇ク」創刊当初のころには思ってもみなかった財産なのではないかと思う。

さし絵はだんだんによくなっているが、まだ内容にマッチしない下品な絵が散見される。写真は号を追うごとに“もっとどぎつく”という要望に近くなって行くようだ。人の慾望はキリがないもので、きょうドギツイものも、あすはなれっこになってしまふ、公刊される雑誌なのだからドギツきにも自ら限度があるとは思いますが、兎に角、写真はある程度ドギツイ方が魅力があると感ずるのは仕方のないことだろう。しかしくれぐれも行きすぎは禁物、“良識”のブレーキでバランスをとることが必要である、読者のいうことばかりきいてもいられないところだろう。

以上まことに自分勝手に、ドグマだらけ、首尾も整わない乱文だが「奇譚クラブ」の永遠に続かんことを祈りながら。(おわり)



## 奇譚三十九夜物語

## 第八夜

辻村 隆

ゴルフ氏の渡欧、ワイン氏の胃潰瘍やらで八人の退屈男の会合は二回も、六月の豪雨のように流れて、今宵久し振りに全員の顔触れが揃ったのです。

日中の残暑も、夜のとばりと共に、流石にしっかりと涼を帯びてあながちクラブのルームクーラのせい許りでなく、紫煙の立ちこめる谷間を夜気がしめやかに漂っている気配でした。

一夏のヌーベルな乱痴気振りに、銘々の話は弾んだようです。今宵は、彼等の夏の想い出に物語の幕は揚げられる事でしょう。

ドクター氏が左右からけしかけられて、先ずその話の口火を切ったのでした。

謹聴々々——と、椰揄する声につられて、ドクター氏は、手にしたりキュールのカップを、徐むるにテーブルに置きました。

## 第二十一話 『甘い生活』が甘くなかった話

私の友人の芥川が内科、小児科を開業してはおりますが、医院は余り流行ってはいらないのです。彼が警察医になってからは、まるで見当違いの、法医学にすっかり興味をもったからです。ひぐらしのかしましい夕暮れの六時頃、彼のクランケのひとりである、及川義雄の、突然の訪問を受けた時から、このセミ・ショートの異様な物語りが始まりました。

「一体どうしたんだね？」

芥川医師は、一風呂浴びて、冷えたビールをグイと一杯呑みほした折だけに、この突然の訪問者に、稍不気嫌そうに云った。裸にあ

わてて引っかけた白衣がどうも暑苦しい。

「先、先生——。女が殺されたんです。僕は、そ、それを目撃したんです」

「何だって！ 女が殺された？……」

「え、その現場をすっかり見たんです——」

「そいつは大変だね。だけど、それと私と何の関係があるんだい」

芥川医師は、既に警察医の本能にめざめて、内心すっかり緊張していたが、及川義雄の蒼褪めた落着きなさに、フト異様な関心を抱いて、努めてそっけなく云った。

△この男は、確か、組合管掌の保険で、以前に、アデノイドで一度と、軽度のノイローゼで一度と、そんな程度の、極く、ありきたりのクランケとして取扱ったに過ぎない奴だ。それが、斯うした重大な殺人事件に、何でこの儂を訪れる必要があるんだろう▽

芥川医師には、何かこの男が迂散臭く思えた。殺人などは、誰しも当然、一一〇番へ知らせるのが、定石ではないだろうか。

「警察へは、勿論連絡したんだろうね？」

さりげなく老練なドクターは訊ねた。

「いゝえ、すぐ先生のところへ駆けつけたんです——」

何故か、及川はおどろくしていった。

「可怪しいじゃないか。チョトと筋違いとは思わんかね——」

「それが……そうです。そのことで、先生におたずねしたいと思っただのです。実は僕……」

そこで彼は陽に焼けた黒い顔を赤銅色に染めて、云い難そうに小声になった。

「覗いていたんです。まさかこんなことになるうとは、夢にも知ら

なかったものですから……」

「覗いている目前で、殺人が起ったと云うんだね……」

「そ、そうなんです。あの女の生活が、余りにも異常なもんですから、つい……」

「と云うと、何回も覗いていた事になるね」

「え、よくないと知りつつ、時たま何かに憑かれたように、覗かずにはおられなかったんです。覗きが、犯罪であると知りつつも止められなかったのです。そして、今日、それもほんの半時間許り前、僕は、その女が殺された瞬間を判っきり、目撃したんです。先、先生——。僕の覗きは罪になるでしょうか……」

「すると覗いた行為自体が怖くて、警察に届けられなかったと云うんだね。よろしい、分ったよ。君の罪なんか軽いものだ。儂が何とか繕ってやろう。その目撃の様子をすっかり話して見給え」

芥川医師は、覗きと殺人と云う二つの囁み合せに激しい興味を感じて、ビールが生ぬるくなっている事もすっかり忘れていた。

「おーい、夕方より休診だ。札を吊しておけ——」

奥へ怒鳴ると、扱てと、及川義雄の口述の要点を書き出した。

……………

及川義雄は外販専門の化粧品店のセールスマンだった。如才なさ、独身と云う切札で、相当の実績をあげていた。

美濃部しのお未亡人が、彼の上得意となったのもそんなわけで、彼の爽やかな弁舌と如才なさ、それに頼まれれば厭な顔もせず、雑用を引受ける腰の軽さに由来しているのは云う迄もなかった。

しのお未亡人の邸へ屢々出入するうち、彼女の夫の遺産が相当なこと。それを程よく株や債券に廻して、結構懐ろの豊かなことも、

彼の職業のカンから、すぐ知り得た。

閑を持て余し、子供のない気安さの、女中と老婆の三人暮しの、三十五才の美しい未亡人なら、及川ならずとも、触手の動くのは当然の事である。

小当りに当って、彼はものゝ見事に、冷然とハネつけられ、冷たいまでに冴えた美貌のしのお未亡人を改めて見直した思いだった。お出入もさしとめられそうだったが、それは彼の必死の工作によって、辛うじて保つ事が出来た。

そんな及川に、しのお未亡人はたった一度だけ、フト魔がさした様に、手紙を投函して呉れとのことづけをした。彼は封をしめらせて、内容を見た——。簡単な文面で、三日の夜九時にお待ちしますとだけ、筆跡もうるわしく、認められてあったが、彼は、その文面から、これが最初のものでない事を直感的に覚った。

宛先は有名なA証券、総務課瀬川満様になっていた。

▲まさか、株式の取引のことで、夜の九時に逢う必要もあるまい。とすると、これは出来ているな▼

及川は敏感に、思いを走らせた。取引からいつか情事へ——。

▲こいつはありそうなことだ。この俺だって、セールスから情事へつながった過去を辿れば、三度や四度の機会ではなかった筈だ▼

彼は、冷めたく取澄したしのおが、株屋の男と逢ったときの姿を想像して、胸が熱くなった。

▲どんな女だって一枚皮をめくれば同じものさ——。きっとあの女だって変りあるまい。まして、あの若さと美貌では……▼

及川は、しのお邸の大体の間取りは知っていた。八帖の座敷に続く洋間が、彼女の秘密をはらんだ居間であることも——。

この居間は、玄関からは最も奥深い位置をしめている割に、裏手に廻ると茨の薔薇垣一つで、隣家に接していた。隣家との間の細い溝が、両家の境界線でもあるらしく、人間一人辛うじて通れる隙間がそこにあった。茨を少し剪手して、かきわけてさえおけば、彼女の寢室の窓ぎわに出るのはわけもない事だった。

三日の夜までに、及川は人にさとられず、垣根を工作して、通り抜けられるようにしておき、パイプの伸縮自在な軽便梯子を持ちこんでおいた。女中も老婆も、この裏側へ廻ってくる用事が滅多になんない事も知っての上の計画だった。窓硝子はダイヤ硝子で、しかもカーテンがたれている。独り寝の夜はカーテンを開いても、微かな影のうごめきのみしか、外には洩れないが、当日の夜は、恐らくカーテンも、ヒタと閉ざすに違いない。ルームクーラーは、密室を作る方が効果があるのだから、窓は始終閉ざされているに違いない。

だから、彼の眼目は窓の上の、細い透明硝子の回転窓にあった。高い個所は概ね、透明であり、時には空氣の流通の為半開に廻転さえしてあったからである。

窓の横に梯子を伸ばし、そこから覗く——。

これで彼の計画は万事OKだった。

三日の夜、及川は黒シャツに黒ズボンの、闇にまぎれる、黒っばいいでたちで、既に早くから忍んでいた。独身の気軽さは、拘束する相手もなく、その点、自由で気楽だった。

▲情事のみを想像してこゝに待ったが、あの手紙は果してそれを意味したものだろうか——。或いは俺の思い過して、単なる商用に過ぎぬのではなかったらうか——。▼

うるさく、耳許で啼く、蚊の群と斗いつゝ、彼は、そうした、無



意味なせんさくで、随分と神経を疲らせ、そして焦燥した。

「まかり間違ったにしろ、こゝまで忍んだからには、彼女の寝姿を覗くだけでも悪くはあるまい」  
もと／＼彼は覗き趣味のある男ではなかった。世間によくあるデバカメニズムを軽蔑すらしていたのだ。その夜の彼は、しのぶ未亡人の秘密を掴みたい一心に駆られての行動であった。

九時の点鐘が何処からか微かに伝わって来た。

玄関の当りで、ベルの音——扉の開く気配——。彼方の応接間に灯が入った。

踊る胸を鎮めて、及川義雄は、梯子を音もなく立てかけ、一歩／＼ふみしめて昇った。

半時間——一時間——。応接間の灯が消えた時、彼も既に失望の底辺にあった。

「俺のくだらぬ思い違いだったらしい。あゝ、己れ自身に唾をはきかけたい位いだ——」

浅ましい黒衣に眼を落して、彼は自嘲した。刹那！——しのぶの姿が、スイッチの入った緑色の螢光灯の下に柔かく浮いて、その背後から、後めたい男の影が、滑り込むように部屋に流れ込んだ——。

及川の双つの瞳は、二人の姿を判っきりと回転窓より捉えた。

「フフ、俺のカンに矢張り狂いはなかったようだ。」



どうだあの二人と云ったら……」

及川の瞳の焦点を追ったところに、一つになった二個の物体が、狂おしいような接吻を繰り返していた。

「やっと逢えたわ——。早く……早く……」

しのぶは息も絶え絶えに歡びの声を挙げて、瀬川満の前で、一枚くかなぐり捨て、裸身を曝した。

「前に逢った時の責められた跡が、すっかり癒り切るまで二週間もかゝったわ。どう、鞭の跡型ひとつないでしょう——」

しのぶは、白磁の豊かな全身を、瀬川の前で踊るようにくるく廻してみせた。

「じゃあ、又、お気に召すまで御奉公致しますかネ。申訳ない」

ざれ口に、ニヤリと妙な笑みを浮べると瀬川はズボンを脱いだ。

既に用意していたのか、下にはピッタリと腿に吸いついた、黒いタイツが、一瞬にして、男をヘラヘラした株屋の男からサタンに変えた。

シャツを脱いで曝した男の肌は、ボデービルできたえた筋力のたくましさ、胸に腹に躍動させていた。

「毎度の奥様のおこのみによりまして、今宵はこのマスクで……」

云い乍ら、男は小型のバツグから仮面をとり出してかぶった。

△あッ、黄金仮面——。そうだ、ずっと以前に読んだ、江戸川乱歩の『黄金仮面』のルパンがかぶったあの面の挿画にそっくりだ。三日月に笑った細い両の眼、ニタリと耳まで裂けた赤い血のような毒々しい唇。俺は夢を見ているんじゃないだろうか——

及川はもう今は、しのぶの秘密どころではなく、梯子に懸命にしがみついて、息を殺し、これから展開するシーンを想像して、胸は

早鐘を打つようになり出した。

無表情に笑った黄金仮面は、緑の螢光灯を反映して、冷めたく淡々と青白い光を凝集させていた。何時の間にか、しなやかな革の鞭が、男の手に握られていた。

「這え！——」

押し殺した仮面の声が響いた。

しのぶは魂を抜きとられた女のように、易々と男の前に四肢を落して這った。

傲然と男はしのぶの背に跨がると、両脚を胸の辺りに強く巻きつけた。重味で、しのぶの体がぐらと揺れて、必死に四肢で支えている。

既に解きほぐした、黒髪がうなじに垂れているのを、一握みに片手で手綱代りに握ると、はちきれそうな豊かな臀部に一曳、鞭が鳴った。

「歩ゆめ——」

のろくど、しのぶは黄金仮面をのせて、じゅうたんの床を一步二歩と這い出した。

△こいつは凄い——。『甘い生活』だ。百万円出したって、滅多に見られないぞ——

及川義雄の眼はカッと血走っていた。喰いいらん許りに、彼の焼きつくような眼は、二人の姿を追っていた。ゴウと音を立て、彼の体中の血液が逆行する許りの好奇が彼を押しつゝんだ。

「のろい——もっと早く歩ゆめ——歩くんだ……」

容赦のない仮面の声に、息を弾ませ、声を挙げ、美しい顔面を紅潮させて、しのぶは、ドタ／＼と這い廻った。鞭が臀部にその都度

ピシリとなり、ピクリと体を震わせては、とめ度なく這っていた。汗にまみれた頬に涙が流れ、端麗なしのぶの顔は、ぐちゃぐちに濡れていった。

遂にしのは腰を落して伸びた。肩が浪打って、体中が激しくけいれんしていた。

やおら、仮面は立上ると、鞭に素振りをくれて、いきなり、しのぶの全身を巧みに打ち始めた。皮下脂肪の多そうな個所許りが、見る／＼み／＼腫れに腫れ上って行く。ヒイ／＼としのぶは絶叫して床をのたうち回って転げ廻る。白い肌に既に血痕が走って、鞭は限なく行渡ったようだ。

「ヒーツ、ヒーツ。や、やめて……」

それが限界か、仮面の男の鞭はピタリと止んだ。

しのぶは死んだように動かない——。その体をそっと抱き上げて男はベッドに静かにねかしつける。

仮面を外した男の頬も、汗と熱気で、真赤に熱している。男はベッドの横の大きな瓶から、ドロリとした油状の液体を掌にうけると、黙々としのぶの鞭痕に柔かく塗布して行く。

「あッ、ウーツ……」

と絶えいるような悲鳴がしのぶの唇から吐き出される。

男は終始無言で、その作業を終ると、しのぶの額にそっと唇をふれ、身なりをととのえて、

「お休みなさい——」

と何事もなかったように扉の掛金を外して出ていった。

及川義雄は、一部始終を驚嘆の眼で、凝視していた。断続してしのぶの耐痛の悲鳴が、きれ／＼に洩れる。

彼はどうして下宿まで辿りついたか、覚えもない。唯、夜中じゅう怪しい夢魔に襲われ続けていた。

翌日、彼は美濃部家を訪れた。女中が出てきて、奥様は御不快だと告げる。無理もないと彼は昨夜の幻の地獄図を想起した。

五日目——しのぶ未亡人は冷めたい微笑みを浮べて、彼の化粧品を幾品かを買求めた。既にいつもの彼女と何ら異ならなかった。違ふのは、暑い中にもかゝらず、手首までピッチリしたブラウスに、長い床にひきづるドレス様のものを纏っていたことである。

矢も楯もたまず、彼は幻想を追って、それから、思い立っては覗きを決行するが、仲々に二度のチャンスには恵まれなかった。

御不快と云って断わられた日が又あった時、彼はその前夜、彼女の『甘い生活』のあったことを咄嗟に覚えて、生れて初めてと云ってよい程の残念さをおぼえた。

その夜は、前から数えて半月程経っていた。

△成程、体の回復するのを待っては、始めるのだな。そう云えば、たしかあの夜も二週間かゝったと云っていた。よし、二週間前から毎夜張り込めば、きっと、次の『甘い生活』にお目にかゝれるに違いない——

彼の憑かれた官能は、いつしか、及川義雄の性格をすっかり変貌させていた。彼は、しのぶ未亡人の部屋を覗かずにはおられないようになつていた。無事な、何事もない夜は、落胆と失望と、奇妙な安堵で、神経をくたく／＼に疲らせて戻った。独り悶々と悩ましげに寝返るしのぶに、安らかに眠るしのぶに、湯上りの肌を誇らしげに自己耽溺するしのぶに、彼は限りなき愛情と、恋慕の心をつのらせた。

しかし、昼のしのぶにはとりつく島もない。冷やかな、豊満な美しさをたゝえた、単なる客と一セールスマンとに過ぎなかった。

「俺は貴女の体の、隅の隅まで知ってるんだ。しかるにその澄ましようはどうだ。ここで俺がズバリ一言喋べたら、まさか、そうは冷めたくもしておれんだろうに……」

彼の心は、いつも反ばくし乍ら、己れの卑しい覗きを知られる事を恐れては、辛うじて口をつぐんでいた。それ程に、しのぶ未亡人の態度には、つけ入る隙も、ゆるみもなかったのである。

彼の冒険は続いた——。そしてチャンスは再び、意外な時間にやって来た。

その日、及川は廻りの都合で、美濃部家を訪れたのは午後の日盛りを過ぎた頃だった。

その日に限って、女中は不在で、老婆も数日前より、神経痛とかで帰っていなかった。

しのぶ未亡人、唯一人が彼を玄関に迎えた。

「いゝチャンスだが、俺にはもう一押し of 勇気もない」

及川は漠然とそんなことを考え乍ら、悲しくも身についたセールスに、愛想よくあれこれとすゝめていた。

電話がなった。未亡人は受話器を耳に——。

「えゝ、いゝわ。もう一押し、買いに出て下さい。あゝそれから」そこで、チラリとしのぶは及川の方を見た。フト妖しい笑みを浮かべたが、すぐ視線を外らした。

「ええ、皆留守なの。待ってますわ……今すぐでも……えゝ——」しのぶひとりの嬉しさに、及川は世間話で思わず長居した。チラリ／＼と気を引くような話を挿入しても、彼女は刹那、ずっと冷め



たい視線を投げかけて、話にはのらなかった。車の止まる音が玄関でする。扉が開いて汗一杯の瀬川満が立っていた。

及川はドキリとした。瀬川は素知らぬ顔で、彼に軽く会釈すると至って低姿勢で株の話を切出した。

「じゃあ、及川さん。今日はこの位にして頂戴ね。一寸、証券のこととで私、この方と相談したいの——」

△もうそろ／＼、その時分だ——。併し、明るいうちとなると困ったな。うっかり覗きも出来ないし——▽  
 理性が及川を苦しめたが、又とないチャンスの誘惑の方が強かった。

彼は愛想を振りまいて、玄関を出ると、道路には出ず、その儘、そつと足音を忍ばせて垣根の裏に廻った。

△えゝい儘よ。見つければそれ迄。お互いさまに人に云い難い事だ。反って又居直るに都合がいゝかも知れない▽

窓をそつと手で押して見ると、昼間の事とて錠はなく、ギーッときしんで開いた。大胆にも彼は、素早く窓際にとりつき、体を持ち上げて滑り込んだ。窓を元通りにしめると、あわてゝ靴を脱いで、鞆に押し込み、ベッドの下にもぐり込んだ。

形だけの商談は終わったのか、扉の開く音につれて、四本の足が彼の眼にうつった。

ドサリと二人が縫れて、ベッドに倒れた。及川の体ぎり／＼にベッドは重味で触れた。

「奥様——、今日のお遊びは如何なさいますか……何しろ、昼間ですので少々勝手違いで——」

瀬川の甘い声が手にとるように聞える。

「いゝじゃないの。私達には、夜も昼もないわ——。家の者が二人共留守だから、今日はいくら非道くても大丈夫——。私、どんなに大声で喚いたって誰も聞いてやしない。うんと泣かして欲しいの」  
 掌を返したように蓮葉なしのぶの艶のある声である。

「それじゃあ、お気に召すまゝに……お吊り致しましょうか」

「逆さにな……」



「勿論ですとも」

「いゝわ。随分永い間逆さ吊りしないから……」

さや／＼と衣摺れと共に一枚又一枚と、うすものが床に散った。  
 黒いタイツが往来する。

「まあ、凄いいマスク——一体何なの……」



「フフ、奥様は御存知ない。雅楽の蘭陵王に使う面を模したもの。飛竜の角が、私の今の、心の雄たけびを現わしているのです」

しのぶのベッドから床にたれた両脚に、なめし皮の革枷が、男の手によって嵌められ、革枷をつなぐ鎖の真中にはまった太い鉄環にする／＼と縄が通った。ガタ／＼と抽出から大小数個の滑車が床に転がった。

机にのった男は、そのうちの一番大きな滑車をとり上げて、ヒョイと天井の鉄鉤にでもかけた模様だった。

縄にも二個の滑車が通されると、準備は完了した様である。

「両手をどうなさいますか？」

「縛るのよ。うんときつく……早く……」

黙って男は縄をとり上げると、ベッドの傍らによった。あッとかウーンとか軽い悲鳴に交って、サヤ／＼と縄のきしむ音がする。

《畜生！ 足だけしか見えんとは、何とも残念だなあ——》

及川はきしむベッドの下で、口惜しく、心の中でうなっていた。

仮面の男は天井からぶら下った縄を引いた。ずるりと女の足が床から宙にういて、ベッドと並行になり、ギリ／＼と滑車のきしむ音につれて、女の体は徐々に浮き上り、臆て頭が床の上五十センチの辺りで、もつれた黒髪も妖しく、女の顔が逆さに浮いた。

及川のところからは恰度、しのぶの髯々と縛られた胸許辺りまでが、あり／＼と臉に映った。

逆さの体は空間をぐる／＼と回転して、両手が強く背の上まで締め上げられたのも、苦悶に歪む、眼を閉じたしのぶの蒼白の顔も、まるでパノラマの様に、次々と現われては消えた。

「ぶって……早く——」

泣くようにしのぶは叫んだ。

ピシリ／＼と鞭の音が聞え始め、その都度しのぶは、尺取虫さながらに空宙に踊りうごめいた。

裸身は鞭と共に、右に左に揺れ、ぐる／＼と回った、及川の眼前数尺に、しのぶの苦悶というには余りにも隔絶した。歡喜と激痛と愉悅の交錯した顔が、走馬灯のように転回していた。

及川の全身は、余りにも激しい異常な様相にガク／＼とケイレンして、鳥肌を立てゝいた。咽喉はカラ／＼に干上っていて、唾液一滴すら出なかった。

仮面の男の腕が、縛り上げたしのぶの縄にかゝると、力一杯強く押した。ぶらんこのように、女の体は大きな反動を起して、右に飛び、左に弾む。弾みのつききった体に鞭がはねる。相乗作用が、二倍の強い鞭となって女の体に帰る。

悲鳴と叫喚が部屋一杯に、妖しい雰囲気をかき破るように牙え渡って響く。

到底、及川の正視するところではない。

《止めてくれ、しのぶが死んでしまう——。止めてくれ……》

彼はベッドの下で、必死に心に叫んでいた。

波動がゆるやかになり、肉体の振子は止った。ギリ／＼と滑車がきしんで、ドサリと女の体が床に伸びる。微動だにしない体を男は抱えて、ベッドに寝かしつける。

「あっ——、死んでいるッ——」

仮面の男の魂切る声——。そ／＼と、服装をと／＼のえるのも、もどかしげに、男はしのぶをその儘捨て、表に飛出した。

及川はギョツとして、一瞬心が凍りついた。萎えそうになる足を



踏ん張って、ベッドの下より立上ると、蒼白な苦悶に歪んだしのぶの顔をべつとして、魂を天外に飛ばした。体にふんわりかけられた桃色のネグリジェが、辛うじて、しのぶの満身総瘻の生々しい裸身を隠していた。

及川義雄のざんげ話が終わると、芥川先生は、事の重大さに兎も角彼を医院の一室に待たして直ちに一一〇番に連絡をとり、しのぶの邸に急行したが、数時間の後、憤懣やる方ない顔で戻って来た。

しのぶはピン／＼していたからである。冷然と何事もなく応待したからである――。

△及川と云う男は以前にも軽いノイローゼに罹ったが、今度は大分重症らしいわい。精神科で診断する必要があるナ△

及川が呆氣にとられ、云い立てれば云う程に、芥川医師の心は彼を精神病者扱いにし出したのであった。

△精神錯乱と窺視症で、脳病院行きじゃ――△

と云うお話ですが、これじゃあ、さぞかし皆様も狐につままれたようでお訊ない。こんな蛇足をつけない訳には行かないでしょう。ドクター氏は一同を見廻して愉快そうに笑いました。

しのぶは、及川が頻々と覗き見することに気付いていた。セールの話の端々にも、サジスチックな断片をヒョイといれる。

△これじゃ、全ったくやり切れないわ。江戸川乱歩の「黄金仮面」をお読みですか？ ああ、あの男、きつと、私と瀬川さんとの、プレイを覗いたに違いないんだわ△

しのぶにとっても、この秘密を曝かれることは世間体からも傷手だった。

夜毎、回転窓よく覗く卑らしい男に、彼女は肌寒くなる思いだった。が、何か弱身を撫まれていよう、訴えれば我が身に帰ってきそうな気もする。

△二度あることは三度あるって――きつと、又、私達のプレイのチャンスを重ねているんだわ。それなら……△

しのぶはその日、瀬川満を呼び、そ／＼と帰った及川が、きつと何処かで、一部始終を覗いているに違いないと話した。

「逆も又真なり。しのぶさんに勇気あるなら、たっぷり見せてやるうじゃないか。その上でお芝居をうつさ」

「でもあんないやらしい男に……」

「マゾヒストの典型的なのは、見られることによって、反って興奮を昂めるって云うよ」

事実、しのぶはマゾに徹していたから、心の中では、及川に見られる羞恥に、反って心をたかぶらせていた。

「じゃあ、あの男に見せるため一番非道そうなのをやるのよ――そうね、逆吊りがい／＼わ。足枷は跡のつかないのをね。それに両手を縛るのも、きつそうに見えて加減しておいてね。私、声の演出でうまくやるから……」

「鞭も枕をた／＼いて音だけにするんだ。そして貴女は悶絶し、死ぬ――。僕は驚いて飛出す」

「それを見て、あの男どうするかしら」

「まさか覗きをやっているのは警察へも行けないしね」

「どちらにしても、体に跡の残らない様にね。そうね、精々揺すぶ

って非道く見せかけてね。少々のプレイなら、貴方仕込みで、辛抱出来る筈だから」

しのぶの演出は効果万点——。逆吊りになった時、予想通り、及川が、ベッドの下に潜り込んでいるのに素早く気付いた。

哀れな及川が、纏るような眼付で、縮み上っているのを、しのぶは嘲笑うように、瀬川に両脚を掴んでもらって、体を快よく振子のようにゆすっていた。

△おっとり刀で来た、警察のおかしな顔だったらなかったわ。それに芥川って云う、この近くの篤医者が、やれ、腕を見せろ、足を見せろ、体を見せろって、厭な奴——。ストリップじゃありませんって云ってやったら、妙な顔して引下ったわ。やれ／＼これで及川も、もう覗きにはこないでしょう。噂じゃ、精神鑑定を受けるそうだけど、フフ、いゝ気味だわ、本当に……▽

× × × × ×

スリラー、嗜虐小説だね全ったく——。誰かがそう云ったので、ドクター氏の長い話も、笑いで片が付きましました。ありそうで、なさそうで、ありそうな話だと退屈男達のギャ／＼話から、今度はワイン氏が話の口火をきりました。

## 第二十二話 夏の断片

私自身、意識してサジスチックなシーンを抄録したわけではありません。これは予かじめ、私のプライドの点からも申上げておかねばなりません。話らしい纏ったものはなく、唯私がこの一夏を海に山に過して見聞したその断片を、皆様に報告したいと思うのです。勿論、とりとめもありませんが、レジャーブームにのった近頃の

若者達が、如何に嗜虐的な甘い生活を、意識的に、又無意識のうち

に過しているかを、些かは知って貰いたいと思うのです。八月の第一週の日曜日、甲子園の浜は海に遊ぶ若い人々で埋まっていた。気の合う友人が新調したレジャーボートで、私達は白浪を蹴って芦屋を目指して沖合へ突っ走ったのです。

汚濁した海岸と異なり、沖は流石に水も爽やかに青く澄んでいました。その時、遙か沖合から、私達の方を目指して、真赤なボートが、エンジンに全速力にふかせて、白浪をきって猛然と、軸を宙に浮かせて突き進んで来たのです。ボートには、お揃いの黒眼鏡に派手なアロハの若者が三人、咆哮する様にがり立てゝおり、呀々と云う間に私達のボートすれ／＼にさっとすれ違っていったのです。その瞬間、私は愕然としました。一本のロープによって、ボートにつながれた、カヌー型のうきに、全裸の若い女が、仰向けに、カヌーごと、ぐる／＼巻きに縛りつけられて、恐怖に悲鳴すら挙げられぬのか、べったりと黒髪を顔に乱して、浪間を水すましのようになり、全速力のボートの跡について白浪を残して通り過ぎていったです。私は思わず友人と二人で息を呑み、ボートのスピードを落して彼等の行方を撫然と凝視していたのでした。

横浪にでもあって、刹那あのカヌーのうきが引っくり返ったらどうなる事だろう。

スピード、スリル、セックスの三Sをのせて、真赤なボートは、私達にこれ見よがしに、再び、針路を変えて、沖へ沖へと突っ走っていったのでした。

芦屋川上流のロックガーデン。こゝは若人のロッククライミング



の、まことに簡単、且手怪なコースとして知られているのです。猛暑のさなか、私は息子二人をつれて、年甲斐もなく、登(攀)はを試みました。

途中二人の女性を交えた数人の若者が、アルピニスト気取りで、

て歩く、底抜けに無邪気な彼女達を、双眼鏡のレンズに見出して、私はその光景からは、サジスチックな様相は見出し得なかったのですが――。

さしてけわしくもない谷間へロープによって下降を試みているのです。若い女性の一人にロープが体一杯にぐる／＼巻かれ、男達の手によって徐々に谷間へと下降して行きました。時折、さっと手をゆるめるのか、魂消る悲鳴が黄色く挙るのを、男達はわざと面白そうに、やれ／＼と云った調子でした。順次に下降した一団が谷間沿いに行くのが望見されます。その時私は、おやッと思ったんです。私は息子達に少し遅れて、双眼鏡で彼等を覗いて見ました。

二人の女性が、何れもクライミング用の太いロープで、胸、腰をぐる／＼巻きにされ、チラリ本気か、冗談か、二人とも前で両手を太縄の余った分で縛られて、それを、楽しそうに男共が、まるで綱引きでもするように、引っ張って行くのです。ヨロ／＼とよるめき乍ら、女二人は引っ張られて行くのです。

コーラスが山にこだまして、その合唱に、判っきり、女声が交っているのをきいて、ほっとしました。縛られた両手を前に突き出し

香栢園の浜での事です。芋の子を洗うような雑踏の中で、傍若無人に戯むれる一群の男女——。

若い娘はキャッ／＼云い乍ら、必死に走りましたが、男達に捕まり、ワッショイ／＼と、みこしのように数人で胴上げして、彼等のたむろするところまで来しました。胴上げされた娘はその円型の中へドサリと投げ出されました。二、三人が寄ってたかつて娘の両手を後手に日本手拭で縛りました。娘の友達らしい若い女が二、三人、キャッ／＼云い乍ら、娘の両脚を、やはり紐様のもので縛ります。縛った娘を砂浜にねかせ、掛声と同時に、ドン／＼と砂をかぶせて行きます。娘は顔だけを出して、泣き出しそうになって身動きも出来ません。グループの面々は、浪打際へ走ると、両掌に海水を掬って、娘の頭から、ボト／＼とかけるのです。

驢でワーツと云うカン声が上がりました。グループの一人が、奇抜な思い付を提案したのです。首だけ出して埋められた娘の、約一米程右に西瓜をおき、西瓜割りを始めようと云うのです。間違つて叩けば、娘は一たまりもありません。

埋められた娘の必死の叫び声——。

グループのはやす声——。故意か偶然か、娘の頭上に棒をふりかぶる輩もあって、正に喧々／＼です。これがスリルとあれば、又何をか云わんやと、私達は見かねて、彼等の一人に訊ねました。「その娘だけ、どうしてそんなに寄ってたかつていじめるの？」

彼等の答えは至って簡単でした。

「なあーに、ジャンケンに負けたからさ——」

年々変る夏の風物詩——。サジスチックなシーンは至るところに転がっている様です。

× × × × ×

ワイン氏は撫然たる面持ちで、プツリと言葉を切りました。

「それを見て、内心喜んでた人もあるってネ」

誰かの軽口にも、ワイン氏はにこりともせず、苦そうにワインをチビリ／＼なめていたのです。少し座が白けかゝった様です。昨夜に続いて、今宵も「釜ヶ崎」は暴徒が荒れ狂っているとのニュースがしきりです。

不快指数が最高頂に達すると、ホンの僅かのキツカケから、うつ憤が爆発して、理由なき反抗がとめどのない奔流となって、がめつい街を揺すぶっているのです。

「高原早苗さんも危ないかも知れんよ——」

スバル氏はポツリと云うと立上りました。

釜ヶ崎の女装の住人——（読者通信参照）善良な彼女？ も亦、渦中に巻きこまれていくかも知れません。

「奇クの通信欄の、女装の早苗さんについて面白い話があったのですが、このことは次回に譲りましょう。どうやら御本人が危険なようです」

「皆で見舞いがたら飛ばすか」

ナイロン氏が立上りました。

「とんでもない、車を焼かれりゃ世話ないよ。君子危うきに近よらずさ」

ワイン氏はぶすつと云うと、グラスの最後の一滴をのみほしたのでした。



## 東映最近の縛りシーン

東 山 映 史

縛り映画の多かった新東宝が解散して、その道のファンを失望させていたが、これに代り東映が、これまでの第二東映作品のようなそえもの映画で大いに縛りシーンを観せてくれる。

題名も「首なし島の花嫁」とか、「壁の中の美女」とか恐ろしい。

最近で縛りシーンの多いのは「新、黄金孔雀城七人の騎士」だろう。

今日の東映の隆盛のもとをきずいた「笛吹童子」とか「黄金孔雀」とかでは、かれんな高千穂ひづるや田代百合子らが大いに縛られ、ハリツケになったり火あぶりになったりしてファンをハラハラさせた。

そこへ急をきいてかけつけるのが錦ちゃんであり、千代之介なのである。そして観客席から、ホッとしたため息がもれる。

「美女の危難を救う美剣士」この設定が最も安易な盛り上げ方である。西部劇にもこ

れがよく使われる。「土人に捕えられ、まさに火あぶりになろうとする白人の美女、そこへサッソウと馬でかけつけるカーボーイ」……設定は殆んど同じだ。

「——七人の騎士」は、孔雀の羽根に結ばれた七人の若者たちが、戦乱の世に平和をきずき上げる夢と野望に満ちた、たのしい物語である。

だが、この中には、美女のしほり、ハリツケなどがファンダンに盛り込まれている。

七人の騎士の恋人や妹になって、オトリとして拐かされ、捕えられ、ハリツケにされる美女たちは、北条喜久、三原有美子、三沢あけみ、小原みき等のニュー・フェイスたちだ。

まず、渚（三原有美子）小百合（三沢あけみ）が悪人方に捕えられ、太郎丸をおびき出すために、柱にしばりつけて火あぶりにすると公告され、同志の者が救わんとかけつける

時に、積まれたタキギに火が放たれ、猛炎が柱に縛られた彼女たちに吹きつけ、燃えさかる火焰の中に第二部が終る。

第三部でも、太郎丸、及び美女たち八人が、土人のような連中に、密林の中で捕えられ、火あぶりの刑にされようとする。

スリルとサスペンスの連続というのだから、ハリツケや、火あぶりにされるニューフェイスの美女たちはお気のどく。このごろの新人監督のしほりは、大分リアルになって来た。だが、それがおめあての我々にとっては、もっとリアルにしてほしい。

「首なし島の花嫁」では、新東宝のグラマ、万里昌代が「女賊・櫛巻きお島」でデビュー、妖艶なところを見せるだろう。

「壁の中の美女」では、若様の顔のキズをなおすために、美女、美也が顔の皮をはぎとられ、美也は土蔵の中の竹格子に大の字に結びつけられ、竹格子の上から壁土を塗りつけられてしまい、それから怪異がおきる、というものである。

「吸血死美人屋敷」でも、松竹から転社した条ちづるが、天井から吊り殺されてブラサゲられたり、中里阿津子らが、太縄でしばりつけられてモリを投げつけられるという、迫力あるシーンを観せてくれた。



ファンタジー・フィクション

女学生の切腹

## 野に散る花

黒木節夫

1

八月上旬の灼く様な日ざしを、厚い緑が掩って、ヒンヤリと冷気を感じる山道を、白いセーラーの制服姿の女学生が、ボストンバッグ一つ、運動靴ばきの軽装で登っていた。

ここは、東北の、名の知られたT温泉から更に十軒ほど山へ入ったN温泉の近くの山の中である。

女学生は、緑川優子と云って、東京の私立C高校の三年生であった。級では勿論、学校中での評判の美少女で、高校生とは云っても優子の身体つきは、もうすっかり成人した女性のものであった。五尺四寸のスラリとした長身が、一分の隙もなく均整がとれて、リリしく引きしまった色白の、輝くばかりのその美貌は、行き交う人を一瞬、息をつめて立ち止らせ、そしてふり返らせるのに充分であった。

道は、次第に峻しくなった。優子は喘ぎながら登った。

この山道は、有名なU山の裏登山道へ通じている小径である。しかし、優子がU山まで登るつもりなのでないことは、その服装を見れば明らかであった。

道はやがて二つに分れた。右へ行くとU山への道に通じ、左へ曲ればそのままA山の頂上へ出る。A山は、U山の手前にある。標高一〇〇〇米程度の、地元の人達の他には余り知られていない山である。

優子は其処に立ち止って、傍の、土から露出している木の根に腰を下した。

ハンカチで、額ににじんだ汗をふきとり、ボストンバッグを開いて、中から五万分の一の地図を取り出すと、たんねんに或る箇所を調べていたが、やがて、元通りに地図をボストンバッグの中にしまつて、底の方から、錦の袋に入った何やら細長い物を取り出した。

優子が袋から取り出したのを見ると、意外なことに其れは一振の立派な短刀であった。

左手にサヤを持ち直して、優子は静かに刀身を抜き放った。一点の曇りもなく底光りのする刃が、木の間を洩れる日光をキラリと反射した。冷たく澄みきったその刃をじっと見つめる緑川優子の美しい黒い瞳が、長いマツ毛の下で、何故か憂わしげであった。

「お母様の形見の……短刀だワ……」

かすかに優子がつぶやいた。

かなり長い間、刃の神秘的な光に魅せられた様に、凝然と見入っていた優子は、やがて

夢からでも覚めた人の様に、そそくさと短刀をサヤにおさめ、袋に入れて、ポストンバッグの底にしまい込むと、スカートのちりを払って立ち上った。そして、ためらわずに左への道を登って行った。

## 2

緑川優子は、東京で、G省に勤める官吏の父と、美しくて病身の母との間の一人娘として育った。兄妹があったのだが、何れも優子がまだ幼い中に病死してしまっただけで、だから優子は、それこそ玉の様に大事にされて大きくなった。優子は、この様な環境の下で育った少女にあり勝ちな、素直な優しい性質と、抵

抗力の弱い性質とを併せ備えて成長した。そんな優子に、中学校へ進む頃から一つの悩みが出来た、それは、どんな親友にも打ち明けられない秘密であった。それと云うのは、もう長い間病気で寝ている母親の所へ、定期的に近くの医者が来て診察して行くのであるが、或る時、医者が、優子の母親の下腹部に、太い注射

をしたのである。勿論、優子の父親も立ち合っていた。

その様子を、優子はとなりの部屋から、ふすまの隙間越しに息をつめて盗み見していたのである。父から、向うへ行っていないと言われて、かえって好奇心が刺激されたのであった。

優子は、どんなにお母様は痛いだろうと思いつつ息を呑む様にして見つめていた。医者の鋭い注射針の先が、

——プスリ——

と、無造作に、柔かい下腹部の真中に刺し込まれた瞬間、思わずハッと体を固くしたが、母は、かすかに



「ああ……」

と力なく呻いて、ほんの僅か身体を動かしたただけであった。両手に汗を握りながら見ていた優子は、ホッと一安心すると同時に、

「痛くないのかしら？お母様……」

少し不思議な気持がした。

それ以来、いつの間にか優子は、人にかくれて、自分の腹部に刺激を加えて楽しむことを覚えて行ったのである。それは、母親の注射から受けたショックがヒントとなり動機となつて、単純な少女の好奇心から始まった行為であつたが、回を重ねる毎に次第に大胆になり、やがて、優子の思春期に達した肉体が理性の反省を容易に受けつけない様になつて行った。

最初の中は、衣類をつけたままで、下腹部だけを僅かに露出させて、細い針で、臍下二センチ辺りを、五耗ほど突き刺しては、それで充分満足していた。けれども、中学二、三年生の頃になると、だんだんとその位の刺激にはあきたらなくなり、夜など、独りきりになると、パンティー一つになり、鏡台に自分の姿を映しながら、腹部を臍のあたりまで充分に露出させて、用意した太いキリを、憑かれた様に、

——プスリ！——

と、思いきり突き立ててしまふ様な事がしばしばであった。

或る時など、自分の臍へ、キリを柄の近くまで刺し込んでしまい、熱を出して学校を休んだこともあつた。

この頃になると、優子は、本当に切腹してみたいと云う考えが頭から離れない様になつた。自分の、真白な初々しい肌を眺める度にこの弾力ある柔かい下腹部を、鋭利な刃物でプリプリと切り開いて、酔う様な快感に浸つてみたいと云う執拗な衝動にさいなまれた。そして、下腹部に深々とキリを突き立てては自分が本当に腹を切り開きつつある場面をうっとりと思像しながら、官能の嵐の中に身をゆだねて、しばし、時間の経過を忘れるのであつた。

切腹に少しでも関係のある記事を見つければ、むさぼる様に何度でも読み返した。

こう云う事をくり返している中に、優子は自分はいつかきつと、実際に切腹をしてしまふに違いないと思ひ込む様になつていた。

しかし、現実には、そんなバカな真似の出来るわけはなかった。父が居り、病氣の母が居るではないか。しかも、二人共、この自分を

生き甲斐としているのだ。

とぎすました肉切り庖丁で自分の下腹を思ひきつて切り割いてみたいと云う強烈な欲望を、優子の理性が辛うじておさえていた。

内気な少女として、又、思春期の若人特有のケツペキな正義感の持主として、優子は、こう云う自分の行為を激しく心に恥じ、罪惡視さえしていた。だが、独りになるといつも誘惑に負けた。これが、優子の他人に言えない悩みなのであつた。

### 3

ところが、優子が高校へ進んで間もなく、長く病んでいた母親がとうとう亡くなった。

父と二人で、涙ながらにささやかな葬式をすませたが、母の死は、優子の心に、空洞の様な、何とも言えぬ空虚な淋しさを植えつけた。

父娘二人のわびしい生活が、一年余り続いた後、すすめる人があつて父は再婚した。二度めの母も美人であつた。教養もあつたし、所謂継母と云う様な言動を優子に対して示すことは全くなかつた。むしろ、優子に色々とうわけか、優子は、この新しい若い母に心か

らなじむことが出来なかった。

父と義母との間は、うまく行っている様であった。家庭の中は、しかし、表面こそ何の変りもなく見えたが、以前にくらべて微妙な空気が漂い、何となく冷たい風が吹き抜けている様な感じであった。それは、第三者にはわからない冷たさであった。けれども、別にこれと云った波瀾もなく日が過ぎて行った。

そんな或る日、優子は、気分がすぐれないので一時間で学校を早退して帰宅した。いつも玄関から入るのだが、何気なく裏口へ回った。誰かの自転車が置いてあった。別に気にもとめずにお勝手口へ入ると、習慣的に、

「只今」

と言いかけて、何となしに異様な気配のよなものを感じて口をつぐんだ。男の靴が上り口にぬぎ捨てられてあった。

ドキリとして、本能的に足音を忍ばせながら優子は廊下を歩いた。そして、ふすまの隙間から、見てはならないものをまざまざと見ってしまったのであった。相手の男は、出入りのクリーニング屋の青年であった。背の高い一寸ハンサムな若者で、近所の若い奥さん達から、かなり噂の対象にされている男であった。

優子は頭から血が引いて行く様に感じた。

その時以来、優子は悶々として苦しい日々を送った。父に話せば、善良な父を苦しめるだけである。おとなしいとは言え、まだ若い優子は、絶対に義母を許すことが出来なかった。義母に対して、素知らぬ風を装って今までと同じ態度で接することは出来なかった。義母に対する激しい憎悪、軽蔑の念が、以前からの不信感と合流して、自然に表にあらわれた。そして、それが事ごとに父をも苦しめ優子自身をも苦しめるのであった。

夏休に入った或る日であった。優子は、父を板ばさみの悩みから救い、自分自身も又この苦しみから逃れるには、自分がこの家を出るより外に道はないと決心をした。この考えは、あの事件以来、ずっと頭から離れないでいたのだが、色々と考えては、それが決行出来ないままに今日に至ったのであった。

父と義母とは、丁度留守であった。

決心が決まると、優子は急いで服装をととのえ、手荷物を小型のボストンバッグ一つにまとめた。すると、住みなれた家を去ると云う感慨が、にわかに胸にこみ上げて来て、優子は独りで嗚咽した。——孤独——と云う言葉が実感となって、しみじみと優子の心をし

めつけた。亡くなった母がたまらなく懐しく恋しかった。何か、亡くなった母の形見になる様な物はないかと思つて、タンスをあけて探してみた。すると、何枚も重った、なつかしい母の匂いのする着物の一番下から、錦の袋に入った、細長い物が出て来た。優子の初めて見るものであった。手にとってみると、ズシリと重い。不審に思つて、袋からとり出してみると、それは黒塗りの短刀だった。優子は、ハツとした。こんな物が家にあつたのかと思ひながら、急いで引きぬいてみると、氷の様に澄みわたった妖しい刃の光が、優子の心をしっかりと捉えた。その瞬間であった。優子の脳裏に、死——切腹——と云う考えが閃いたのは——。

優子は、この短刀を、亡き母の形見だと信じ、今この短刀を探し当てた事も又、亡き母の啓示であると信じた。

この場合、抵抗力の弱い、優しい少女である優子が、母への追憶に浸りながら、感傷的に「死」を考えたことは、ごく自然であったが、同時に又、思いがけず手にした短刀を見て、年来の、切腹に対する憧れの心に火がついたのであることも否定する事は出来ないであらう。



両親宛に簡単な置手紙を残して、優子は家を出た。そして、上野駅から仙台行の汽車に乗ったのである。

4

其処だけは高い木が生えておらず、二十センチほどの背丈の、スキの葉によく似た柔かい草が一面に繁茂して、二アールほどの小さな草原をつくっており、その周囲を、密生した太い木々が囲んでいた。ここは、A山の七合めのあたりである。

この、森に囲まれた小さな草原を、優子は自分の死に場所として選んだ。ここならば、先ず絶対に人が来る心配はなかった。

優子は、草原の中程の草の上に坐って、傍



にポストンバッグを置くと、東京の方角を向いて両手を合せ、

「お父様、優子はこれからお母様のお傍へ旅立ちます。どうぞお幸せにお暮し下さい。先立つ不幸をお許し下さい」

心の中で父への別れを告げた。優子の、星の様な黒い瞳から涙が溢れて、美しい両頬を濡らした。

ポストンバッグの底から短刀を取り出して袋から出し、スラリと引き抜くと、用意のガ―ゼをぐるぐると何回も刀身に捲きつけた。

刃の、露出している切先八センチほどの部分が、キラリキラリとまぶしく真夏の太陽を反射した。

短刀の用意が出来ると、それを、大切な物

の様に、そっと傍のポストンバッグの上にのせて、優子は立ち上った。無造作にスカートを外し、上着を脱ぎ捨てると、一瞬ためらった後、思いきって、更に下着を全部脱いで、パンティ一枚になってしまった。

優子は、脱ぎ捨てた衣類を一まとめにする、用意のガソリンをかけて、残らず焼却してしまった。ポストンバッグも靴も一緒に焼いた。勢いよく立ち上る煙をじっと見つめながら、

「さあ、これでもう、どんな事があつたって死ななけりやなくなつたんだワ」

自分自身にふくめる様に言いかけた。

形よくふくらんだみずみずしい乳房、すんなりと美しい腰の曲線、ふっくらと柔かく盛り上った下腹部、しなやかに伸びきった長い四肢、長いマツ毛の下に神秘的なまでに美しい瞳をたたえたりりしい顔立。

緑川優子の、新鮮な果実の様にみずみずしい裸身が、周囲の濃い緑からクッキリと浮かび上って、さながら森の妖精かと見紛うばかりの美しさであった。

白昼、しかも野外で、この様に大胆に自分の肌をさらすのは勿論初めての経験である。優子は、白日の下にさらされた自分の身体を

眺めて、自分自身、わけもなく激しい興奮を感じた。ドキドキする胸の鼓動を鎮める様に両手で両の乳房をしっかりとおさえながら優子は草の上にひろげたビニールの上に坐った。そして、改めて、明かるい真夏の太陽の



下に惜しみなくさらけ出された自分の白い下腹部を、つくづく凝視した。

微風が、傍の草をなびかせながら、素膚を快く撫でて行った。

「切腹!……」

感慨こめてつぶやいて、優子は、両手の親指を軽く自分の臍窩に当て、残りの八指に力を入れて、グッ!とおさえると、ゴムまりの様に弾力を秘めて、下腹部全体が大きく凹んだが、指から力をぬけば、忽ちポン!とはね返る様に、元通りのふくらりと張りきった形にもどってしまう。自分の下腹部の弾力を験すかの様に、優子は、二度、三度と同じ動作をくり返した。

——この下腹を、今、私は冷たい鋼鉄の刃物で、思う存分に切り開こうとしているのだ。どんなにか痛く、又快いことだろう。どんなに沢山の血が流れ、どんなに私は苦しむことだろう。——

うっとり夢みる様な面持の、優子の美しい顔が、次第に熱くほてって来た。

——そうだ、今日こそは真似事でなく、実際に、このお腹を切り開いてしまおうのだワ——

優子の呼吸が火を吐く様に喘いで来ると、腹部の波動も又、悩ましげに大きくなった。

やがて、優子は、きっと氣をとり直して、草の上の短刀を拾い上げると、しっかりと右手に握りしめた。

「切腹!……」

もう一度、確かめる様につぶやいてみる。

昂ぶる心を鎮める様に、優子は静かに目を閉じると、左の掌で、激しく波うっている温かい腹部全体を、愛しむ様に何度もゆっくりと撫で回した。

草の上に坐った少女の白い肌が、明かるい太陽の光をくまなく浴びて、匂う様に清純に輝いて見えた。

波うつ左下腹部の一点に、ピタリと切先を近づけると、

——しっかり切るのよ——

自分で自分に言いかけせる。

——しっかり切り終えるのよ——

もう一度。

顔色は極度の緊張に青ざめ、体全体が激しく震えた。

「本当にこのお腹を切る……切腹………本当の切腹………」

うわ言の様に口走りながら、ギラギラと太陽を反射している切先を、思いきって、グッと引き寄せると、切り割かれるのに抵抗する様に、下腹部は弾力を示して大きくグッと凹んだ。まだ切先は五耗ほど突き刺さっただけである。

憑かれた様に前方の草を凝視しながら、  
「ほ、本当の切腹………本当の切腹………ウ

ーム！」

ありったけの力をふりしぼる様に右手にこめると、

——プスリ!!——

厚い皮下脂肪を一気に刺し通して、刃は腹腔内へ深々と没した。ズシン! と焼けつく様な手応えが優子の全身を貫き走った。

「さ、刺した!!」

思わず絶叫して見下すと、既に凹みを消した柔かな下腹部が、ピカピカ光る刃を、七、八厘ほど突き立てたまま大きく波うち、傷口からは糸の様な鮮血が一筋、タラタラと流れ始めている。気弱くも右手の力がゆるみかけるのを、

「こ、これから切る……切るんだワ!………」

自ら励して、一気に右下腹まで切り回そうと、グッ! と右手に力をこめる。が、刀身は突き刺さった位置から容易に動かない。

「……う、……!……うーッ!!………」

わななく右手に、けなげにも必死に力を加え、身をよじって優子は己が下腹部に挑む。鋼鉄の刃の切れ味と、弾力ある皮下脂肪の抵抗力との均衡がいつ破れるか、均衡が破れた瞬間、この下腹部は、鋼鉄の刃に無慈悲に切り割かれてしまうのだ。右手に必死に力をこ

めて緊張しきった優子の青ざめた顔には、見る見る冷たい脂汗が浮き上った。

「ほ、本当の切腹!………本当に、本当に………」

お腹を切る!………切るんだワ!………」

左手も柄に添え、腰を浮かせて、もう無我夢中で、真一文字に切り開こうと焦る。

「……せ、切腹………切腹!………ウーム!!」

——プス、プス、プス、プスッ!——

遂に力の均衡を破った鋼鉄の刃は、無気味な音をたてて少女の厚い皮下脂肪を、無残にも、臍下の辺りまで一気に切り割いてしまった。

「グエーッ!……き、切れた!!……切れたワ!!」

血走った目で眺めやると、雪白の下腹の左半分が、パクリと大きく切り開かれて無気味に腸をのぞかせ、鮮血が泉の様に流れ出して下腹半分を真赤に染めている。

「き、切った!……ほ、本当にお腹を切った………」

……も、もっと、もっと!………」

更に切り進もうとするが、臍下二センチの辺りで止まっている短刀は、容易には動かない。

「も、もっと……切って……せ、切腹………ウーム!!」

「グエーッ!………き、切れた!!………」

刃は、遂に少女の下腹の厚い肉壁を右腹まで、無慈悲に、一文字に上下に切り離してしまった。パッキリ開いた大きな傷口からは鮮血が溢れ落ちて見る見る周囲の草を染めて行った。激痛に堪えかねた様に下腹部全体がブルン！と大きくゆれたかと思うと、傷口をおしあける様にして、ゴボゴボと血まみれの大小腸が少女の腹の中から吐き出されて来た。

「う、うーッ！……ま、まだ……十、十文字に……」

狂った様に優子は、右脇腹から短刀を引き抜き、刃の方を下側に向けて切先を凹んだ臍窩に当てがうと、力一ぱい突き立てた。

「ウーム！」

——プスリ！！——

無慈悲に、無感動に、刃は臍から腹腔内へ深々と刺し通された。

「うッ！……」

呻く様に口走って、短刀の柄を持ち直し、両手に上体の重みをのしかける様にして、縦一文字に、臍から真下へ切り下げようとした。

「……た、縦に、縦に……き、切るの！……せ、切腹……切腹！……ウーム！！」

渾身の力をこめて一押しに、

——プス！プスプスプスプスッ！！——

惨！鋼鉄の刃は、堰をきった奔流の様な勢いで、アッと言う間に少女の臍から下腹部までを一気に切り下げて、パッキリと左右に切り離してしまった。

「グエーッ！……き、切った！……」

鋼鉄の刃に、思う存分に己が柔かな生体を掻き切らせ、血を吸わせて、苦痛に身悶えている美少女。それは凄惨な光景であった。

「……う、う！……い、痛い……痛い……痛い……し、死にたい！……お、お母様……い、痛い！！……」

自分の下腹の中から溢れ出た血まみれの腸管の上を、七転八倒で呻き、のたうち回る。

しかし、もとより覚悟の独り切腹であるから如何に苦しもうと介錯人の現れよう筈もなく、優子は単純に、ただ腹を充分に切り開きさえすれば間もなく死ねるものと考えていたので、自ら急所に止めを刺して死ぬ事に気がつかず、ただ呻き、苦悶するだけであった。

「……痛い……い、痛い……むーッ！！……い、痛い！！……く、苦しい……腸……腸を……き、切り離せば……し、死ねる……むーッ！……」

のたうちながら呻くと、最後の力をふりしぼって起き上り、

「……あ……あー！」

血まみれの左手を、傷口から己が腹部の中へ、押し込む様にグイと差し入れ、腸のつけ根をムズと攪んでズルズルと外へ引っ張り出すと、——ハッ！……ハッ！……

と火の様に喘ぎながら、右手の短刀でプスプスと切り離しては傍の草の上へたたきつけた。我が腹部の内部をまさぐる左手に、も早内臓の感触が感じられなくなり、腹腔内が、完全に血まみれの空洞となってしまう事を朦朧たる意識の中に感じると、パタリと短刀をとり落して、

「……お、お母様！……ゆ、優子は……お、お腹を切った！……せ、切腹したのヨ……」

力つきた優子は、とぎれとぎれにつぶやきながら、バツタリと其の場にうつ伏せに倒れ両の手に草を攪んで苦悶を続けていたが、やがて、その均整のとれた全身を、二、三度、ピクピクと大きく痙攣させると、そのまま動かなくなった。

こうして、芳紀十八歳の美少女、緑川優子の魂は、長い激しい肉体の苦痛を経た後に安らかに母の許に憩うことを得たのであった。

夏の斜陽が、この草原の惨劇を、無関心に照らし続けていた。



## あるマゾヒストの告白

## 生涯の灯は何処に

小林 誠 吾

な臀部に押しひしがれ、もし社会的な面での私を知る人が、この有様を見たとしたら、愕然として、その時から私に対する信頼も、尊敬の念もたちどころに失うであろう姿になり果てるのである。このような私が、では、何時頃からマゾヒストになったか、又、過去において如何にしてマゾヒストとしての人生航路をたどって来たかにつき、真実の一駒を告白したいと思う。

私は「奇譚クラブ」の一愛読者である。何故ならば私は男性マゾヒストの一群に仲間入り出来る有資格者であり、又強い勇氣と意志により、いままでに正確に十四人の女性から男性マゾヒストの歡喜の極致ともいうべき顔乗りの洗礼を受け、女性の下に隸屬し古代

ギリシヤやローマの奴隸にも劣る生活を現在なお続けている、この世に稀な幸福な人間である。

これから述べる私の告白は、すべて真実の記録であり、空想でも仮想でも幻想でもない。現に自分が身をもって獲得した歡喜のすべてである。私は現在世間から美人

といわれる妻をもち、社会的には公務員としてその手腕は高く評価され、経済的には中流以上の生活を営んでいる。しかし私の体内に宿る強烈なマゾヒストとしての血汐は、一たび家庭の人となれば、ただちに妻への奉仕と隸屬の生活を求め、彼女の足下に跪き、豊満

私の生まれたのは大正十二年、東京の山手の高級住宅地で手広く印刷業を営んでいた父の五男としてであつた。経済的環境は大変めぐまれており、学校の行き帰りに女中か或は小僧に毎日送り迎えされ、又、下校後のおやつなどは朝に女中達が私達兄弟姉妹一人一人お好みを伺い、どんな高価なものでも思い通り買いととのえられて、与えられる生活だった。このように坊ちゃん育ちの私は、それこそ我儘いっぱいに振舞い、兄弟

喧嘩はする、無抵抗な女中や小僧を痛めつけて泣かせる位は日常茶飯事だった。しかし残念なことに私は生来虚弱で、小児科関係の病気なら殆んど小学校六年生までに病み尽した程だ。さて、このようにして育てられた私が、如何なる風の吹きまわしか、女性の足下にひれ伏したり、背や胸に馬乗られたり、はては、両親にすら叩かれたことのない両頬に強烈な平手打ちを甘受したり、坐布団同様にわが身を女性の尻の下に提供したりまさに古代ギリシャ、ローマの奴隷をも及ばない労役に対し喜々として服役する人間になったのである。それは今にして思うと、中学三年生の頃から、既にマゾヒストの芽生えを見ることが出来るのである。それは当時の中学生（昭和十五年頃）の遊びに、戦争中のこととて師団ごっこというものがあつた。私は身体が虚弱な上に社会性が甚だ欠けていたためか、いつも仲間入りをさせてもらえず

偶に、人数の足りない時などに仲間入させて貰ったとしても、本陣付の雑兵役しか割り当てられなかった。その反動のためか、家に帰ると使用人である女中や小僧達を相手に、手のつけられない内弁慶ぶりを発揮した。なかでも、よくやったことは女中のときやを馬にしてその背に跨り、サーベルをぶらさげて学校では味えない師団長遊びであつた。この遊びが後の私をしてマゾヒストとして一生を過すきっかけとなるうとは。今に思えば、よかったとも、まずかつたともいい難い気持である。それはある日、いつもの通り女中ときやを馬にして二階の廊下を往つたり来たりさせていた。中学校三年生の痩せ少年とはいえ、体重は少なくとも十貫ぐらゐはあつたろう。この重圧と、乱暴な動作のため、彼女にとっては相当辛い苦行であつた筈だ。ふと、その時私の脳裏に妙な考えが浮んだ。それはもし私がこの女中ときやの下にな

って逆に自分が馬になったらどうだろうかということだ。なんという突飛な思ひつきだろう。何故こんな気持が私を襲ったかを今だに理解することが出来ない。丁度、昔の貴族が榮耀榮華の限りをつくした後に感ずる大衆的庶民的な遊興への魅力とでもいうか、それとも隷属と屈伏に徹した人間が、突如としてその境遇を逆転したとき、その次におこりうるであろう動作を期待する楽しさとも解すべきか。とにかく不可解ではあるが、しかし、ただ一つの確実にいえることは、この時こそ、私のマゾヒズムの芽生えであるということだ。もし、彼女に立場を取り替えることを申し出たら、果して彼女はこの内弁慶の弱々しい坊ちゃんに、馬乗りに跨るであろうか。又、それを承知したとしても、どんな表情や言葉で自己の意志を表現するだろうか。こんなことが私の強い興味となつてあらわれたのである。そこで私は彼女の背から

降りて、云つてみた。「ときや、お前がもしこの家のお嬢様で、僕が小僧だったら、僕みたい馬乗りなんかして苛めるようなことをするかい」すると彼女はしばらく怪訝そうな顔つきで私を見ていたが、すぐと、「そんなこと考えられませんが、もしそうだとしたら恐らくこんなひどい真似はいたしませんよ。ましてお嬢様だといつても、女ですからね、お坊ちゃん」むしろ、この私の日常の粗暴な振舞いを戒めるのによい機会とでも思つたか、それとなく皮肉めいた顔つきで答えた。しかし、その時の彼女のこの答は妙に私をして満足せしめなかった。丁度、いまにも手のとどきそうな財宝が、手を触れる寸前に、パッと消えてなくなつたような、焦慮と落胆のおりまざつた、心残りの強い感じであつた。さいわい場所が二階の廊下で左側に並んでいる兄姉の室に

は誰もまだ帰っていない様子なので、今度はもっと積極的に彼女に話しかけて見た。

「ときや、たのむから、一回僕を馬に乗って乗っかってみてくれよ。お前みたいな痩せっポッチなら、絶対つぶれたり、へばったりしないからさ」

そういうながら私は廊下の端のところ、四つ這いになった。すると彼女は

「私が坊ちゃんまの背中に乗るなんて、とんでもない。申し訳けなくて、それこそ罰が当り、お尻がまがってしまいますよ」

全然相手になって呉れない。

それは無理もないことで、その当時は基本的人権はまったく無視されていた頃のこと、都会の家庭住込み女中などは、たいてい田舎の貧農の娘が三年乃至四年の年期契約で、給金を親が先に受けとり桂庵という民間職業紹介者を通じて住込み奉公をさせるのが常識であった。このときやも群馬県の

貧農の娘で、食うや食わずの生活の中から四年契約で私の家に女中奉公をし、ことの外、やかまし屋の母の厳重な指導と監督のもとにあらゆる自由を無視され酷使されて三年間、どうにか過して来た女中だった。今でいえば高校二年の年頃で、私より二才年上だった。しかも家の中では彼女の地位は最低で、彼女より低い身分といえは飼猫ぐらいのものだった。そんな身分のものが、主家の坊ちゃんを馬にして跨ることなど思いもよらないことだった。服装なども至って粗末な木綿の単衣にモンペ姿、うすよごれた割烹着に素足というありさまだ。しかし私は、なにかその時は無性に彼女に跨がられたく、殆んど哀願するように、又、一方怒りつけるような態度で無理矢理実行をせまった。あまりにも私の要求が激しいのと田舎娘の純朴さからか、とうとう彼女は

「では、しっかり踏張って下さいよ」といいながら、そっと私の背に跨った。しかし実際は跨り乗ったのでなく、両足を床につけて腰をかかめた程度で、重みは全然といていい位、私の背には感じられなかった。そこで私は「ちゃんと腰をかけなくては、駄目じゃないか」とむしろ、横着者を叱りつけるような気持で怒鳴り上げた。すると彼女は「本当に大丈夫なのかしら」さも心配げに下の私を見下しながら、今度は、まともに十二貫程の体重を、どっしりと私の背に乗せかけてきた。中学三年で、しかも貧弱な私の身体は、その重さに一寸ぐらついたが、それでも歯を喰いしばって廊下を二回往復した。しかし、とうとう頑張りきれず、そのまま潰れてしまった。すると彼女は慌てて私の背から立ち上ろうとしたが、私はなにか、このまま終りにしてしまうのが心残り、すかさず仰向けとなり、彼女の両足をおさえ

「いいから、このままで、今度は腹の上に腰を下しておくれよ」ほとんど泣きださないうちに哀願これつとめた。すると彼女は変な顔をして見下しながら「いいんですか、そんなことをして。なんだか、こわいみたいですね」

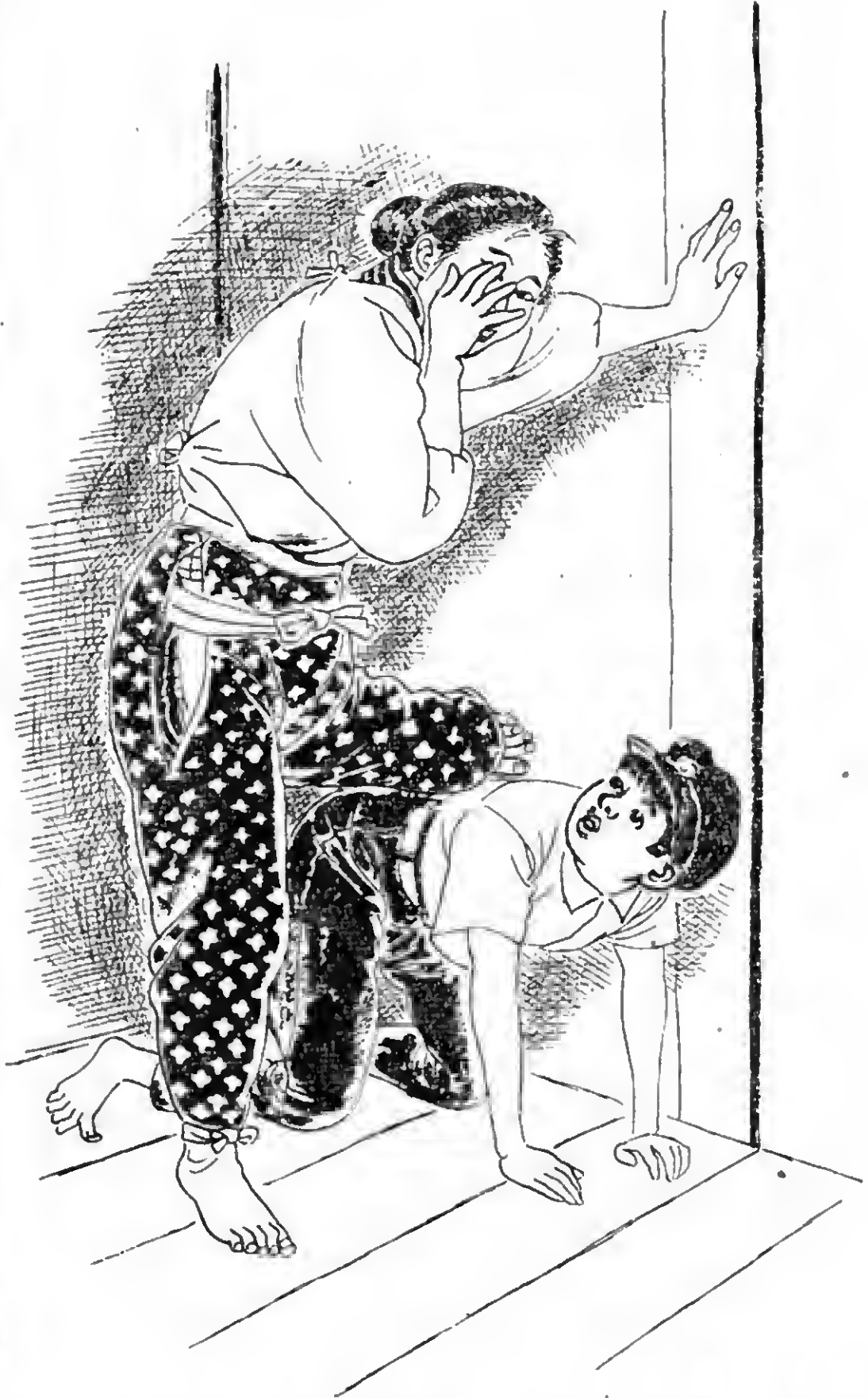
といいながら、それでも前に背に乗って、いささか、この不自然な行動に慣れたせいか、割合素直に乗ってくれた。

「腹の上だと苦しいから、もっと前に乗ってくれよ、胸の上より首の上の方が、楽でいいんだが」これには彼女も驚いた様子で、じっと私の顔を上から見下しながら

「尚、苦しいんでないのですか、そんなことをしたら。坊ちゃん、息が出来なくなるでしょう」

「いいから、だまって僕のいうようにすればいいんだよ。」

彼女も、あきれたのか、今度は無遠慮に少し勢いをつけて、むんずと私の首の上に跨って来た。こ



うなると丁度私の小さな顔は、上から見れば額と目だけのぞいて  
いるといった恰好である。彼女の  
折りまげた両足が床についている  
ので、体重はそんなにかららず、  
顔を動かす自由こそないが、たい  
した苦痛は感じなかった。よく本

誌の記事の中に、この様な馬乗り  
場面が出て来たとき、顔乗り同様  
に息が出来ないとか、苦悶すると  
かいふ表現がつかわれているが、  
実際はそんなに、死ぬ程の苦しみ  
はない。今でも前述の如く毎日妻  
により、首乗り、顔乗りをしても

らっているが、両足に必ず体重が  
とられるため、充分呼吸も出来、  
敷かれる楽しみを味わうことが出来  
るものである。  
しかし私の顔のすぐ前には彼女  
のモンペが迫り、木綿の荒い格子  
縞の模様が大きく目にうつり、呼

吸をすると一寸鼻をつく汗くさい  
匂いを感じた。しかし、それがだ  
んだん私にとっては、またとない  
貴重な香気に受けとられてくるの  
である。時間的には二十分間ぐら  
いだったが、私は今まで、かつて  
ない屈辱感を味う筈なのが、全然  
そんな感じはなく、むしろ正反対  
の歡喜を覚えた。それはなんとも  
表現の出来ない悦びであった。し  
ばらくして彼女は立ち上り、急に  
私の前に両手をついて

「申し訳ありませんでした。さ  
ぞお苦しかったでしょう。坊ちゃ  
まが無理にとおっしゃるので、つ  
いつい、こんなことをしてしまっ  
て、どうか奥様や皆さんに内証に  
しておいて下さい。こんなことを  
したなんてことが知れたら、とき  
やはこの家から追い出されてしま  
いますからね」

となにか大変な悪いことでもし  
たかのように、詫びを言った。と  
ころが、私は何故彼女がこんなに  
恐縮しているのか、理解に苦しん



だ。むしろ自分の方から、今までの我儘な振舞を両手について彼女にお詫びをし、今後、絶対に彼女の味方であることを誓約したい程であった。

「無論、お母さんなんかには、言やしないよ。だから、これから、時々乗っかってくれよね」

それから彼女が階下に降りていった後でも、今度は自分一人で仰向きとなりつい先までの気持を思い浮べて見た程だった。さて、それからというものは、毎日学校から帰ると、わざと、彼女だけを二階に呼び寄せ、親兄弟には室の整理をさせるんだぐらいのことをいって、彼女が上って来ると、すぐ仰向きとなり跨ってもらうようになった。彼女の方も、だんだん大胆になり、胸の上に跨りながら、一寸身体を前にずらせ、「どうですか」などと笑いながら見下したり、所謂、逆馬乗りになり、そのまま鼻唄をうたいながら一時間以上も坐っていることがあった。又

時には、毛糸の編物を出して、私の存在など忘れたかのように、一心に編物をしたりした。しかし、前述のように両足を床につけて坐るのだから重圧は、そんなにかかわらず、私は充分悦びに侵れることができた。ときには、

「ときや、お前放屁をしたことあるかい」  
と下から聞いた。すると彼女は一寸恥ずかしそうな声で

「そりゃあ、私だって人間ですもの」  
「そんなら、いますぐこのままでしてくれよ」  
これには彼女も聊さかあきれたらしい。

「ホホホ、いくらなんでも」  
「いいんだよ。ものは、試しだ。一回でいいから、やってくれよ。いいだろう、頼むからさ」  
「しょうがないわねえ、ではいいわ、そんなにおっしゃるのなら。だけでもいますぐ出ないから、一寸このままで待ってて下さい。でも

坊ちゃん、汚いとか、臭いとか思わないんですか」

やがて、異臭が私の鼻をついて来た。放屁なら音がありそうなのだが、この時はすぐ下の私の耳にも音らしい音は聞えなかった。

「お前したのかい？」  
「はい、それでも遠慮して音の出ないように静かにやったんです。

でも、やっぱり臭いでしょう？」  
「いや別に、それ程臭いとは思わないよ。でも僕は音が出るのがないな。もっとやってくれよ、うんと音の高いやつをさ」

「まあ、変な坊ちゃんだこと。はいはい、じゃあ今度は、びっくりする程大きいのを御馳走してあげますよ」

まあざっと、こんな調子であった。また時には胸の上に彼女が跨り、片足で私の顔を踏む場台があるが、さすが遠慮してか踏むというより軽く乗せるのである。すると私は下から、その足の裏、特に踵の部分なめ廻すのである。永

年素足で立働いている彼女の踵は真黒で大変固くなっていた。

そのほか、足の指を口の中に入れて歯が当り、彼女の指に少し疵をつけてしまい、この時は、さうとう強い平手打を、彼女は私の頬に飛ばした。それ以来、足指しゃぶりは絶対にさせてくれなかった。

このようなことを毎日続けたといくと、私はだんだん彼女に対し屈辱的になり、彼女の御機嫌を取るのに一生懸命になっていた。例えば毎日のお菓子なども従来よりは多く手に入れ、それを自分が全然食わず、彼女との遊戯の時に全部彼女に提供し、すこしも惜しいとは思わなかった。

「とってもおいしいわ。私はこんな上等なお菓子喰べたの、はじめてよ。坊ちゃまのを取ってしまつて可哀そうね。でも、坊ちゃまにはお菓子よりも私の放屁の方が、うれしいんでしょう？」  
「そんなことをいいながら、割合

高音のヤツを少しの遠慮もなくごちそうしてくれるのであった。このようなことは古代奴隷の社会にもなかったと思うが、これこそ私の真実の告白なのだ。したがって日常は、出来る限り彼女に楽をさせようと考へ、兄妹達が彼女に用事を命ずる時などは、あらゆる手段をこうじてそれを妨害し、他の女中や小僧に廻るよう努力した程である。ある時など母が私と妹をつれて近所の蒲焼屋に鰻を食べに連れていった際、私は鰻を食べずに、そっと紙につつみ、家に持ち帰り彼女の食器の中に入れておいたことがあったが、その時は大変よろこばれ、御褒美に放屁と足なめを充分堪能させてくれた。

中学四年になった夏休みに、私の家で鎌倉の漁夫の家の離れを借りて避暑に行くことになったが、いざとなると、家族の者皆の都合が悪く、結局私だけが何の用事もないので、ときやを食事係兼小間使一般の仕事係としてお供につれて行くことになった。この夏休の彼女との鎌倉での生活は僅か三週間足らずであったが、一生忘れられない楽しい思い出であり、且つもし私が現在完全な男性マゾヒストとしての資格を自負し得るのもこの時の完全なるマゾヒストとしての要素と訓練が基礎をなしていると思えるのである。三十八才の現在、いま尚妻に仕える奴隷でありうるのも皆このためである。

家は離れであったが、独立家屋と同じであった。部屋に落着くなり、私は彼女に申し出た。「どうだい、ときや、ここに居る間は僕が召使いになり、ときやが主人で暮そうよ。ここでは、お母さんも誰もいないから、ゆっくり遊んでくれないかね、無論、僕は一生懸命働いて、ときやの身の廻りの世話から掃除、食事の一さいをやるよ。だから気をつかわずにただ威張っていてくれよ」この私の要求には、さすがの彼女も一寸驚いた様子で

「いくらなんでも、そんなことは出来ませんわ。第一、坊ちゃんは御飯が炊けないでしよう？」と言った。しかし、私は見よう見まねで一応大概のことはやりとげる自信があったし、そうした生活の頭に描いただけで、もう、ごくごくするような歡喜が湧いてくるのを、どうすることも出来なかった。「いいんだよ、今まで全然したことの無いことを、やってみるのも楽しいことだよ。どうか、頼むから、僕にやらせておくれよ、ねえいいだろう」これには、ときやも聊さか持て余したのか、とうとう「しょうがないわね、じゃあ坊ちゃまの云う通りしましょう。その代り、御飯炊きからお洗濯、お掃除、お使い、みんなおやんなさいよ。ときやは絶対に手助けしませんからね。やれやれ、これから毎日、坊ちゃまをこき使って遊んでいられるなんて有難いわねえ」

「私も私を蔑んだようにいいながら、ごろりと横になった。さあ大変、その時から俄かに私は忙しくなった。まず持ってきた荷物を整理し、部屋を掃き、廊下や板の間の雑布がけをしなければならなくなった。彼女の後に廻り、着て来た和服をぬがせ、薄いワンピースに着替えをさせ、坐布団を借りて来て彼女に坐ってもらい、冷たい水でしばったタオルで彼女の足や手をふいてお休みになってもらう。すぐこの後は昼の食事準備であつた。この食事準備に入る前に彼女から、仕事のやり方についてさんざん叱言をいわれたのである。

「和服のたたみ方が大変悪いわ。何でも出来るなんてさっきは云ったが、何も出来やしないじゃないか、この馬鹿者」こんな調子で、何んだか人が変わった位に思えた程だ。冷めたい、おしほりを持っていった時も、「私の前に来たら、まずお辞儀を

して、それから用件を話すようにすんのよ。なによ、つつ立ったまままで。馬鹿！」

こういわれて私は慌てて両手について恭々しく頭を下げ、神前に供え物でもするように、タオルを捧げた。すると彼女は、「御苦労であつた」といいながらタオルを取り上げたと思つたら、すぐに私に向つてそれを投げ付け

「お前が、ふくのよ！。ちゃんとやるんだよ」

そういう言葉を聞かたびに私は身震いがして、なんともいえない嬉しさを感じるのだった。

「どうか、今の調子で毎日やって下さい。言葉使いなど、うんと乱暴にして、びしびしこき使って下さい。お願いします」

彼女は、うす笑いを浮かべながら「本当にいいんだね。なんだか、少し変だけど、まあいいや。坊ちゃま、いや、お前のいう通りやってやるよ。その代り使い方が激しいから悲鳴をあげないようにね。」



もし仕事のやり方が悪かったり、私の機嫌をそこねたりしたら、その時は大変だよ。お前の骨がくだける位、ぶちのめすかもしれないよ。それを承知の上で、しっかり働きな、そらそら、もう十一時半だ、お腹がすいたから、早く昼食の準備をおしよ。私はそれまで一寸横になるから、出来たら起すんだよ」

彼女に枕をあてがひ、薄地の毛布をかけて私は外出した。町の商店街で買物をして、大急ぎで帰宅し、お米をといで食事の用意をはじめた。どうにか飯が炊き上り、母屋から借用した大テーブルに茶わん、箸をならべ、皿には買って来た豚カツやコロツケなど全部を盛り、ソースをそえて一応

体裁よく彼女の分だけの食事準備が整った。そこで、おもむろに彼女のそばに両手をつき、丁寧にお辞儀をしてから

「お嬢様、食事の用意が出来ました。どうか召上って下さい」

すると彼女は、眠そうな目つきで、こちらを向き直り

「ああそう、でも随分時間がかかったわね。お腹へこべこだよ」といいながら、案外強い力で私の

頬に平手打を二度程とばしてから立ち上り、お膳をみて、

「あら坐布団がおいでないよ。忘れたのかい」

私はすかさず

「坐布団の代りに私をいつものように使って下さい」

とテーブルの下にもぐり込み顔だけを突き出す。

彼女のお尻は大分汗くさく、臭気はそうとう強いものだった。食事は約一時間、彼女は新聞をよみながら、ゆっくりとしている。私には全然声もかけてくれない。私

はただ彼女の尻の下で、じいっと暑いのと汗くさいのをがまんしているだけである。

「あら、お前のおかずはあるのかい？御飯はあるようだけど」

「いいんです。私はお嬢様の残り物で結構ですから」

「あら、いやだ。おかず、なんにもないわよ。あるのはソース位だよ。なぜ早くいわないのかい、残しておいてやったのに」

「いいんです。お嬢様の食べ残りのソースをかけて食べますから、どうか私のことなど少しも気にしないで置いて下さい。こうしていただいで涙の出る程うれしいのですから。そんなことよりも、哀れに思ったら、いつものように放屁をひっかけて下さい」

彼女の食事もあり、やっとテーブルの下から解放された私は、台所に下がり、急いでソース・ライスをかきこんで、後片付にかかった。午後は海水浴に行くことになり、彼女は私の姉から借りた水着

を着込んで、無論私を供につれての水浴である。午後五時頃帰宅すると、さあ、これからが大変だ。

彼女を湯殿に案内し、頭の前から足の先までを丁寧に洗い清めるのだ。その間、何度も不手際を叱られ、平手打は容赦なく頬に飛んでくる。部屋に帰ると彼女は足の方を高くさせて仰向けとなる。その後、私は夕食の準備に取り掛かる。すぐ買物。無論、全部彼女一人に

食べて貰うためである。夜食用の洋菓子、果物等あくまで彼女本位に整えた。夕食はさっきの通り顔坐布団でゆっくり食べて戴き、後かた付もそうそうに、玉の汗をかいている彼女の身体を拭き、後に廻って団扇を使つてあおぐのである。果物を食べていい気持そうになつてゐる彼女を見ながら、私は一生懸命汗をかきかき、あおぐのである。それがすむと、「今日は疲れた。早くねるから布団を敷きな」の声と共に布団を敷く。勿論彼女の布団だけを敷き、昼間の水

浴ではまっている彼女の足を按摩する。八時頃、すやすやと眠る彼女の寝息をききながら、そっと彼女のもとを離れ、台所に行き残り物で冷えた食事をすませ、洗物をしてから、土間に毛布一枚を敷いて横になる。これで、第一日は終わったのだが、これから後三週間の楽しい生活が待っている。それを感じるとなかなか寝つかれない。東京の両親のことが思い出される。まさか私がこんな哀れな生活をしているとは思ひもよらないことだろう。我儘者の私のお供をした、ときやへの同情はきつと強いことだろう。ところが現実には、第三者のはかり知れないものを秘めて、このように展開しているのだ。隸属と服従、佳人の足下に、ひれ伏す喜びはマゾヒストのみ知る快楽の極致なのである。三週間といわず、永遠にこの生活が続いたら、どんなにか楽しいものと、生涯いかなる犠牲をはらっても、私のマゾヒストを満足せしめる手段を



獲得しようとして心に誓った程だった。

二日目の朝、私が起床したのは午前六時だった。普段なら、こんな時間に起床するなんてことはあり得ないことだ。夏とはいえ、すぐ近くに波の音がきこ

え大変すがすがしい朝だった。彼女を見ると

すやすやと、まださも

気持よさそうに眠って

いる。音をたてないよ

うに、まず自分の毛布

を片付け、台所に行き

米をとぎ、昨夜買った

野菜をきざむ。できる

限り音をたてないで作

業をする。つづいて外

出。さすがに海水浴場

の町だけに、魚屋、八

百屋等。どこの店もす

っかり店をあけてい

る。牛乳、おさしみ、

鶏卵、果物など買入れ

たが、これが不思議な

もので、自然とすべて彼女の好きそうな物ばかりである。あくまで彼女が主体であり、自分のことなど、すこしも頭に浮んで来ないのだ。

軽い足どりで帰宅し、お湯を沸

かし、御飯を炊いて、料理にとりかかる。一応台所の方を終ると彼女の布団の廻りを除いて室の掃除をする。それがすむと恐る恐る彼女の枕もとに正坐し、

「いや、宣しいんです。そこまですなければ本当の召使になれないですよ」

「お嬢様、朝のお仕度が出来まし

た。おめざめになり

ませんか」

彼女はやおら、眠

むそうに大きな欠伸

をして立ち上り、

「いま何時？。夕べ

はゆっくり眠れたか

い。あら、すっかり

用意が出来ているの

ね、感心なこと」

私は早速布団を片

付け、紙と新聞をも

って、便所までお供

をする。彼女もこれ

には、さすがに遠慮

してか、恥しがって

か、

「いいから。なにも

便所まで、ついて来

私は戸口の床に正坐して彼女の用がすむのを待っているのだ。つづいて洗顔、勿論、大病人でも取扱うように私の丁寧な介添がつづく。朝食は、いきのいいさしみ、生卵、みそ汁、御飯、ラッキョーといった献立で、顔坐布団に坐っての食事である。食事後、彼女は横になる。ただちに後始末、着替えた衣類の洗濯、海水浴へのお供、十一時半頃になると私だけ一足先に帰宅し、食事準備をして彼女の帰りを待つ。こうした毎日のうちで一番楽しく且つ又緊張するのは夕食後の二時間である。これは鎌倉に來た二日目から私の方からの申し出で、私の反省の時間というのを設けた。その日の落度や不注意をまとめて、お叱りを受ける時間である。まず彼女の前に正坐して両手をつき頭を下げ、



「お嬢様、今日一日の勤めぶりはどうだったでしょうか。よろしく御指導願います」

彼女は、二、三の落度を話す。時には十ぐらいの時もある。例えば洗濯の仕方、御飯の炊き方などである。そのお叱りとともに、はげしい平手打ち、踏つけ、殴打がおこなわれる。普通は私の胸の上

に彼女が誇り、両頬への往復ビンタ、つづいて最後は顔乗りと放屁でおわる。そのあとでお叱りに対して御礼を申し上げる。まあざっと、このような生活の三週間だった。楽しかった鎌倉生活も終り帰宅したときの私の皮膚の色は赤銅色でみるからに健康そのものだった。母も見違えるように丈夫な私の姿に大変喜んだ。粗食と重労働は、かえって私のような虚弱な人間にとっては健康を促進したよう



である。ときやとのこうした関係は長くは続かなかった。その年の十月には年期が切れて彼女は群馬県に帰省した。いまごろは何処にいるだろうか、きっと、もう数人の子供の母親になっていることだろう。彼女の代りに新しく来たのは、これは女中でなく所謂派出婦で玉やという女であった。本当の名前は玉枝といい、年は当時二十四才であった。年令よりは若干若くみえ、ときやと違い丸顔で小

肥りであった。一寸みると十八か九位いにしか見えなかった。色白ではあるがどこか顔つきに意地悪そうところがあり海千山千の派出婦ずれがしていた。この玉やが主として私の世話をする係となつた。しばらくして丁度中学五年生の春がやってきたが、そ

れまでは、どうにも機会がなく、本当は前のときやと同じように彼女によつて馬乗り顔乗りをやつてもらいたかったのだが、どうにも手が出なかった。ところが幸いなことに五月頃学校で当時正課としてやっていた柔道の校内審査があり、私も三級の審査を受けることになった。無論虚弱な私は柔道などに興味なく、正課故やむをえずやっているようなもので審査などどうでもよかった。しかし私はこ

の柔道から思いついたのは、玉やを審査のための練習にことよせて私の相手をさせることであつた。早速玉やを私の室によび事情を話して練習相手になってくれることを頼んだ。

「ねえ、お前、練習相手になつてくれよ。無論お前は女だから投技をしないで固め技だけでいいよ。ただ、僕が仰向となるから、お前は僕の胸か顔かどちらかに乗つかつて両手を押えておればよいのだよ。僕が下から力をいれて上のお前をはねかえす練習だから、お前はただ一生懸命力を入れて上から僕をつぶしてくれればいいんだ。僕に負けないようしっかり押えていてくれよ」

彼女は当然命じられた仕事のようには割り切つてか、思ったより簡単に

「なんだかよく分りませんが、とにかく坊ちゃんまの上に乗つかつてればいいんでしょう。じゃ、やりますから、そこに寝て下さい」



そういつて、彼女は何んのためらいもなく、私の胸の辺りに両足をひろげて、どっしりと乗った。私が差出す両手をしっかりと

押え、なんの反応も示さず極めて事務的に私を見下していた。十分間位して私は「顔に反対向に乗ってこれよ」といった、彼女は

「はい」といいながら、胸の上から乗ったまま後向きとなり、尻をずり上らせて来た。なんの意識もない、ごく自然の動作だった。

「さあ、すこし暴れるから、下腹に力を入れてくれよ。そうしないと、お前はすぐはね返されてひっくり返ってしまうからな」

「そんなことしたら放屁が出ちゃいますよ。下の人にはたまらないでしょう」

「いや、柔道の試合だから生理的現象は認められているんだ。何も遠慮はいらないよ」

「では試合開始、試合時間は一時間、よい始め」

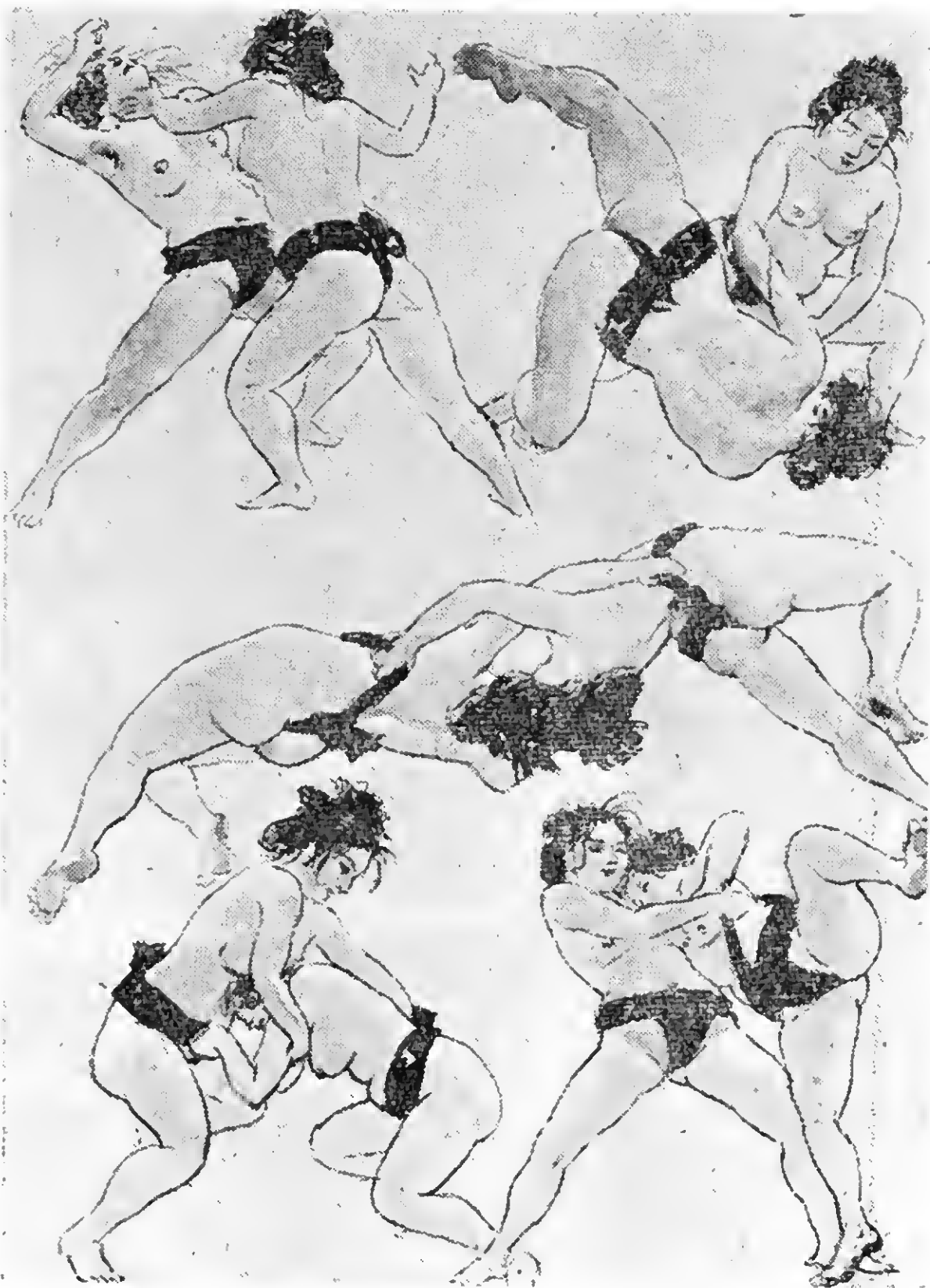
ここで試合となったのだが、私はすこしも抵抗を示さず

「試合時間が一時間だからこの一時間中にお前をはね返せばいいのだ。ゆっくりと最後の五分間できつとお前を負かしてみせる。それまではこうして下になっているさ別に苦しいわけなし、平気だ。でもお前が油断していると、すぐにひっくり返すからね。だからさっき教えた様に上からうんときばっていないければ駄目だよ。しっかりと押えつけていないと、ひ

女斗美絵巻  
シリーズ  
NO 5

熱 戦 譜

提 供  
雪 崎 京 人



「つくり返されるよ」

「こういいながら私はじっと、彼女の匂いに陶醉していた。彼女は私にひっくり返えされまいと、さかんに力んでいるのがよくわかった。そのうちに鈍い音がして、強烈な悪臭が鼻をついた。待望の彼女の放屁であった。」

「あら、出ちゃった。あんまりきばれきばれというのだから、坊ちゃまが悪いんですよ」

「といいながら別に恥かしそうな素振りも見せなかった。私は全然抵抗する気もなく、ただ尻の下になりたいばかりに、柔道にことよせ、こんなことをしているのである。なんという情けない姿である。しかし、私にとっては、この状態こそ何物にも替え難い貴重なものであった。玉やとのこうした練習は専門学校に入学するまで、一年と四カ月続いた。専門学校に入学し、親の手から離れ下宿生活をしたが、その娘さんと女中とから、さんざん虐められた生活もあるが、これは又の機会に発表したいと思います。」

(おわり)





シナリオ

ジェラシー

丘 与 志 夫

某旅館の表（朝）

人ごみを離れた露路。  
うす汚れた温泉マーク  
の看板。

どこかの家から、ラジ  
オのタンゴバンド演奏の  
音が流れ出している。曲  
は「ジェラシー」

旅館の一室

うす暗い室内——。  
たてつけの悪い雨戸が  
押し開けられ、さっと朝  
陽がさしこむ。

開けた雨戸から、窓外  
を眺める洋装の女。  
「ジェラシー」の音がこ  
こにも忍び込む。

洋装の女「あら、朝か  
らジェラシーだなんて、  
どうかと思うわ。ねえ、

純子さん

呼びかけながら坐りこみ、手鏡をとって化  
粧を始める。

部屋の中央に敷かれた布団にはもう一人の  
女がいる。顔には、無残にも強く猿ぐつわが  
かまされていて、苦しげにうめいている。

洋装の女「どう、苦しい？ でも、まだ解  
いてあげなくてよ」

その時、扉が外からノックされる。

洋装の女は、ハッとしたように立上り、手  
早く寝ている女の掛布団を引上げ、猿ぐつわ  
を覆いかくすと、洋装の上から男物の寝巻を  
羽織り、ルージュを拭き落す。

旅館の女中（外から）「あの、お食事を持  
ってまいりましたが……」

「あゝ」と返事した女。急いで、頭に手をか  
けてカツラをはずす。

洋装の女は、千田利明の女装姿だった。  
利明（カギを外した扉から顔だけのぞかす  
ようにして）「そこへ置いといてくれ」



女中「はあ？」

利明「いいんだ。後は自分でやるから」

女中「はい……あのう、お連れ様は？」

利明「まだ、寝てるんだ」

女中「さようでございますか。じゃあ、お

願いたします」

食膳を入口に置いて引き退る。

利明（膳を室内に運び入れて）「あゝ驚い

た。ほんとに気の利かない女中さんだこと」

布団の中の女は、苦しげにうめき、モゾモ

ゾと身動きする。

利明「フフフ……。どう、もう降参？」

いいながら掛布団をめくる。

蹴く女の全身がさらけ出される。赤地に白

く、小さな花模様を浮かした長襦袢の上から  
後手にガンジガラメに縛られた女の姿。乱れ

た裾からピンクの腰巻が  
こぼれ、細引の喰い込ん  
だ足が、ピクピクと苦痛  
を表現しているように震  
える。

利明は、その姿をじっ  
と見下していたが、再び  
カツラをかぶり、元の洋  
装の女に還り、女になり

切ったようなしぐさで縛られた女に近よ  
と、猿ぐつわだけを取る。

利明「どう？ 純ちゃん。細引、痛い？」

純子「……」

利明「もうお姉様のいうことには絶対にそ  
むかないって約束できて？」

純子「お姉さまはひどいわ。一晚中、こん  
なにひどくくくつとくなんて」

利明「それは、あなたがお姉様のいうこと  
をきかないからよ」

純子「でも……」

利明「なにがでもよッ！」

バシッと、利明の右手が、はげしく純子の  
頬に音をたてる。

純子「アッ！」（不自由な体をもがかす）

利明「純ちゃん。あんた、まだわからない

のネ。もっと苦めてもらいたいのネ」

純子「お、ね、え、さ、ま！」

利明「いいワ。もっともっと苦めたげる」

憤然として、縛られたままの純子におど  
り、解いたばかりの猿ぐつわを、再びかませ  
ようとする。

純子は阻もうとしたが、縛られた上に、組  
敷かれてる身に諦めたのか、眼をとじて  
されるにまかせている。

利明「フフフ……。観念した？ 逃げられる  
はずないものネこれじゃあ。さあ、覚悟はい  
いこと？ □ごたえなんかしたら、こんな目  
にあうのよ」

言葉も終らぬうちに、純子がさかんにもだ  
えて呻き始める。

利明の急所を心得た巧みなくすぐり責めが  
始まったからである。

不自由な身をころげまわって苦しむ純子。

それを追いまわして、執拗に責めつつける

利明の異様な眼差し……。

旅館前の露路（昼過ぎ頃）

女中に送られて、旅館を出るアベック。

仲睦じげに寄り添って歩く女の方が、しき  
りに着物の袖口のところを気にして手首をか

くそうとしている。

喫茶店の内部

一隅に利明と純子が向い合ってコーヒーを飲んでゐる。

ウエイトレスの一人がレコードをかける。

店内に『ジェラシー』の旋律が流れ始める。

利明「またアレか」

純子「好きだわ、わたし……」

利明「あんな曲がかい？」

そこへ、二、三人の青年が入ってくる。

純子（急にソワソワしだし）「ねえ、もう

出ましようよ」

利明（不審げに）「どうしたの？」

純子「だって……（と、青年達を眼で指差

して）会社のお友達なのよ」

利明「まあ……そうなの。フフフ……で

も大丈夫。純ちゃんは女なんだから」

純子「でも……」

利明「心配？」

純子「そりゃあ……」

利明「大丈夫だったら……。（突然大声でウ

エイトレスに）きみ、チョットそのレコード

止めてくれよ」

店内の客の眼が一斉に二人に集中される。

利明「アッ、いいいいいよ。失敬、止めた

くても結構」

客達の眼が「なんだい？」というようにジ

ロジロと二人を眺める。純子は真赤になって

うつむいてゐる。直後に、何事もなかったよ

うに店内は元に還る。

利明「ね。誰も純ちゃんのこと、怪しんだ

ヒト居ないでしょ？」

純子「えッ？……（こわごわ店内を見廻す

ようにしてから）……そうネ」

利明「きれいだよ、憎らしいぐらい……。

誰が、このあんたを女装の男だと見破れるも

んですか。もっと自信を持っても大丈夫」

純子「……」（ちよつとうなづく）

利明（思い出したように）「痛かった？」

純子「フッフ……。お姉様ったら、あんな

にきつく括えてくすぐるんですもの」

利明「ごめんなさいね……。でも純ちゃん

素晴らしかったわ。とてもお芝居だなんて思

えなかったわよ」

純子「しらないッ」

利明（時計をみて）「さあ、じゃあ出よう

か。僕、ちよつとヤボ用があるんだ」

純子「もうサヨナラ？」

利明「淋しい？ 純ちゃんは、これから一

人でアバンチュウルを楽しんだら？」

純子「一人で？……心細いわ」

利明「やってごらん。あんたは立派な女な

んだから……。サ、自信を持って」

肩をやさしく叩かれて、純子、否、二十二

才の青年、島福純は、不安げに利明の顔を見

上げる。

国電駅頭

自動販売器から自分の分だけの切符を抜き

とると、利明は純を見返って微笑する。

利明「じゃ、うまくやるんだよ」

純「でも……」

利明「さよなら」

さつと、人の列に紛れこんだ利明を見送っ

て、純は戸迷ったように佇む。

商店街通り

うつむき加減に、純の歩く姿がある。淡紅

色の羽織が若々しく、すれ違う人の中には振

り向いて行く者も少くない。

純の心中には、道行く人の視線が、全部自

分集注されているような錯覚と、男であるこ

とを見破られそうな不安と、誰か自分の魅力

に惹かれて声をかけてくれないかという期待

が、入り交って渦を巻いていた。

勿論、電車に乗ったはずの利明が、みえ隠

れに尾行してくるのに気のつくゆとりなどは

なかった。  
映画館前のパチンコ屋（夕暮時）

利明がゆっくりと玉を撥じいている。眼は玉の行方より、向いの映画館の出入口に主に向けられている。突然、玉を撥じく手が止る。利明の眼が映画館に注がれたまま、手だけが隣の台の中年男の肩を叩いて、

利明「この玉、みな使って下さい」  
客「……………」

いわれたその男は、妙な顔をして、急いで出て行く利明の後姿と、受皿に残っている相当数の玉とを見くらべている。

映画館の出入口

ネオンの光りを受けて一際華やかに映る純



の姿と、それに並ぶ中年紳士の姿がゆっくりと歩いて行く。曲り角で立ち停って話していた二人は、うなずき合って、又、歩き出す。立看板に身をひそめるようにして、その様子を見かねた利明。  
純のアパート（夜）

四方に気を配りながら、素早く自室にすべり込む純の姿。

室内

殺風景ながら、調度品は青年の独り住いには不似合なものが並んでいる。

純が、ソワソワした様子でハンドバッグから指輪の小箱をとり出す。

指にさして、しげしげと眺めてから鏡台のカバーを外し、美しい自分の娘姿を映してウットリとしたように見入る。やがて惜しそうに羽織を脱ぎ、帯を解く。

すっぱりとはずしたカツラを、丁寧に箱に収めてから、洗面器に水を汲む……。

公衆電話（翌日の午前）

ボックスの中で、気ぜわしうにダイヤルを廻す利明の姿。

純の勤務先のデスク



純「ハイハイ、島福ですが……。ああ、昨日はどうも……。えッ今夜？困ったナア。いや、そうじゃないんだけど、ちょっとはかせない用が……。ええ、どうしてもはずせないんです」

隣師の女事ム員が、チラリと横眼で見て、クスツと肩をすくめる。

## 公衆電話

利明「そう。やっぱりネ。どうしても駄目なの？大切な用って、一体どんなことなのよ。……いいわ、云えないんなら云わなくってもサ。でもいいこと？ あんたにはわたしがいるってことだけは忘れないようにネ。わたしのような細引の味を、他の誰れがあんたに味あわしてくるっていうの？」

## 純のデスク

純、「忘れるだなんて……そんなこと。ええ、でも今夜だけは……。ホントに悪いんだけど……。はア、はい。ではまた。ええ、よくわかってます。じゃあ」

受話器を置いて、思わず少さく溜息をもらす純。

女事ム員「島福さん、好男子の悩みは深いわネ」

純、「そ、そんなじゃないよ」

女事ム員「あんまり女の子を泣かすと、後がこわいわよ」

純「ちがうったら。田舎からおフクロが出てくるんで、昼から早退させて貰おうと思ってるくらいなんだ」

女事ム員「怪しいもんだワ。でも、いずれにしても、私、今日、退けたら映画でも御一緒にと思ってたんだけど、駄目ネ」

純、「……………」

つまらなさそうに机に向き直る女事ム員。

## 純の勤務先のビルの前（正午）

純、急ぎ足で出てくる。ちょっと四方を見廻してからタクシーに手を挙げる。

## 純のアパートの前（二時間後）

人眼を恐れるような身ごなしで、若い娘が一人出て来て、急いで角を曲る。華やかな色どりの若々しい茶羽織が陽の光りに、ういいういしいはじらいをみせる。

## 遊園地の一隅にあるベンチ（三時間後）

兄妹とも、父娘ともとれる一組のカップルが、木蔭に身をかくすように賑わう遊客の群から離れて憩んでいる。

純「山本さん」

山本「うん？」

純「あの……………」

山本「どうしたのだネ」

純「……………（迷いながら）ううん、何でもないの」

山本「おかしいネ、いつてごらんよ」

純「意を決したように」「山本さんとは昨日初めてお逢いしただけに、わたし、ずっと以前からの知り合いのように思えて」

山本「わしもそうだよ」

純「……………」

山本「きみと友達になれて、わたしはほんとに良かったと思っとる。きみとわたしとは前世からのつながりがあったんだろうな。わたしはもう、どんなことがあっても、きみを離さないつもりだよ」

純「だから……だからわたし……………」

山本「だから？」

純「わたし……………山本さんにかくしてることが……………」

山本「恋人？」

純「いいえ、そんなことでは……………。思い切っているよ、きみが女性じゃないってことは」

山本「純子さん（言葉をさえぎり）わかってるよ、きみが女性じゃないってことは」

純「えッ？……………（うなだれて）すみません。でも……………」

山本「いいんだ。きみの気持はよくわかってるよ。だが、わしと合うときのきみは、あくまでも純子だよ。わしの妹だ、いや娘でもいい。それでいいんだ」

純「山本さん……」

山本「サ、その話はもう止そう。これから銀座へでも出て、飯を食おうよ。そう、今日はきみの着物を買おうじゃないか」

純「うれしい」

山本「でも、ついでだから一つだけ。昨夜後の青年を振り向いてきみはハッとしたらしいネ。あの青年はきみの恋人じゃないの？」

純「嫌い。大嫌いよ、あんなヒト。あたしあのヒトの、男のままの服装で女の口調でしゃべるのを聞くとゾッとするワ。気味がわるくて……」

山本「ほう？」

純「わたしがこんなことをいうと変に聞えるでしょうけれど、あのヒトの女装はただのおあそびヨ。わたしを縛るときだけのお芝居にすぎないワ。でも、わたしは違う。わたしは本当に女になりたいと思ってるの。出来ることなら手術でもして……ネ山本さん、わたしのこの気持、わかっていただけますわネ？ ただの遊びじゃない、この気持。……」

山本「……」

人が変わったような、純の真剣な態度表情に、ちよつと驚ろいたふうの山本。

喫茶店のボックス（数週間後の夕方）

純が一人で人待ち顔に坐っている。

客がはいってくる。入口を気にしていた純が、ハッとしたように顔を伏せる。それをめざとく認めた客、利明がじっとみつめているところへ、山本が後から入ってくる。

山本は利明に気づかず、純のボックスへ近寄っていく。

山本「待ったかい？」

純、顔を上げ、救われたように微笑する。

利明を眼で探すが、見当らないのでキヨロキヨロする。

山本「どうした？ 誰か知ってる人でもいるのかい」

純「え？、いいえ別に……」

山本「そうかい？ ま、そんなことはいい

（ウエイトレスに）紅茶を貰おう」

純のアパートの前（二時間後）

並んで入る純と山本の姿。

手前の道角で、じっとみつめている利明の黒い影。

純の部屋に電灯がつくと、くやしそうに見

上げている。

純の部屋の中

山本「いつもきれいに片付いているネ」  
はにかむように微笑する純。

純「これ、着てみたいわ」

山本「早速にかい？ いいだろう、着てごらん。手伝おうか？」

純「いやッ。ネ、お風呂へ行ってきた」

山本「風呂？」

純「ハイ、石鹸とタオル。その間にわたし、着替えしときますから……」

山本「着替えるところを見たいのだがネ」

純「だめよ。恥しいんですもの」

アパートの前

利明が、まだ立ち去りかねて、往ったり来たり、窓を見上げたりしていたが、山本の出でくる姿に慌てて素知らぬ態で曲り角に身を入れ、気付かず通り過ぎる山本の後姿をじっと睨みつけている。

純の部屋

赤い襟のついた肌襦袢、その上に真新らしい長襦袢を着て、純は、姿見に映った自分の姿にうっとりとして見入っている。そこへ山本が風呂から帰って来て、ホホウ、という顔付で噴める。純がはずかしげな素振りで見返る。

山本「よく似合うよ、ま  
ったく……」

純、頬を紅潮させながら  
無言で四、五本の腰紐を差  
出し、艶やかな身ごなしで  
横坐りに坐り、両手を背中  
に組んでチラッと山本を流  
し眼で見る。

純（低い声で）「お、ね、が、い……」

黙って瞞めていた山本が、渡された腰紐と  
純の姿を困ったように見較べていたが、しよ  
うがないといった様子で、その手首に紐を巻  
きつける。

山本「これでいいかい？」

純（肩を揺すって）「だめッ、そんなの……」

……もっと強く……」

山本「でも、強くしたら痛いよ」

純「いいの。いくら痛くたって」

山本「そんなこといって……」

身もだえしてせがむ純を、山本が当惑した  
ように瞞める。

部屋の前

四方に気を配りながら、利明が扉の鍵孔か  
ら覗いている。

夜の街

酒に酔った

ように、一点  
をみつめたま  
まフラフラよ  
ろけながら歩  
く利明の姿。

何かブツブ

ツ口の中で呟  
きながら、憑  
かれたものの  
ように歩く利

明の姿を、すれ違う人達が気味悪げに道を譲  
り、振り向いて囁き合って見送っている。

純のアパート（翌日の朝）

鏡台の置時計が八時五分前を指している。

まだ寝ていた純が、扉のノックに起されて  
大急ぎで、寝巻にしていた緋の長襦袢を脱い



で、布団の下に隠す。小單笥の抽出から、丸  
めて押し込んであった男物の浴衣を出しては  
おりながら

純「ハ―イ、今、開けます」

扉の留金を外す。待ち兼ねたように入って  
きたス―ツ姿の女。

純「まあ、利……いえ、お姉様」

利明「うふふふ……。おどろいた？ 起して悪かったわネ。でも、もう八時よ。いくら日曜だからって、早いつて程じゃないもの」

純「だれかに合わなかった？」

利明「アラ、ひどいわね。わたしだって、

純ちゃんほどじゃないけれど、一目で見破られる女装だとは思ってないわよ」

純「……済みません」

利明「ふっふふ、謝まることはないワ」

いいながら、利明、扉の留金を掛け、純の肩を押し返すようにして、持って来た小型のトランクを提げ直し、意味あり気に微笑しながらベッドのそばへ行く。

利明「サア純子さん、お化粧なさいナ。私ネ、今日はとてもいいプレゼントを持って来たのよ」

いいながら、トランクを開けてピンク色の絹腰巻をとり出す。

利明「それから、これよ」

続いてとり出したものは、真白な新らしい綿ロープの束。……純の表情に哀しげな影が走る。

街の呉服店

山本が、華やかな反物をアレコレと選って

いる。店員が奥から包みを持ってくる。

店員「どうもお待たせ致しました。こちらがお着物、こちらがお羽織で……。入念に仕立ててございます」

山本「ああ、じゃあこれが残金。それからこれも一つ仕立てて置いて貰おう」

店員「さようで……承知致しました。どうも毎度ありがとうございます」

山本、包みを持って表へ出る。

純の部屋

日本髪に白衿の緋の長襦袢に装った純が、真白の綿ロープで高手小手に縛られている。スーツ姿の女、利明が後に廻って純に猿ぐつわを噛ます。

純「ウッウ」

利明「どう？しばらく振りで私の縄を受けた気持は、フッフ……おはなしにならない筈よ、あの山本とかいうおじいちゃんの縛り方とはサ」

純（ギクツとしたように利明の顔をあおぎ

見て）「ウーッ、ムムム」

利明「私が知らないと思ってたの？」

いうのと同時に、突き転がされた純の長襦袢の裾が割れて、ピンクの腰巻がのぞける。

利明の眸が急激にキラキラと輝きをみせる。

利明「ネエ純ちゃん。あんた、ホントに美しいわね、そうして縛られてる姿って何ともいえないわよ」

いいながら、傍に坐り込んで、純の上膊部の辺りをグイとひねり上げる。

純「ムッ」

痛さに呻いて不自由な体をくねらすはずみに裾が余計に割れて白い脛がのぞく。それを狙って利用の手が延びる。純、またも呻いて身をくねらす。利明、たまらなくなったように、狂気じみた動作で純の体をとろきらわすひねり廻り、くすぐり始める。純、いもむしのように屈伸し、ころげ廻って苦しみ出す。利明の顔に満足げな微笑が浮ぶ。

部屋の前

山本が周囲を気にしながら扉の前に立つ。遠慮がちにノックをする。返事を待つが、無いので再び扉を叩く。漸く「どなた？」という声が小さく扉を通して聞える。

山本「わしだよ」

と小声で云う。室内の気配が静かになったのが気になって、さらに

山本「わしだよ純ちゃん。早く開けておくれよ」

扉にはりつくようにしていた山本の体が、



突然内開きにされたドアに肩すかしをくった  
恰好で部屋にすいこまれる。

部屋の中

さき程の擦り責めに、グッタリとなったよ  
うな純の縛られたままの姿の横に、ガンジガ  
ラメにされ、強く猿ぐつわを噛まされた山本  
が突き飛ばされるように引き据えられた。

利明「よく来たワネ、おじいさん」

山本を縛るのに乱れた服装を直しながら、  
利明が勝ほこったようにいう。

利明「あんたはお金持だから、綺麗な着物  
なんかで純ちゃんを誘惑してるらしいけど、  
このことは私の大事な妹なのよ。このこととっ  
ちやあ、そりやあ着物は魅力よ、けれどその  
上にもう一つ何よりも強い魅力があるのをお  
じいちゃんは御存知なの？」

山本「ウッウ」(縄を解けという身振り)

利明(黙殺して)「今、純ちゃんの口から  
ハッキリ聞かせてやるわよ」

ニンマリと笑って、純を抱き起し、猿ぐつ  
わだけをはずす。

利明「サ、純ちゃん。これからが大切なと  
ころだからハッキリいってちょうだいよ」

純「お姉さん、山本さんまでこんな……」

ひどいわ。解いてあげて……」

利明「いらないことをいわないで、私のい  
うことに答えればいいの？」

純「……」(済まなさそうに山本を見てち  
よっと頭を下げる)

利明「純ちゃん。あんた、綺麗な長襦袢や  
着物は好きだわネ」

純「そりやあもう……」

利明「だったら、着物を着て、女の姿にな  
っただけで満足？」

純「……」

利明「女になっただけで、縛って貰わなく  
てもいいのかって訊いてんのよ？」

純「……」

利明「じゃハッキリ訊くわ。私と、このお  
じいちゃんと、どちらが好きなの？」

純「そ、そんな……」

利明「おっしやいよ。サア、一体どっちが  
好きなのさ」

純「お願い、山本さんの縄を解いて上げて  
……」

利明「答えは？」

純「……」

利明「どうしたのよ！ いわないと……」

純「お、お姉さん……」

利明「え？、お姉さんていったわね。やっ

ぱり私の方が……」

純「き、ら、い」

とたんに、利明の表情がさっとこわばる。  
赤く塗った唇がひくひくとけいれんしたかと思  
うと、外したまま手に持っていた猿ぐつわ  
を再び純の口に強く噛ませる。

純「ムッ、ムムム」

利明「よ、よくも、よくもそんな……」

次の瞬間には、純の全身、至るところに利  
明の嫉妬に燃えた責めの手が舞い出した。

純は、後手に固く縛られた身をもだえくね  
らせて転がり廻る。利明の責めは、かつてな  
い執拗さで純を追いまわす。

山本は、自分の自由を拘束している縄目も  
忘れて、部屋中に舞い狂うような、緋の長襦  
袢を乱してもたえる美女の姿に目を奮われて  
いた。

窓のすき間からしのびこんで流れるメロデ  
ーには三人とも勿論気がつかない。聞き手  
のない曲は、それでも、部屋中を転げまわる  
人間の捲き起す空気の波を、さらに小さく震  
わせて走っていた。曲は「ジエラシー」であ  
った。

(おわり)

# 緊縛フォト撮影の実際

——若奥様の脱虐ムード——

塚本鉄三

## 撮影の要領

- モデル……………梨花悠紀子
- 撮影……………塚本鉄三
- カメラ……………ローライ・オートマツト
- レンズ……………ビオメター八〇ミリF二・八
- フィルム……………ネオパンSSS
- 現像液……………D76とD72
- 印画紙……………シーガルF2
- 照明用具……………ウエスト・スポット三  
五〇W一個、フラッド一個、クリップ二個、  
コード若干、ランプ保持台一脚
- 小道具……………ロープ一本、エプロン一、  
ナイロン・ストッキング。
- 場所……………二間つずき和室

○  
どのモデル嬢にしても、そうであるが、初めて縛って撮影したものは、第一回目、第二回目ぐらいいはるくなくとも、出来ない。この梨花悠紀子さんにしても辻村氏が最初にカメラを向けたときのものは今から見れば大したものではない。こんなことを言えば辻村氏に申しわけないのだが、これは別に氏の罪でもな





ければ、悠紀子さんのせいでもない。どのモデル嬢にしても、最初は皆こうなのである。辻村氏の「鑑賞用女性」に収載された写真は

あの文章と共に、又それなりの価値はあるのだが、当時悠紀子さんの今日の進況を誰が予測しただろうか。



最近二、三カ月の本誌の口絵に活躍する梨花悠紀子さんの数々の写真は、その豊かな表情によって、マニヤをうならせているが、十月号の連続組写真「美しい玩弄物」では顔面の恍惚たる表情は勿論のこと、足の爪先に至るまで責められる被虐態としての感情を十二分に露呈しているし、同じ号の組写真「自由の強要」では、上半身殊にその端麗な顔の表情を、その場面場面に於て、一枚一枚異なる感情をこめて出していることは、全く見事という外はない。只単に縄のきびしい縛しめに耐えるということだけでは、このような緊迫感のある表情の変化を出すことは出来ない。

九月号の口絵、組写真「恐怖の塩水」では悠紀子さんの豊かな天分の片鱗を見せているが、同月号の「ローソクの拷問」では乳房を灼かれている身動きの出来ない、悲鳴も出せない苦悶の表情が、全く一分のすきもなく見事に描かれている。大体、悠紀子さんは、縛者の責めの触手に対しての反応が、非常に鋭敏であるし、素質的にも、この境地を受け入れる余地を十分に持っているということが、撮影してよくうかがえ



る。

実際のところ、最初辻村氏から梨花悠紀子さんを紹介され、その第一回に撮影された写真を見せられたときは、別に大して期待は持っていなかった。それでは、一、二回撮ってみようか、という軽い気持ちだけで、その時は今のような素晴らしいモデルになるだろうなどということとは夢にも考えてみなかった。八月号の「座敷牢の麗軀」や「雨装束とチ

ューリップ」は辻村隆氏の構成によってなされたものだが、すでに読者通信その他で多くの読者から賞讃の言葉を浴びている秀作で、「女体逆さ吊り図絵」は九月号のグラビヤ口絵「逆さ吊り」と共に、出来ばえの如何は別として、彼女の積極的な意欲を見せた写真で常々「逆さ吊り」にされてみたいと言っていた彼女の念願を果した一作でもあるわけだ。今月号のグラビヤ口絵でも、梨花悠紀子さ

んは大活躍をしている。

「庭園の美観と美しき干物」の竿竹の吊りは野外の豊富な光線の中で、彼女の全身の美しさが浮彫されたように輝やいている。普通の職業的なモデルだったら、逆さ吊りなんかは論外としても、中々こういったポーズでも、快くやってくれないものである。それが、彼女の方から積極的に「こうやったらどうだろう。こういうポーズはどうでしょう？」と申出てくれて、時にはこちらの方が「そんなポーズは無理だよ」と断ることがある位なのだ。「涕泣」では、縛りを解かれたあとの表情を出してみた。こういったことは駆け出しのモデルでは、ちょっとむづかしいシーンだ。只なんとなくしに後手に縛られて、ぼかんとしているといった写真だったら、初めてモデルになった女にでも、誰にでもできるものだが、こういう表情とムードのある写真は簡単には出来ない。これは縄の束を目の前に投げだしただけのことではない。実際に長い間縛り上げて責めぬいた末に縄を解いた時の瞬間の表情である。二の腕に残った縄痕、疲れきったそれでいて満足気な被虐のポーズ。意味あり気に見上げた顔つき。「縛っていない縛り写真」としての新境地を開拓すべく狙いをつけ



た第一作がこれである。

組写真「責めに憑かれて」の七枚の写真は、タフな悠紀子さんを、さんざんに責めぬいた時の側面のカメラアングルからのものの一部であって、このあと、彼女の両足を両側へ開かせて完全にうかして手摺に縛りつけてしまったのだが、その写真は、いずれ発表する機会があることと思う。

このようなわけで、私も最近のモデルとしての悠紀子さんには、非常な期待と楽しみとを持ってカメラに向って貰っていたのだが、この「緊縛フォト撮影の実際」を数回掲載した結果、中々の好評なため、引続いてやってほしいということなので、丁度油ののりきったところで、再び彼女の登場を願うことにした。

題して『若奥様の悦虐ムード』といっても、ムードにエプロンを配して、そのアンバランスの面白さと、最近頼に肉づきのよくなった彼女のフォルムの美しさを追求、嚴重な高小手縛りによって、悦虐的なムードを醸し出すという欲ばった狙いを持ったのである。

八月十日（木）

暦の上では、すでに秋は立ったというのであるが、日中の暑さは格別きびしいものがある。



った。

悠紀子さんの都合を見合せした結果、午後六時に天王寺駅前に落ち合うことにした。近くの喫茶店で軽い食事をかねて簡単な打合せをすませ、かねて予約しておいた茶臼山の高台にあるホテルの三階に陣どった。六帖と四帖半の二間の外に、二坪ばかりのベランダがついていて、陽が落ちると共に、北の窓から涼

しい風が吹き込んできて全く過し易い。冷房をしているため閉めきっていた窓も、すっかり開け放つと、西の空に通天閣のネオンがきれいに輝いている。残照が刻一刻と薄墨に包まれると、街の屋並はすべて闇の中に溶けこんでしまい、遠い北の方の空だけが、ぼんやりと明るさを夜空に映している。

素晴らしい夏の夜景を眺めながら涼しい風に

汗ばんだ全身をなぶらせていると、これから撮影準備にかかるのが億劫になるくらいだ。しかし、彼女の帰宅時間を考えると、正味二時間ぐらいしか撮影時間がないのだから、のんびりとはしておれない。

先ずマミヤレフを三脚にすえ、これには一〇五ミリのレンズを装置してアップを狙うこととして、六帖の部屋の一隅へ置く。ローラ

イは手持で自由なアングルからシャッターを切ってゆくことにきめる。(ここに掲載した写真は、全部ローライによる)いつものことながら、カメラの準備、配光、などで三十分はかかる。ライトを点灯すると急に室温が昇ったような気がして、汗がダラダラと頬を伝わるのがわかる。

この部屋は高台の上に建った建物の三階な

ので、見晴しもいいし風の通りが非常によい。ため、外部からの冷たい風に頼ろうか、室内の冷房に頼ろうかと、一寸迷わせられるところだ。しかし、なんといっても、外部からの新鮮な空気の方が魅力なので、窓を全部開放したままで撮影にとりかかる。

エプロン——、これは何んでもないことだが、面白い思いつきだ。まだハイティーンの悠紀子さんが、若奥さんにふさわしいかどうか、これは一寸疑問だが、とにかく、エプロンをしめ、ぐっと両手首が背中中で背負うように高々と高手小手に縛り上げたところは、マニヤにとっては魅力的であろう。いろいろとポーズをとって貰い次々とシャッターを切ってゆきたい意欲にかられて、思わずカメラを持つ手に力がこもってくるのを覚える。こうなると、暑さも急に感じなくなってくるから不思議だ。

先にも述べたように、悠紀子さんは第三者から、髪の毛を掴まれたり、足を握られたり縄尻を引っぱられたりなんかすると、敏感に反応するので、この一瞬のシャッター・チャンスを把握することが成功の鍵だということがわかってきた。勿論、事前に、どういう設定で、どういう表情を期待するかということ





は、大体打合せしておくのだが、お茶目の彼女は、そんなとき、メツと片目をつぶって見せたり、舌を出して見せたり、中々に演技派である。

だから、彼女のようなモデルには、三脚にカメラをすえて、スロー・シャッターで落着いて、というよりは、手持の早いシャッターでドンドン撮ってゆく方が成功率が多いよう

だ。映画のスチール写真なんかも、最近はい型カメラを用いることが多くなったようだがビュー・カメラで撮ったものなんか、動作の激しいアクション物なんか、殊にぎこちなく感ずる写真がある。例えば、チャンバラ物では、刀をふり上げ今正に斬り下ろそうという緊迫した場面なんだが、出来上った写真では刀をふり上げたままの姿勢で長い間、動いて

はいけないと、そのまま待たされていて、腕がくたびれてしまった、といったものがあつて、映画の中での激しい斬り合いとはうらはらなものを見受けることがある。少しぐらい流れたって、実際に激しく俳優を動かして、スナップしていったら、どうだろうかと思わされることがある。

緊縛フォト撮影の実際に於ても、スロー・シャッターで「そこで停って動かないで、はい、こちらを向いて、」パシヤリ、といった調子では、動きのあるものや一瞬の見逃がすことのできない緊迫した表情といったものはキヤッチすることは出来ない。九月号の組写真「恐怖の塩水」にしても、F二・八の開放で百分の一のシャッターを切ったものであるが、予期した効果は早いシャッターによって或る程度つかむことが出来たと思う。勿論、鮮明度の点では、幾分犠牲を払わねばならなかったのではあるが、反面、遠近感が誇張されて深味のある写真になっているという利点も見逃すことは出来ない。

組写真の手法によって、フォト・ストーリーとしての面白さとムーヴマンのある生々とした写真が誌面一ぱいに躍るように占領する新鮮な感じは、たしかに、今までの静止的な



緊縛写真の域を一步脱したといつてよいだろう。それで、今回も手持で早いシャッターを切るよう心掛けた、しかし、何キロワットもライトを使用することが出来ないので必然的に、絞りの方は開けざるを得ない。3S級のフィルムを用いることによって、もう一段ぐらゐは絞れることとは思ふが、どこまでカバーできるかは、今後の実験に待たねばならない。

緊縛写真では、深い焦点深度をもった写真も好まれる一面も持っているのだ、現在新しい感じを持つ、これら一連の作品も、いずれは飽きられる運命を持つものであるからストロボによる運動体の撮影など、その他、いろいろ新しい方法を目下考えている。

文章が横道へそれてしまったが、悠紀子さんは髪の毛を第三者に纏まれて引き据えられた時の表情をどのように出すだろうか、先ず第一枚目の写真で、その課題に答えることにした。誰かが、梨花悠紀



子さんは、その哀愁を帯びたマスクによって緊縛モデルとして大変とくをしていると言っていたが、たしかに被虐モデルとしては、辻村隆氏の言われるように有馬稲子に似ているとまではゆかなくとも、二十人前ぐらゐの美貌の持主であるから、それだけでも貴重な存在である。

それに加えて、彼女の緊縛に対する熱意がまた並々ならぬものがあるのだから、この方は、ちよつとやそつと探したって、そうザラにどこにでも転っているものではない。百万円の宝クジを当てた以上だと羨ましがられる辻村隆氏は、かくも素晴らしい二度と得難い梨花悠紀子というモデル嬢を探し出したし、鑑

賞用女性から、よくもこれまでに飼育したものではある。

半開きに何か言いたげな口もと、眉と眉との間でひめられた額、じつと畳の上を凝視した目つき。これから、どのような責めを加えられようとするのか、半ばの期待と不安と恐れに満ちた顔つきである。同じような条件でシャッターを切ったとしても、これはまあと驚くくらいいろんな写真ができるものである。まばたきして目をつぶってしまったのなんかは論外として、このような差し迫った表情もそのチャンス逃すと、一瞬の中に変化してしまつて、至





って平凡な顔つきになってしまふのだから、むずかしいものだ。

短焦点の弊で顔だけが大きく写ってしまったのは、顔面を強調するため、まあ、いいとしても、

いささかスマート気味の悠紀子さんの肩口のあたりが痛々しい感じがする。責め写真としては、その方がいいのかもしれないが。襖のかけから半身をのぞかせた彼女、半逆光でシルエットとして出したと思ったが、ザラ紙の印刷では果してストッキングなどのデテールが出せるかどうか。ナイロンのストッキングは、彼女のはいてきたものを一時利用させてもらったものだ。(1)(2)(3)

エプロンをつけて、靴下を口にくわえさせられた悠紀子さんの愁いを帯びた横顔は、一体何を想っているのだろうか。背中の嚴重という文字にふさわしいような後手しぼりが、ぎゅちりと肌に肉に喰い込んで、びりっともしない緊縛感で目の中に飛びこんでくる。丁

度襖のところは部屋の中央で、背後には小道具が散乱し三脚にのせたカメラが置かれてあるのだが、レンズ開放のお蔭で、楽屋裏のがらくたは、うまい具合に視界からは、完全にはずれている。(4)

丁度部屋の中央になるあたり、襖のところではポーズをとっている悠紀子さんに対して、四畳半の部屋を通り越して、ベランダのところから窓を背にしてローライがレンズを向けている。日中だったらピントグラスが見にくいのだが、そこは日没後なので、ベランダの蛍光灯を消してしまうと、ここは撮影場所としては特等席である。それにひきかえ、マミヤレフの方は、六畳の部屋の奥だから、冷房がきいているといったって、暑苦しいことはその比ではない。一人のモデルを両側から狙う。これは一寸面白い思いつきである。

悠紀子さんがマミヤレフの方へ正面向いて立膝ついたポーズ(向う側にカメラが見えている)は、ローライの方からは、完全な背面のポーズとなっている。(5)立膝から身体を右へ半回転させたところ、身体は半身となり、顔はこちらを向いている。(マミヤレフでは、どのような写真がとれたか、いずれ辻村隆氏の提供で誌上を飾るだろう。) スポッ

ト・ライトによる強いハイライトが彼女の肌を白く輝やかせている。(6)

やがて、ごろりと横たおれのポーズをとった彼女の頭の上へのしかかるようにして、最も至近距離からシャツターを切ったのだが、ライトの位置を変えなかったために、顔面が完全に死角の位置になってしまった。マミヤ

レフでは臀部の方から狙うことになるわけだ。一寸面白いアングルなのだが。(7)

両面作戦といえば、襖によって半身をかくした写真(2)と(3)も面白い。こちらから見て片方は顔を見せ、片方は顔をかくしている。しかし、これに向う側のカメラから見ると逆になるわけである。この膝で立った写



真でごらんのように、ヌードにエプロンはいささかエキセントリックなとり合せて面白いし、こういったポーズのときには、完全に前面をかくし、それでいて背面からは、完全に開放するというわけだ。

私はある若い女性が全裸のまま割烹着を着ているのをアパートで見たことがある。正面向っている時はわからないのだが、うしろ向きになると、何にもつけていないので素裸というわけである。こんな恰好で台所仕事をしている、さぞ、涼しいことと思うのだが。

私は今度の経験で、次回、もう一度エプロン姿を撮るときは、もう少し小さ目のものを用いてみたらと思う。それに帯とかハタキなんかを配してみたら面白いだろう。

前かがみに重ね餅になったところ(8)と(9)は同じポーズだが、只カメラアングルが違うだけである。永遠の憂愁の緊縛モデル梨花悠紀子さんが、その全身にカメラのレンズを浴びて沈思黙考するポーズは、マニヤにとっては、たまらない魅力を持つことだろうと想像される。(10)

私は職業的な臭味のいささかもない、梨花悠紀子というモデルを駆使して、更に変わった撮影の実際を書きたいと思っている。

# 緊縛フォト撮影の実際

— 首縄と足首縛りの一例 —

塚 本 鉄 三



## 撮影の要領

- モデル……………大塚 啓子
- 撮 影……………塚本 鉄三
- カメラ……………マミヤレフ・C2型
- レンズ……………セコール一〇五ミリ
- フィルム……………ネオパンSS
- 現像液……………D76とD72
- 印画紙……………シーガルF3
- 照明用具……………ウエスト・フラッド
- 三〇〇W三個、同スポット一個、クリップ三個、バースライト一台、コード若干
- 小道具……………白綿ロープ一本
- 場 所……………洋 室
- 日 時……………七月十八日(火) 午後三時

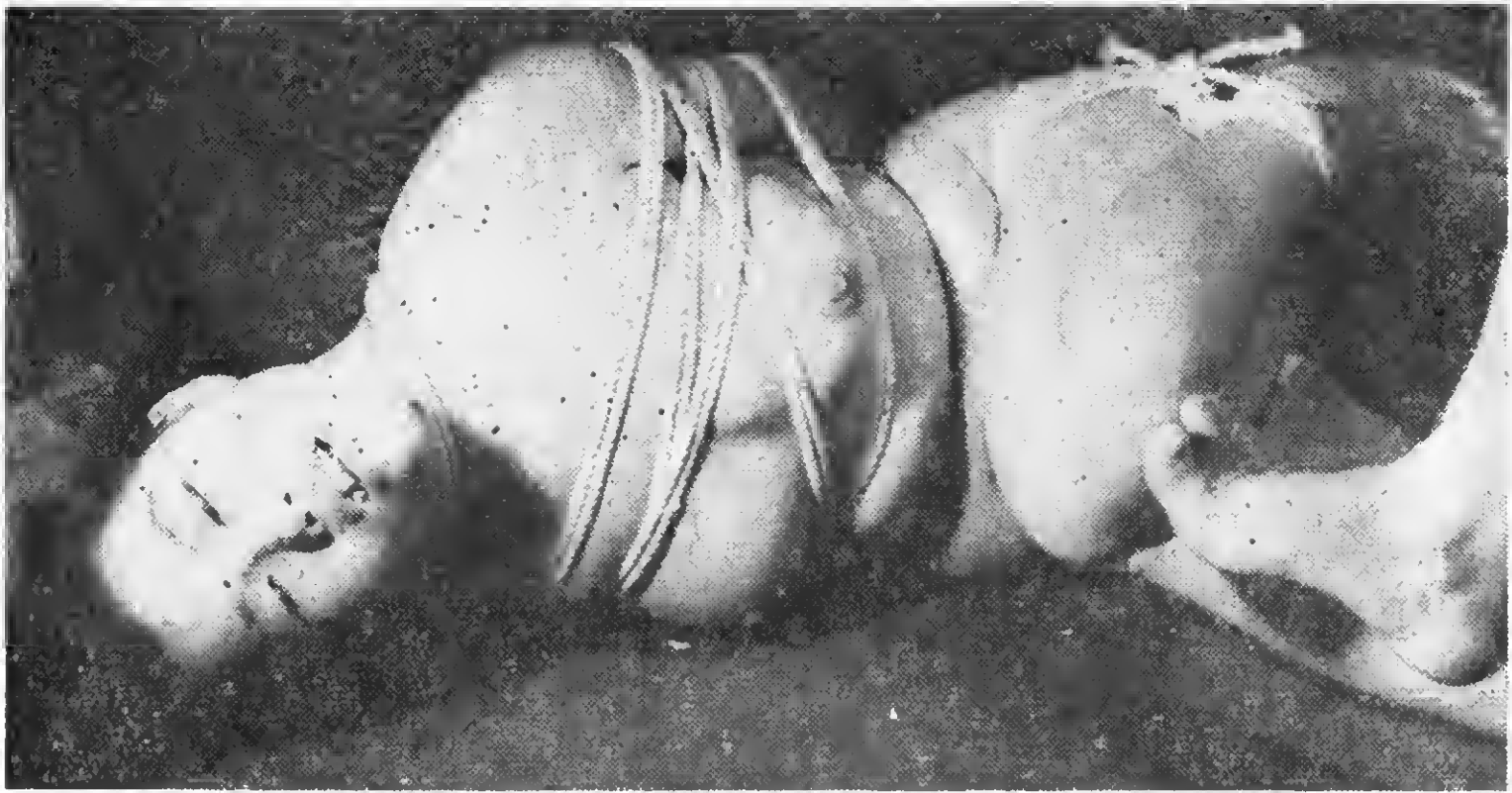
○

七月は一年中で一番暑い月だと言われているが、今日はからっと晴れ上って朝から気温は三十度を越す猛暑ぶりだが、空気が乾燥しているせいか、その割にむしろいい。

大塚嬢には、午後一時という約束をしていたのだが、急にとびこみの仕事で、午前中に和歌山まで出張撮影しなければならなかったため、午後三時に延期してもらう。

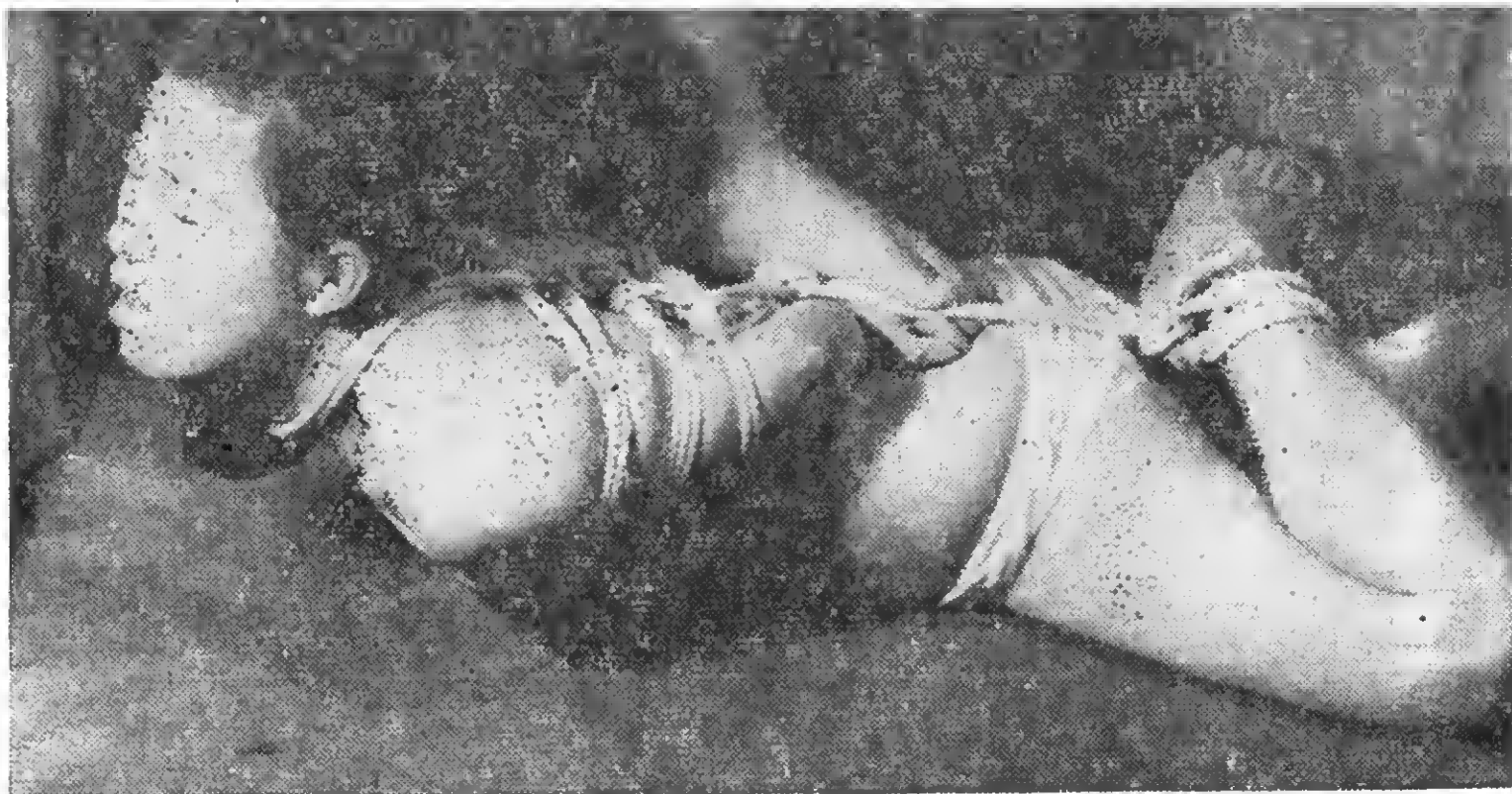
和歌浦の海岸で水着撮影をすませて折返え



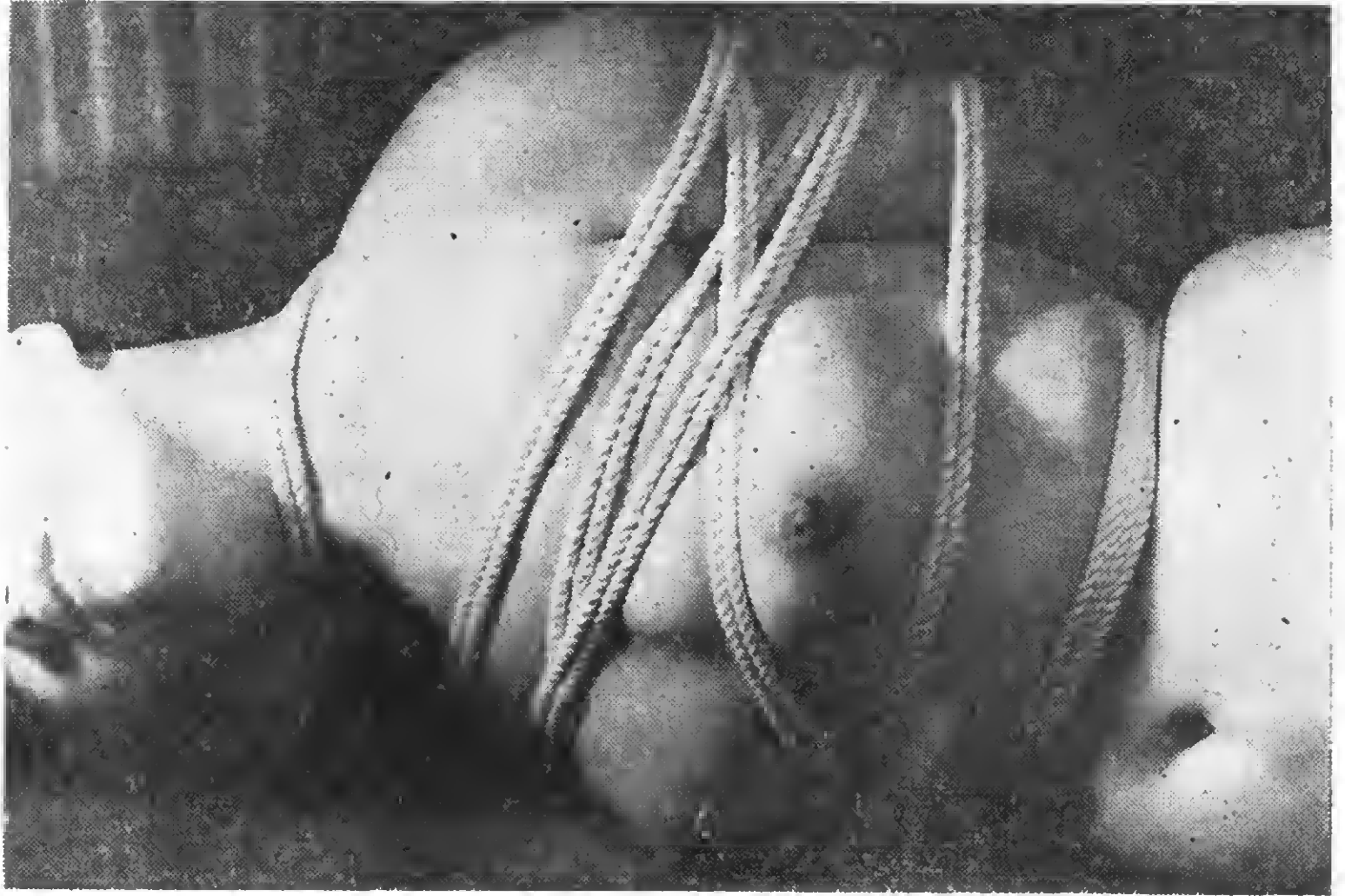


し帰阪したのが午後二時四十分、暑いさ  
中の強行軍でいささかグロッキー気味に  
なりながらも道具一式を整えて待合せ場  
所へ急ぐ。午前中で十分、一日分の仕事  
を終ったのだから、冷たいビールでも飲  
みながら、ゆっくりくつろぎたいのだが、  
そうもゆかないところが辛いところであ  
る。この撮影が終ると、夜は午前中の写  
真の現像をしなければならぬ。夏の暗  
室作業は苦業そのものである。いくら、  
サルマタ一つ（暗室の中だから裸でもか  
まわないわけだが）で仕事が出来るとい  
っても、盛夏の真只中に狭い部屋に閉じ  
こめられるのはやりきれない。

と、そんな事を考えて、いささか、う  
んざりしていたのだが、いつに変わらぬ愛  
嬌のある大塚啓子嬢の顔を見ると、心が  
なごやかになってくる。大塚嬢はもうベ  
テランである。天真爛漫というか、最初  
から縛られるということに、そう拘泥す  
ることもなかったようなのだが、そうか  
といって、特に縄に関心を持つといった  
ようなそぶりも、一向に見せないのだか  
ら、カマトトかともうけとれないことも  
ない。







又、一面ビジネスだと割り切っているのかといえば、そのようにもとれるが、しかし、一概にそうとはかり受けとれないところもあるのだから、不思議な娘である。

「また、少し肥りましたね」  
若い女性に対して、禁句かもしれないが、逢うたびに、そんな言葉が思わず口をついて、飛び出しそうになるほど彼女は氣持よくまるまると肥っている。

「でも、計ってみたら、同じですよ」

という答えである。屈托がないのであろうか、いつもニコニコしていて、それが身体のためによいかもしれない。余り食欲は旺盛じゃないというのに、一向に痩せないのがある。

こんな陽気なお嬢さんと思いきり、いじめてみたらどうだろう。それでもゲラゲラ笑

っているだろうか。とにかく、大塚嬢をモデルにしている時は肩がこらない。箸がころげても笑い出すといった年頃だからか、カメラを前にしていても、何か話しかけているといったお喋りだから、退屈もしない。

今日は首縄と足首の縛りを併用し、かねてポリウムのある彼女の柔軟な肉体の悶えをあらわしてみたいと思う。真新しい白の綿ロープ二本が唯一の小道具である。

この白いロープが彼女の柔かくて白い肌をぎゅうぎゅうと締めつけ、身動きの出来ないきつい後手に縛り上げ、足首を括りつけ、更に首縄によって顔面の自由も奪った挙句、足で踏みつけ、転がり、ぐりぐりと脇腹を足の先にて擦ぐり悶えさす。

果して陽気なお嬢さんである、大塚嬢は、どのように身もだえし、悲鳴を上げるか、本当に興味がある。

彼女の肌は柔かい、まだ真新しい糊のきいたごわごわとしたロープが、二の腕に胸に、埋まり込んでしまうほどに締めつけられ忽ちのうちに、嚴重な高手小手、首縄、足首しばりにされてしまう。これだけで彼女は非常な緊縛感に、全身が逆エビに反らされる苦痛を味うことになる。足を下げようとすれば、首



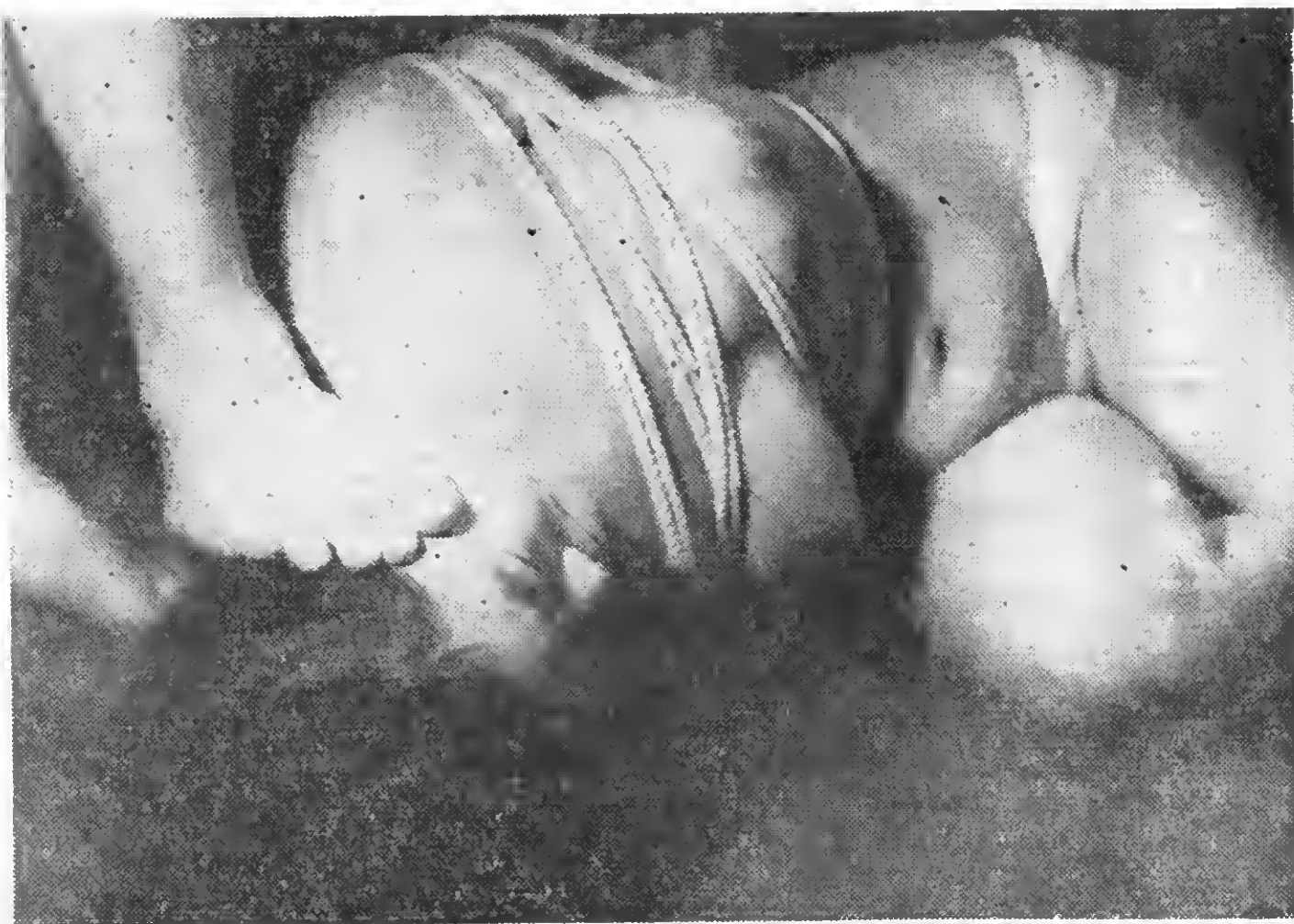
縄によって咽喉が締ってくるし、咽喉を楽にしようとすれば、自分から足を高く上げていなければならないのだ。

今や、彼女はそのカマトトのベールを脱ぐときが来たのか、いや、或は更にそのカマト

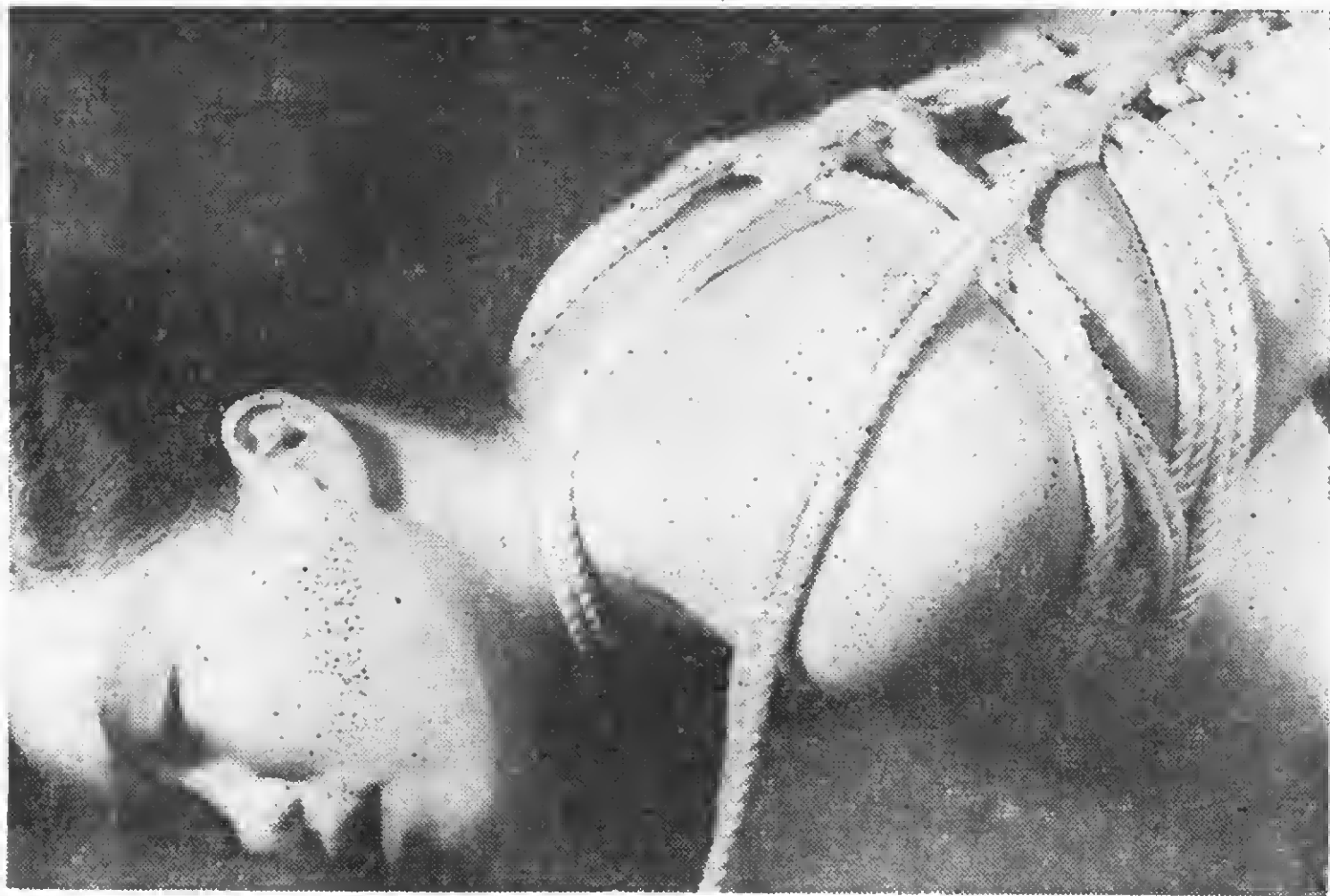
トぶりの真価を発揮するときに来たのか、私は多大の興味と期待をもつて、これからの推移を見守っていた。そして、彼女がなんとしても、呻めき喚かね

ばならないように、足先で踏んだり、蹴ったり、押さえつけたり、擦ったりした。

大塚嬢は肥満体の持主の共通の特徴として深くくぼんだ立流なお臍を持っている。ここにあらわれた写真のアップを görə んになってもおわかりのように、お臍マニヤならずとも惚々とするような見事なお臍である。豊かな皮下脂肪によって守られた威大なお臍は、親指ぐらい、すっぽりと入ってしまいそうな大きさでありながら、それでいて、可愛い乙女らしい美しいお臍である。



双つの乳房にしても、縄で押しひしがれたぐらいではビクともせず、縄をはねかえし、



時あらば縄の間から、むつくりと顔を出しそうになるほど弾力性を持っている。実際に乳房の真中に縄をかけても、いつの間にか縄はすべり落ちて両側へ分れてしまうのだ。

珍しく首縄を併用してみる。これは、やられたことのない者には、その苦しさはわからないだろうが、なにしろ咽喉が締まってくるのだから、苦痛というより息苦しさである。しかし、息も出来ないほどの猿ぐつわと同様に、この首縄というやつも、マゾの醍醐味を解する者にとっては、一つの切札的な縄さばきの秘法とされている。自分の意志で手加減して緩めることも出来る程度にしておいて、さて、他の関連性に於て、自分の意志で締まるよ



うにすることも出来る、といった方法が面白い。

そのため、今回は足首の縛りを併用して、それを首縄と関連させた。一番最後に掲げた写真をごらんになっても、おわかりのように



背面のロープには、首縄からきたタテ縄をうるさい程からませて緩衝地帯としたが、このからみによって、二の腕から胸へまわされたロープがうんときつくなったことは事実だ。

床の上にごろりと転がす、二の腕にまわった縄が恐ろしいように肌に喰い込む。どこかの縄がどのように痛さを与えたか、とにかく大塚嬢は「うううう」と呻めいて、苦痛を訴えた。さすが、お喋べりの彼女は、今は無言で耐えている。左足首に三巻き四巻きしたロープを背面の縄と連繋させると、全身を逆エビにそらして、うめく。首縄が咽喉を締めるので、どうしても反らざるを得ないのだ。

胸に、二の腕に、腹にぐっと喰い込む縄。そんな両手首を足で踏みつける。

「ああああ」と呻め声を出した時の顔。

しかし、いつまでも、全身を反らしたままにいるわけにはいかない。カメラのシャッターが切り終ると、ひとときの休息を与える。そして、その安らぎの表情が何回となく、クローズアップされる。

「どうだい、ちっとはこたえたかい」

足で顔を起して、問いかけてみるが、全身をしめつける厳しい緊縛感の中で、ぐったりとなった彼女は、一言の言葉も発しない。

足首の縄を解いてやると、彼女ははじめて、ほっとしたように息をついて、

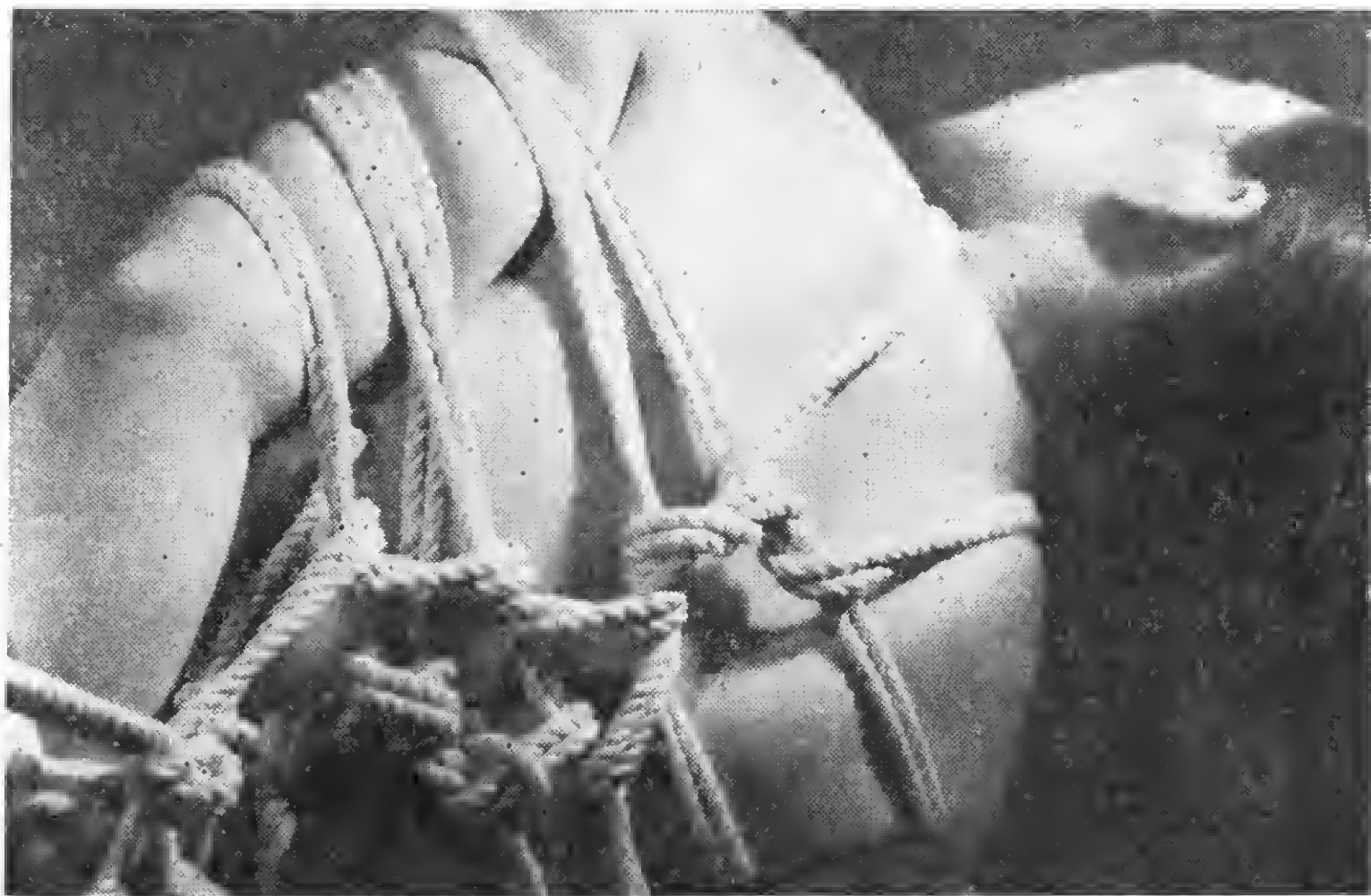
「手が痺れてきたの、なんとかして」

と哀れな声を出した。さもあらなん、今、シャッターを切ったこのアップのポーズも、全く素晴らしい緊縛感である。縄の間から、乳房がむくりと盛り上がり、そして、床の間にはさまって押されても潰されなんかしないで元気にその存在を誇示させている。それほど、乳房の上縁にかかった縄が強いのだ。胸も二の腕もくびれている。手首や腕が痺れてくるのも当たり前なのだ。

只、単にフォトを撮影するだけなら、こんなに厳重に本格的に縛り上げる必要はないだろう。もし仮りに前面だけを写すとしたら、何にもこのようにまですなくとも、映画やテレビの緊縛場面のように、本人がうし







ろで縄尻を握っていても、前からは見えないのだから一向に差支えないわけだ。劇映画の中でよく美女が後手に縛り上げられあわや、という瞬間、助けの男が走り寄って、という際、その縄の解くことの早いこと、早いこと。女が、その縄尻を背後で握っていたということは一目りよう然である。

私の友人で或る映画会社の撮影関係の仕事をしている人が、そういう場面に立ち会っている。と本当に馬鹿らしいという気持ちがする。と、いつていたが、縄を解く場合には、もう少し手間と時間をかけて、如何にも本当に縛っていたのだということを観客にさとらせる工夫があつて然るべきではないか。いささか無神経のような気がする。

それにひきかえ、本誌なんかはマニヤ雑誌であるから、むしろ、前面よりも背面にこそこのように嚴重に処理してあります

よ、ということを示す必要がある。だから、モデルの大塚嬢の示す苦悶のあえぎも、演技やお芝居だけではなく、真実にきびしい緊縛感が原因していることを見て頂きたい。嚴重な緊縛とそれに見合うところの表情が出せたら上々である。たしか、伊藤晴雨氏だったか女は激しく責めたてれば責めたてるほど無表情になつてくると言っておられたが、数十年に亘って実験され体験された氏のことであるから、それは事実であろうが、人に見てもらふフォトということになると、やはり、オーバーな演技はかえってぶっこわしとしても、ある程度の演技的なものは必要ではないかと思う。

実際にきびしく責めていれば、それでいいではないかと言われるかもしれないが、人工を加えられたものにこそ芸術としての真価があるのだということから考えれば、表情は豊かであつてほしいものだ。その点、大塚嬢なんか、沢山のファンがあるのだから、もう少し悦虐ムードにぴったりの表情を出すようだったら、きつと素晴らしい作品を作りだすモデルになることだろう。

私は彼女にそれを期待し、新生面を拓きたいと念願している。



猿

轡

雑

考

原 白 英 二

猿轡とは声を立たせぬ為の口はませの意である。これは刑法の各本条に該当する犯罪である強盗、すなわち押込みが家人に対して手足の自由を拘束する際に合せて発声の防止をする為に用いるのが常であり、この事は衆知の事実であるが、ここでは犯罪達成の手段としての猿轡論ではなく、飽く迄もモデルを使つてのプレイ的な緊縛及び責めに関しての猿轡雑考である。プレイであるから真に発声の防止を必要としない。モデルを使つてのフォ

ウトグラヴィア作製にあたっては、その写真が読者に生々しい迫力ある実感性の溢れた作品であることが大事である。読者の最も期待するのは、各号のグラヴィアに於けるモデル

嬢の魅惑的な、アイデアに富んだ刺戟的な緊縛や、責めのページであることは他言を要しないだろう。

最近の梨花さんの活躍は彼女のファンの一人としてまことにうれしい。

8月号の『雨装束とチュリップ』は秀作である。だが猿轡を中心にみた場合は、少し緊迫感に欠けていると思う。猿轡にナイロン布を用いた点は雨具とのコンラストの上からもアイデア的には成功したと思うが、梨花さんのナイロン猿轡を鼻の上まで被った方が、息苦しさの為、よりの効果的に表情を捉えることができたであろう。梨花さんが他のモデルさん達よりもとくをしてるのは、哀愁に満

ちたマスクの持主であり、更に彼女の仕事に対する熱意、逆さ吊りの様な苦痛にもじっとこらえる気力等をもっている点である。とかくマンネリズムになりやすい責めグラヴィアに、梨花さんをモデルにした猿轡特集を出してはどうだろうか。

類似雑誌の氾濫している昨今、他誌にさきがけ猿轡責めの特集は、新しい企画として仲々おもしろいと思う。ぜひ実現させたいものだ。

9月号の梨花さんのロウソクの拷問は、他のモデル嬢にもよく見られたポーズでいささか新鮮みがない。猿轡にしても単に手拭で鼻口を一つに被い顎まで深くしばっただけで緊



全に発声の自由を奪っているのに、ご丁寧にも、更にその上から二重に口を布地で縛りつけている。これは最初に述べた猿轡の本質たる発声の自由を防止をする。しかし頬の圧迫により残酷さは免がれ得ない。欧米人は事、猿轡に関しては仲々気難かしいようだ。その頬の食込みや口中の嚙ませ物を、更に布地をもって被いかくすことにより、外見からの美しさを強調しようとしているのではなからうか。

欧米の猿轡の特徴は鼻口を一緒に布で被わぬことで、鼻は例外なく猿轡の布から拘束を受けずに自由を保っている。民族的習性によるものか、好みによるものか、又は、鼻が高いから調和という点で潜在的に意識せぬままに、行動の實際にこのような表現として行なわれるのか興味のある問題である。

欧米にあっては更に防声具を用いてのプレイが盛んに行われているようだが、これは何事も器械的にしないと気にすまぬ彼等の民族的なものに由来するのであろうか。

しかし、このような防声具もオーソドックスな猿轡に勝るとも劣らぬ楽しみを与えてくれるだろう。日本の刑務所で粗暴な囚人に対して行われている戒具の一つで防声具なるものがあるが、これは大声で叫ぶ囚人のその暴

声を防止する器具である。口に当る部分はゴムでできていて顎の自由が拘束されるようになっていて、後頭部でしっかりと固定される。防声具をつける時は勿論両手は革製のベルトで両脇の腰の部分にそれぞれ固定されるか拘束具を着用されるのである。しかし、最近では人権擁護の立場から頻繁にこれらを使うことは余りしない事になっているらしい。今までに多くの猿轡を甘受してきた伊吹真佐子さんが去った今、梨花悠紀子さんに猿轡モデルとしての新境地を開いていただきたい。愛読者の皆さん、梨花さんのファンの方、猿轡に関心をもつ方、梨花さんの後援会を作ろうではありませんか。そして存分に猿轡モデルとして真価を発揮していただきたいものです。

猿轡に対して、どのような考えをおもちか梨花さんの感想を発表いただけたらと思います。少し本題からずれたようですが次のアイデアはいかがでしょう。

モデル嬢の名前を当ててのです。いわゆるクイズです。まずモデル嬢数人を選び、一人一人を緊縛し（写真は全部上半身を写す）目にはサングラスをかける、頭髪はスカーフで、映画「昼下がりの情事」でヘップバーンが流

縛感が少しも表現されていないのは残念である。手拭を鼻口に巻きつけたただけなら大掃除のマスクと同じではないか。手拭で単に縛ってもよい、その時は厚手の布地を使用するなり或程度息苦しさを与えてやらぬと猿轡としての真価を発揮することはむずかしいのではないか。日本手拭を猿轡として用いる時は、本格的に口中に布切及びハンカチなど入れ、その上から鼻口を縛ってもらいたいものだ。外国で多く用いる方法で、ハンカチ或は布地の中央に結び目のこぶを作り、そのこぶを口中又は歯と歯の間に嚙ませ顎の後できりと引きしめ縛りつけているが、その為、頬が圧迫され布切れが頬に食込み、それだけで完

行させた被り方で頸を一廻りさせ後で結ぶ。忘れてならないのは猿轡を嵌めること。この際の猿轡は変装の小道具であるから、本格的なものはないが、鼻口はきっちりとは被っていたきたい。これで後は、グラヴィアを見て読者が順次にモデル嬢の名前を解明して行けばいいのです。正解者には編集部から緊縛フォート何か、賞品としてだしてもいいし、ださなくてもよい。クイズ式で面白いと思う。

海水着責めはどうだろう。モデルは梨花さんをお願いする。ブラジエアにパンティータフライを着用、頭には海水帽、顔には海女が使っている円い潜水メガネ、口は猿轡できつく縛る。緊縛の方法はその道のベテラン辻村氏へお願いする。

海水着責めは、海水帽それ自体ゴム或はナイロン独得の密着性を有し、聴覚を困難にし頭部への責め具として面白い。しかし何んといっても海水着責めの見どころは、潜水メガネを小道具として息苦しさを強調した点である。潜水メガネは目と鼻をすっぽり被う円いメガネで鼻で息をすることはできない。しかし残された口も無ざんに猿轡の為にきつく縛られ、かすかな呼吸を猿轡のすき間からとら

ねばならない。この大役を果してくる人は、梨花さんをおいては他にないだろう。欧米式の猿轡を噛ます際は、初めに結びこぶを中央に作り、そのこぶを口中に押し込み後部できつく結び、その上を二重に猿轡をする。

初めに噛ませた猿轡が見えるようにナイロン等の透明なものを使うと二重に縛り上げた口許が鮮明に見え様子がよくわかるだろう。猿轡のもつムードは、やはり多少の息苦しさが伴わないとでてこない。この息苦しさは、習慣によるとか、必要性によるとかで大して

感じなくなるものらしい。新宿の某美容院の理容師であるK子さんは、この暑い日中に厚手のマスクをして仕事をしているが、初めは息苦しくて窮屈でマスクをするのがいやで、どうしようもなかったそうだ。K子さんの勤める店の主人は自からは理髪の仕事はしないが、マスクに関しては徹底したうさ、屋なんだそうだ。理容師はK子さんを入れて三人だが三人とも女子である。彼女らは、市販のマスクは使っていない。正確には、主人が市販のマスクの使用を禁じているらしい。それは粗雑で薄手の為、理容業を営む者には不向きであるというところらしいが真意は判らぬ。

主人が自からマスクを作り、各自に四組ず

つをわたしていて絶えず清潔な白さを保たせているとのことだ。彼女らは主人の好みであるのだろう厚手に作られたガーゼーマスクで口を被い、いそがしく動きまわっている。私もマスクには愛着をもつから、K子さんに主人のマスクに関する異常なまでの執着について突っこみたずねたが、この話は後に発表しようと思う。こういうわけで、K子さんのマスクに対する息苦しさはなくなり、今ではマスクをしないと気がすまなくなり、主人に言われるまでもなく自分から進んで、この厚手のマスクをするようになったと云っていた。必要にせまられて毎日マスクをしていたのが息苦しさも感じなくなり、今ではマスクの感触にとりつかれたような感じをK子さんの話から受けとられたが、私の誤信であろうか。

とにかく毎日のくり返して息苦しさは心配なくなったと云っていることは事実である。とりとめのない猿轡雑考になったが、猿轡をされる際には多少の息苦しさと苦痛は必然的なものである。梨花さんも意を決して本格的猿轡を甘受して戴きたい。息苦しさを呼吸圧迫もない猿轡で、猿轡の真のムードをだそうとしてもでないのは当然でなからうか。

一日も早く梨花さんの本格的猿轡責めのグラヴィアが完成することをお願いする。



## 切腹実見記

## と雑感

田 地 原 規 郎



小生は今まで一度も奇クに寄稿したことはありませんが、切腹についての記事は中康氏田谷氏、藤山氏から最近の山田さんの実験記に至るまで、すべて細かく拝見しています。現在、日本人の中でも切腹を実見した人は恐らく何十人もいないでしょうが、小生もその意味では斗福氏などと同じく貴重な存在で、その点では多分中康氏や田谷氏以上だろうと思います。

切腹についての記事で、切腹前の切腹者の（切腹を決意し、切腹するに至るまでの）状況や心理の描写が必要なことは中康氏の解説などで十分くみとれますが、私の場合、いろいろの事情でそれをはっきりすることができ兼ねますので、今日まで発表できなかったの

ですが、切腹の状況だけでもお知らせするとは何かのお役に立つでしょうし、また当時の事情から、私としては、それらの切腹者は所詮生きてはいられぬ人たちと思っていたので、冷静に切腹の状況を見ていられたし、一人の女の人には介錯に当ること(?)もしてやりましたので、誇張なく真実を伝えることができると思います。

時は昭和二〇年八月二三日夜、場所と切腹者の個人的な説明はどうかお許し下さい。切腹者は男二人(一人は三〇才、Aとします。他の一人は二六才、Bとします)と女一人(二二才)で男二人は一しよに切腹し、女一人はそれを見届けてから別室で切腹しました。次に切腹の経過をくわしくお知らせしましょう。

男二名が切腹したのは洋室六畳で、リノリウム張の床に白毛布を二枚敷き、三宝に各自所持の刀(Aのは九寸五分で半分ほど奉書紙を固く巻いたもの。Bのは一尺三、四寸の脇差で柄もツバも取外し切先五寸位を出して同じく紙巻にしたもの)を載せました。二人は予め体を清め晒の下帯に軍服のズボンをはき、上衣、シャツ、帽子はそれぞれきちんと

たたんで左脇に重ね、三宝を前に上半身は裸で正座しました。

ここで二人の体格にちよつと触れてみますと、Aは五尺五寸余でしたが色白で体毛がうすくい、わゆる丸々としたタイプで座ると腹がかなり円く出ている型、一九貫位というこゝとでした。BはAとほとんど同身長ですが一五貫位で筋肉がしまつており色白でしたが、胸毛は濃く男性型体格で、右鎖骨下に大きな銃創がありました。二人の私に対する依頼はちよつと變つていて、

腹に切創がいくつもできるのは女々しくて見苦しいから、まず、Aが左脇壺に刀を構えたら、私が柄を強く押立てる。Aは同時に切尖を右に切りはねるようにして一刀で深く切り込む。二人ともどうせ無念腹だから十分深く切りさばく覚悟ゆえ思い切つて突込んでくれ、切腹の後の自決は個々に自分でやるから力を添えることをせず苦悶してもそのまま最後を見届けるように……。

ということでした。従つてA、B同時とはいつても、実際にはAが苦しみながら右脇まで刀を引廻し、頸部へ刀を突立ててから、Bが左脇壺へ刀を突込むという順序でした。今ま

で申し忘れましたが、もう一人の女性(Cとします)は二人が切腹を遂げ終るまで、白ちりめんの長じゆばんに、同じく白絹の細紐をしめた姿で、二人の斜め前に座して、その最期をじつと見ていました。

### Aの切腹経過

Aはズボンをちよつと押下げて下帯が見える位にすると、左手で左脇壺を軽く握むようにして、右手にもつた刀の切先を下帯に接し腹へあてがい、ちよつと私に合図してすぐ眼を閉じました。私は斜め左前にしやがんで両手を柄頭に押あてると、呼吸をはかつて「えいっ」と小さく気合をかけながら思いきり突込みますと、Aも調子を合せて切先を右へはねたので見事に一〇〇位もプツリ入りしました。Aは全身をピクピクと震わせると真青になりましたが、左手をも柄に添えると、呼吸を止め「ム、ム、ム……」と低い苦悶の歯もれ声を立てながら、一気に臍のわずか右まで掻切りました。

そこで流石に押す手が一時ゆるむと二寸位もあると思われる腹壁がバクツと開いてシュツと血が飛び、黄色い切口が見る見る真赤に染り、大網や腸らしい薄褐色の内臓がブクブ

クとのぞいて見えます。ガクッと前にのめりかかるのを、側からBが「しっかりしろ、後一息だ」とどなると、懸命に体を起し、再び両手に力を入れ、ムーンと呻き声もろとも完全に右脇まで引廻しました。最後は刃が寝て、切り込みは浅かったようです。

血にぬれた刀をガタッと三宅の上に置き左手を前について体を支え、恐らくはらわたをぐっと引ずり出そうとしたのでしょう。二寸以上も口を開けて内臓が呼吸と共に出入している下腹部へ手をやった時、思いがけぬことが起りました。

Aは座につく前に、下帯をかなり固く締込んでいたようですが、それでも緩かったのか、横帯がずり上って大きく開いた割腹の創口へグッと食込み、切創の下腹皮が下へ垂れて帯の外へはみ出してしまったのです。

Aは苦悶の声を洩らしながら、真赤に染った下帯を押下げようとはしますが、とても駄目です。はらわたも下帯で食止められ、その上下から少しずつあふれる程度でした。

Bが私に目くばせしますので、私も放っておけないと思い、三宅の刀の血糊をとりあえず毛布でぬぐって、左手で汗にぬれた体をかかえ起し、刀を差出すと、Aはふるえる両

手で刀を握り、懸命に顎をあげて咽喉首へ突立てようとはしますが手が決らないので、私は再び右手を刀に添えて左頸部へ切先をプツツと突刺してやると、Aは最後の力をふりしほってググッと二寸近く刺入れ、ガバッと右へ咽喉笛を掻切りました。胸を抱いてる私の左腕にも生温かい血が流れ落ち、毛布にまで血が飛びました、今度は刀をガタッと下へ落とし、ガクッと首を垂れましたので、私はそつと前へうつおせにしてやりました。しばらくはピクリ、ピクリとしていましたが、最早、呻き声もなく苦悶の様子もみえないので、Bの切腹の介添に移りました。

後から調べてみたところ、切創は臍の下二〇cm位の高さで二二〜三〇cmに及び右端の三〜四cmの部分を除き腹膜まで完全に切れて口を開け、臍下の皮厚は約五cm、脇壺で三cm足らずでした。

### Bの切腹経過

BはAの苦悶の状況を逐一見ていて教えられたのでしよう。Cに一時席を外してもらったと、ズボン脱ぎ、下帯をとって下腹のかなり下の方に固く締め直して、下帯だけで坐りました。Aの場合と全く同じに刀を押して突

立ててやりましたが、腹皮が緊張している故か、Aよりはるかに楽に突通った感じがしました。

Bは青ざめてはいましたが、きわめて冷静で、手は震えていましたが、自分でじっと刀の方向を見つめながら、「ウーン」と、呻き声というよりは気合のような声と共にグーツと一気に右脇まで押切りました。

右手の引く力をゆるめずに左手を刀から離し、臍のあたりで切口の上下を握むようにグーツと押え、流石に苦し気にあえぎつつ右手で刀を抜きとると膝の上に横に置き、ちよつと前かがみになりながらも、左手を放すと同時に前へつき、右手を手首の所までガバッと腹中に入れると、「ウ、ウ……ウーム」と、今度は絞り出すように呻きつつ、一杯につかんだ内臓をズルズルと引ずり出すと、右手もバタツと前へつき、うめき乍ら肩で息をします。しかし、数秒ののち辛うじて身体を起すと、両手で膝の刀をとり右手でしやにむに切尖をつかみ、手探りで首に押あてて、刀の柄を床に支えて刀にのしかかるようにプツツと咽喉を突通すと、左向きになって刀を串刺しのように頸部に刺したまま打ふしました。

Bの切創は臍の下四cm位、長さ一八cm

位、最も見事に切れていて、小腸が膝の上にあふれ出していました。腹皮は臍下で二・五

cm位、脇腹では二cmきよつとでした。

### Cの切腹経過

二人が見事に切腹を終って打俯し、血だまりの中で静かになるまで、Cは青ざめて額に汗を流してはいたものの、冷静に観察していました。二人の方に合掌して深く一礼すると、私に目礼して合図を送り、自分の切腹予定の部屋へ引取りました。

私は手も胸も血がついているので、部屋を出てそれを洗い落してからCの部屋に入りました。この部屋はやはり洋室の六畳で中央にかなり太い四角のモルタル塗りの柱があり、その前にシートらしい白い木綿布が敷かれて、三宝にAと同じ位の短刀が刃の半分足らずを残して紙を巻いて置いてあり、Cは白布の外で立って待っていました。

Cは身長は五尺二寸位でしたが、かなり肉附がよく一四貫足らず体重がある、色白の静かな性格の女です。





Cの切腹の介添について、彼女の希望から打合わせをしたのは大体次のようなことと記憶しています。

(1) CはもちろんA、Bと同じく十分に深く搔さばく覚悟ですが、初めの予定ではしごきを押下げ、じゅばんの前を寛げて肌も脱がずにやる積りだったのが、Aの例から特に女の非力では無理と思われるので、じゅばんを脱いで、腰巻も十分押下げて切腹する。

(2) 一文字に引廻すと、苦痛とはらわたが溢れるためか、身体が前に傾いて以後の所作が難しいから、ちようど柱を背にしているの、身体を柱にしばりつけてほしい。絶命後もそのままよい。

(3) 切腹は本当の十文字腹にしたい、ところが横一文字に引廻して刀を抜くと腹がゆるんで、引ずり出さずとも口が開き内臓が溢れ、今度縦に切り下げても腸がじやまになって、腹を四つに切裂くことができないわけです。そこで、横一文字はA、Bと同じで、引廻したらずばやく両手で傷口を押え力限り両方へ引張って緊張させる。そして私に鳩尾へ十分深く突立てて、出来るだけ勢いよく切下げてほしい、というのです。

特に(3)の注文については執念というか、妖

気のような緊迫感さえ覚え、タジタジとなつた程だったのですが、くりかえし頼むので了承しました。

Cはじゅばんを脱いで脇にたたみ、腰巻姿で白布の上、柱の前に座りました。この時私がちよつと不思議に思ったのはCの腰巻のことです。普段の晒やネルのものは膝のちよつと下位迄の長さのようですが、正装のは絹で着物丈と同じに長く作ってあるようです。

それがCのは昔よくあった白富士絹の上に一〇cm幅位の晒をつけたものですが、膝が完全に出てしまう位の短かさで、座って膝を大きく開いたら前がはだけてしまいそうなのです。しかし、後から調べてみると普通の腰巻とちがって腰を二廻りするように作っており、前が開くということは仲々起らないことがわかりました。それにしても、なぜあれほど極端な短かさのものを使用したのか、その原因は想像ができません。

ですから、Cがぴたりと正座すると更に膝の上までがかなり出て、現今の短いスカートとはまた違い、異様な感じでした。Cは腰巻の紐を解き胸の下までしめていた布をゆるめながら腹を寛げました。

いわれるままに乳房の上、腋下にしごきを

通し、柱の後でしぼり紐が下へ落ちないよう二カ所をクギで止めました。裸になってみると乳房は僅か垂れ気味ながら非常に大きく腹部も丸々として臍窩が深くかなり肉感的な体格でした。腋毛は全く剃ってありました。

身体が柱に固定されたので三室に手が届かず、私がとってやると微笑しつつ受取り、ふだんと少しも変わりません。しかし脇に置いた懐紙をぐつと嚙むと急に険しい表情になり、刀を左脇壺にあてがうと私に目礼しました。

A、Bと同じようにグッと押しましたが、皮が柔かくてその上Cが切尖をはねないので一度目は二〇cm足らずプツリと入り、二度目にグサツと突通りました。Cは声を立てず、額に脂汗を流しながら、刀をキツとにらみつつギリギリと引廻して行きます。やはり男よりは一般と腹が柔かいので切る方向に皮が引よせられて行くのをギリッキリッと小刻みに搔切ってゆくのがA、Bには見られなかった凄愴な感じでした。Bは横一文字を二〜三秒位(一刀の許に)の感で引廻したのが、Cはよどみなく刀を運びながら一〇秒近くもかかった様に思われました(実際は六・七秒かも知れません)。右脇へ引廻すと、既にちよつと垂れ気味の傷口の左端を左手でグッとつか

み、次いで刀を刺したまま右手を刀のすぐ右にあてて、肩ではげしく息をしつつ両方に引張りました。

切腹の前日、Cは顔、首、胸をなるべく血まみれにせずに死ねないものかと冗談めいて言っていたのが、ふっと思い出されましたので、鳩尾を十分えぐってやると長く苦しななくてもよいのではないかと気が付き、腹に突立つたままの刀を引抜き、左手で胸骨の下端をさぐり、骨に当らぬよう切尖を押当て刃をグッと斜め上に向けて存分にプツリと突通してやりますと、Cは「アーツ」と叫んで懷紙をパタッと膝に落し、頭や膝をゆすぶって苦しがりましたが、刀の背に左掌をあてのしかかるようにザーツと切下しました。刀はきれいに一文字の傷と交叉し下縁から三〇位所で止りました。今度は切下したとたん、私の顔までピューッと血がとび、脇腹を押える手がゆるむと臍の下がザクロの様にパクッと割れて、ガバガバッと小腸ばかりか大腸らしい無気味なハラワタが膝に溢れ出し、腰巻はもちろん白布の上まで血だまりになって行きます。Cは最後の力でしよう、両手で盛上ったはらわたをグッと押えるようにしましたが、がくりと首を垂れ右手で腸を掴んだ儘左

手はダラリと下に垂れて静かになりました。

Cはかなり下腹部を引廻しており、臍下六〇位のところを一六cmほど完全に引切り、縦のは鳩尾から臍のすぐ左を通り二六〇七cm位の長さに亘っていました。A、Bの死体は打俯して傷口がわからず、腿と胴の間から内臓がはみ出している程度でしたが、Cは柱に身体をしばったため、絶命しても髪をふり乱してうつむいているだけで、血まみれの内臓のあふれた腹部と、真白く盛上った乳房がすさまじい対照となってゾッとするような気持でした。腹皮はかなり厚く臍下ではAと大体同じ位でした。

三人の切腹を回顧してみると、全体の運びが最も円滑で早く終ったのはBです。Bは突立てる時だけ私が手をかしたのですが、恐らく独力でも殆ど同じにやれたと思います。苦痛の様相も少く見事という評につきます。しかし最も印象的だったのは勿論Cで、全体の経過の異様性（というか積極性というか）が強烈な緊迫感を与えました。Cがはじめじゅばんの襟を寬げて割腹する予定だったのは事実ですが、いろんな場合を予想して準備していたらしいことは、腋毛が綺麗に剃ってあつ

たことでも想像できます。

彼女にとってはとにかく十文字の完全な割腹が最終目標であり、その達成のためには裸体をもちとわず人手を借りることをも敢てしたと見るべきで、二人の壮烈な切腹の間にそれだけの判断をしたのは見上げたものです。

本誌でも前に「裸体を恥じるべき女性が全裸に近い姿で切腹することに疑問をもった」読者がありますが、完全な切腹を望むために他を犠牲にする心理と見れば十分説明できます。

勿論、全裸になったり、Cにしても腰巻の紐を解いて押下げるまでの必要はないと思いますが、それまで理詰めには行かないのが当然でしょう。

Cの場合、一文字に引廻すだけで止めれば自らはらわたを掴み出し、咽喉を掻切る程度の余力は十分あったと思われ、前に田谷氏の例でも一文字割腹して内臓をつかみ出した女性の例があったのと思ひ合せ、女性の力も懸命になれば偉大なものだといつくづく感じさせられます。

（おわり）



## ファンタジア

## マゾヒスティカ

山本節夫

### 「ハイドウ」考

ハイシ、ドウドウというのは、云う迄もなく馬に乗って御する時のかけ声である。懐かしい童謡「金太郎」で誰でもが小さい時に一度は唱った事がある一節は

まさかり かついだ 金太郎

熊にまたがり お馬のけい古

ハイシドウドウ、ハイドウドウ

ハイシドウドウ、ハイドウドウ

である。また、小学唱歌「私の小馬」は

ハイシ ハイシ 走れよ 小馬

で始まる。更に同じく「父さんのお馬」という童謡では

父さんのお馬は ハイドウハイドウ  
手綱はネキタイ ハイドウハイドウ

とうたっている。以上でも判るように、馬に乗って走らせるかけ声は①ハイハイ ②シイシイ ③ドウドウの三種類がある。尚この外に、形容語としてパカパカというものもある。「私の小馬」の二番目は「パカッ パカッ パカッ」で始まっている。

ところで、①と②は、大がいの辞書を繰ると、馬を進める言葉と説明してあるが、③は進め走らせる時に使うというのと、全く逆に馬を止める時に使うというのと二通りあり、はつきりしない。講談などで逸る馬をとめる時によく、ドウドウという語を用いる。ところが、映画「痴人の愛」で叶順子さんのナオミは、譲治馬にまたがって「さあ 歩け。ハイシ、ドウドウ、ハイシ、ドウドウ」とはつきり発音された。之は原作でも

「まあ、なんて小さなヨタヨタ馬だろう、もっとしっかり、ハイシドウドウ」である。

以上、くだくだと述べたが、要するに馬は、美しい乗手の女王様の仰せの通りに動けばいいので、ぐずぐずいうと拍車でけられ鞭が飛んでくる。

最後にKK誌でのいろいろな用例を手当り

次第拾ってみよう。

(一) ハイシハイシ。◎夢想家の手帖、第三章。

アリストテレスが馬にされる場面では八行の間に八回出て来る。同じく、第六章で、“ハイシ、マリスカ。ハイシ進め”◎ダイアナ夫人、処女期で武造を馬にする所。

(二) ハイシドウ。◎犬の生態。

(三) ハイシ、ドウドウ。◎愛犬譚。◎魔性の姉妹。

(四) ハイドウッ。◎ママと私、◎ダブルプレー。◎二百字讃歌。

(五) ハイハイ。◎黄色オラミ。第三部。

女王様の御声。

ハ生意気な奴め。ハイシ、ドウドウがどうしたっていうの。ぐずぐず云わずに馬になれ。またがってギューギューせめてやる。……早く四這いにならないか。こいつ。V

キャディー馬

ゴルフ場の広いコースを、真夏の太陽の下に、或は寒風の吹きまくる冬の日も、重いゴルフバッグを、時には二つも肩にかついで黙

々と廻るキャディー達。大体、若い女性が多いが、その様な地方の同性に荷物をかつがせ乍ら、ショートパンツの肌もあらわに、クラブを振り廻す女ゴルファーの姿はいかにも気持よさそうである。そこでマゾ男は空想をめぐらせる。何しろ一廻りで大体六軒余の道程であり、二回まわれば三里以上の道があるく事にもなる。しかも山あり坂ありで暑い頃など大の男でも容易ではない。いっそ歩く代りに、たくましい男の子の肩車にまたがって、球の行方を追ったらはどうだろう。勿論、女性サジスチンの専用デラックス・クラブである。そこには普通のキャディーの外に“馬”としての訓練をうけたマゾ男を用意する。

“さあ。スタートよ” “ナイス・ショット”

という訳で、第一打がすむと、馬達は女王様の前にうづくまって首をさしのべる。御一人づつ女騎士達はキャディー馬の首をまたぐ。

“よし”という合図で馬達は立ち上り、前進を開始する。

“すごく乗り心持がいいわ”

“あら。私の打った球ったら崖の上よ。コラ

馬め、早く上れ。ハイシ。ハイシ”

そして球の地点まで行きつくと、馬は静かに蹲居して乗り手の下馬を御待ちする。連れ

の人が打ち終るまで、他の女王様は悠々と、そのまま首にまたがっているという寸法。

更に空想は発展する。五〇万坪もある敷地をゴルフだけでは勿体ない。そこでアウト(始めの九ホール)の方だけをゴルフ場としイン(後の九ホール)は人間馬専用野外騎乗コースにするのである。ここでは馬どもは、女王様の御好みに応じて、四つ這い。車つきの半かがみ。肩車。しかもそれぞれの型で鞍つき、鞍なし、裸体、半裸、着衣、に分れる。こちらには“馬”そのものだからキャディー馬とは異なり高度の調教が必要である。それにはクラブ専属の女調教師が毎日訓練をする。豪華なクラブの食堂でお昼の食事を召し上りながら女王様方はこれからの予定を話し合われる。

“あたし午後からインで馬乗りするわ。この前の馬、すごく温和しいの。それにハンサムでガッチリしてて乗り具合がとていいわ。今日は思い切り責めてつぶしてやろっと。”

一寸つけ加えるが、一コース毎にこんもりした木立の中に休憩場があり、そこに縁台やら椅子などが準備してある。馬乗りにあきた場合、或は背中乗り以外の方法でせめたいと思う女王様方は、ここで自由に馬達に悲鳴をあげさせることが出来るのである。



こうして一日中、楽しまれた後のバスルームでは、女王様方の御手柄話に花が咲くという次第である。

### 「私のイタ・セクシユアリス」草稿

終戦・失職・引揚げというみじめな日々が漸く落ちついて来た昭和廿五年から六年にかけての話だから、もう十年になる。友人の伝手で日本橋近くの商事会社で庶務的な仕事をやっとみつけた頃。うちの会社の親会社はT商会といって洋紙問屋では名前の通った大手筋で、われわれはそのビルの四階の片隅に小さな看板を掲げていた。役員や管理者はTからの出向者が多く、全くの仔会社で厚生関係の施設とか一切は親の方で面倒をみて貰っていた。そのT社の重役室附きに、君影真起子という美人がいた。こんな云い方はほんとはしたくない。というのは私にとって君影さんは神様であり、永遠の恋人であり、忘れる事の出来ない人だからである。お父上は戦前の御役人で樺太庁長官までやった方であり、育ちもしつても教養も、そんなじよそこの蓮葉なBGとはけたが違うのであった。身長一米六〇で、すらつとたくく、どちらかと云えば痩せ型の方だが、胸の辺りやヒップの附近は

二十才の乙女的美線が、品のいい洋装の上を通して感じられ、スカートの下のぞく御み足は真直ぐに伸びて文字通りの八頭身である。その御身体にふさわしく面長の色白い御顔。涼しくしかも理知的にすんだ二重まぶたのつぶらな瞳。形のよい高貴の鼻。上品な口もと。そしてたわわの黒かみ。すんなりした両の手。とにかく一点の非の打ち所のない近代美人で言葉つきもハキハキした江戸弁であった。

毎日の仕事の関係で三階の本社役員室に行く度に私はつくずくとその美しさに打たれるのであった。ただ、色気のある笑いを含んでいたずらっぱい目つきをするという風な事は一切ないので、冗談をいう訳にも行かず、形式的に挨拶を交わしたり、事務的な話をするだけであった。唇をキリッと結んで、長い脚を一寸もてあまし気味に、時折りおくれ毛をかき上げながら一心に事務をとる真起子さんの姿を横目でみながら、ああ、あんな方の下僕になって、いろいろの御用をうけたまわり、叱られたり、御仕置をうけたりしたい。いっそあの椅子の代りになって体重を全身で支えたい。あの形のよい脚をつつんでいる靴で踏みつけてもらいたい。あの白い雨靴そのものになってしまいたい。いやいや。あの方の馬

になりたい。あの尊い御ヒップでこの醜い面を押しつぶして頂きたい。そんな事を思いつめているうちに私はだんだん恋(?)のとりこになっていった。

なんとかして二人になるチャンスをつかみたいと念じていると、たまたま或る日、出口で帰りが一緒になった。私は思い切って「いつもどうも。どうです、お茶でも」と、あり来たりの誘いをかけたが、案の定

「ええ、でも一寸約束がありますので」

ぴしゃりと肘鉄であった。ほんとに私の様な中年の風采の上らぬ、しかも正規の入社でないつまらぬ男とお茶など飲む義理は君影さんにはなかったのである。しかし私とて一生懸命だ。こんな事ではあきらめなかった。まず住所をしらべ、誕生日をしらべそして趣味をしらべた。忘れもしない。四月十七日の御誕生日の当日。私は月給の四分の一位に相当するネックレスを買いととのえ、「お誕生日おめでとうございます」と走り書きした包みを人目につかぬ様にそっと机の上に置いてきた。翌日、事務室にゆきかかると嬉しいではないか。夢にも忘れなかった美しい人は私の方をじっとみつめて「昨日はどうも」と話しかけて下さったのである。こんな事から私の

気持も判って貰えて、それから時々お茶を飲む機会が出来た。彼女が、連休を利用して軽井沢の方へ出かけた事も判った。その時の写真が回覧になって居り、うちの女の子も一

緒だったので、君影さんがスラックス姿で、長い髪をなびかせつつ、得意然と馬にまたがっている姿の一枚が目にとつき、思わず顔が赤くなったのを覚えて居る。そのナンバー



を覚えて置き、出入りの写真屋に金をにぎりせ引き伸しの大写しを秘かに手に入れて喜んだ事をありありと思い出す。

“どうでした。旅行は……馬にお乗りになりましたか”

私は質問をした。

“ええ、とっても面白かったわ。馬ってものところわいかと思ったら案外。とてもおとなしいのよ。私が歩けつていうと云う通りに歩くし、止まられて云うと、云うこと聞くし”

“初めてですか、馬は”

“ええ、子供の頃、北海道の牧場で乗った記憶があるだけ。ロバには乗ったわ。豊島園だったかしら、でもロバは小さいからせかせかして。やっぱり大きなお馬の方がいいわ。でもあれは特別おとなしい馬だったのよ”

この人の口から“馬”という言葉が聞くことは無上の嬉しさであった。この上“またがる”という言葉が聞ければもっといいのだが。

その機会は別の日に来た。土曜日の午後映画をみての帰り。何かの喜劇めいたもので大いに笑って頂いたのだが、その中で、女優がスクーターの後の席に乗るのに、タイトのスカートが邪魔して、なかなか脚が開けない。

そこでエイッとばかりスカートをたくし上げ  
やっとまたがる場面があった。

“タイトスカートって不便ですね”

“そう。あのままでは絶対またがれないわ”

ああ、遂に待望の御言葉がきかれたのだ。

“軽井沢の時だってそうよ。始めから馬に乗  
るつもりでストラックスにしたの。そいでなき  
や、あの映画みたいにお馬の背中にもたが  
れないで困っちゃったかも知れないわ”

真起子さんは愛らしい声をあげて笑った。

君影さんが美しい一人の青年を愛し、その  
青年も彼女を愛して、二人は翌年の春に結婚  
する予定であるということを知って、私は胸  
がつぶれる思いであった。勿論、こんな美し  
い人に恋人のない筈はなし、いつかはとは思  
っていたが、それが現実になってみると片想  
いの失恋は悲しくも苦しいものだった。

唯一つの願望は是非とも実現しなければな  
らない。私は慌て乍らも緻密に計画をめぐら  
した。二人切りになるといっても玄人相手では  
ないので芸者屋などは不可ないし、まして  
温泉マークなど、手軽ではあるがこの場合全  
く問題にならない。そこでさる人に紹介を貰  
い、渋谷の外れの方に静かな小料理屋を見つ  
け、暫く独りで通っては信用をつけて置いた。

この間彼女とはもっと一般的な場所で夕食を  
食べ、その場合少々アルコールを入れる様な  
ケースを二、三回つくって置いた。そういう  
私の行動を彼女は何と受け取ったのであろう  
か。単なる好意にしては一寸度が過ぎるとい  
うことは、うすうす気がついていっている様子であ  
った。

こんな事があった。私が御得意を招待する  
先へ急ごうとビルの前でタクシーをつかまえ  
ている時、彼女は丁度帰る所であった。

“一寸有楽町で映画を見てくの”

というのでそこ迄送り、私は宴席に向かっ  
た九時頃、お開きになった時分、猛烈に夕立  
となった。最後に勘定の為に残った私は置き  
傘のこうもりを一本借りて、ふと彼女の事を  
思出した。丁度最終のハネる頃である。私は  
雨に洋服の濡れるのも構わず小走りに映画館  
に走った。十分も待っているところろと観  
衆が出て来た。その中に、“ああ、困ったな  
あ”という面持ちで空を見上げる君影さんの  
姿があった。

“君影さん!”

“あら”

“男物ですけど、どうぞ”

彼女は一寸驚いた風で私から傘を受け取り

“助かったわ、ほんとに、でもあなたは?”

“いいえ、僕はいいんです。近いですから”

“でもいけないわ、御一緒に”

“構わないです。じゃ、さよなら”

私は初恋の少年の様に恥じらい、パツと雨  
の中を走り出した。何だか、自分がとてもい  
い事をして、美しい人の為に犠牲になってい  
るという自覚につつまれながら。今でも思い  
出すと、なぜその時相合傘で帰らなかったか  
と不思議である。彼女も変だと思つたろう。  
でもその時は、ただ彼女を濡らすまいという  
誠に純真な気持のみが動いて居たのであって  
こういうチャンスを利用して取り入ったり、  
どうしようという気分は全くなかった。  
そんな事のあった或る日、追い込みでスキ  
ヤキをつつきながら彼女は、その時の私の態  
度を更めて質問した。

“こんなこと云って生意気かも知れないけど  
山本さん、私が好きなんじゃない?”

“好き、なんていうそんな甘いものではありません。  
貴女は私にとっては女王様の様な御  
方です。私は貴女の為ならばどんな事でも致  
します。生命でも何でも差上げます”

少々アルコールが廻っていたので私は日頃  
思っている事を洗いざらいぶちまけた。

“そう、私も何だかそんな気がしていたわ”  
 “片想いというものは辛いものです。でも好いて頂こうなどと大それた事は夢にも考えたことはありません。貴女が喜んで下さる様な事がしたいと、只それだけを考えています”

彼女はしばらく無言で私をみつめていた。  
 “もう暫くで御別れですね。きっと幸福な家庭生活をお迎えになるでしょう。貴女のように立派な方だったら、きっと……”

不覚にも私はハラハラと涙をこぼしてしまつた。やさしい君影さんは、のぞきこむ様に美しい顔を曇らせている。

私は思わずその美しいほっそりした手を握つてしまった。彼女もぐっと力をいれて握り返して呉れた。そしてひと言。

“世の中って、いやあね”  
 と呟くように云ってくれた。

師走の風もなんとなくせわらかしくなつた或る日、最後の御別れの会を例の渋谷の小料理屋の一室でひらいた。彼女はよく似合う新調のスーツに身を固め、何と嬉しいことに、私のプレゼントのネックレスをその美しい首にかけてきてくれた。初めから私の心は落ちつかなかった。いつになく私の盃のピッチは早かった。それにつれて彼女もずい分飲んで

いた。いろいろな憶出話をとりとめなく話し合っている中に御飯も終り果物が出てきた。さあ、もう時間切れだ。私は観念してともすれば尻込みする心を自ら鞭うった。

“真起子さん。御願いがあるんです。一生にたった一回だけの御願いがあるんです”

思いつめた故か自分でも驚く程の声であつた。目もとをほんのりと紅にそめた真起子さんは一寸たじろぐ様な風で、それでもいつもの落ちつきを失わず

“お願いってどういうこと？ 行って”

“僕は、貴女の馬になりたいんです。僕を貴女の馬にして下さい。一回でいいです。御願いです、君影さん”

私は彼女の横ににじり寄り、手を合わさんばかりにして拝み伏した。まるでナオミの前にとりすがる譲治の様でもあったろう。

“ウマ？”

彼女は私のいうことが理解出来ない様である。そこがまた清潔で良い処でもあった。

“ああ、そうか、お馬ごっこのこと？ いやあだ！ 山本さんて変ね。”

私はここを先途と必死で頼み込んだ。その真剣さに負けてか、やっと彼女は、  
 “じゃ可愛そうだから一回だけね。だけど重

いわよ私。いいこと、またがるわよ”

彼女はすらりとした美しい両の脚を私の頭の横にそろえ、しばらく犬の首を撫でる様に私の髪の毛をやさしく愛撫していたが、やがて思い切つて右脚を大きく開き私の肩のあたりをゆっくりまたぎ越すと、静かに私の背中に腰を下ろした。なんと優雅なまたがり方だろう。そしてまたがる時の空気の動きは、得も云われぬ香水の香りを一面にただよわした。  
 “さあ、またがったわよ。ハイシ、ドウドウ歩くのよ、私の小馬ちゃん”

彼女は左手で軽く私の首を押さえ、右手の掌で私の尻を二つ三つ叩いた。酒の酔いも手伝つてか、或は又女性というものは跨つてしまふと案外大胆になるのか。

“ほら。もう少しで一周よ、しっかり。ハイシ、ハイシ”

彼女は素晴らしいながら馬上ががみこんで座布団を取りのけ、豊かなヒップで私の背中を押しつつながら笑い声をあげた。二周目。彼女の安定度は一層増し、時々両脚で私の腹をしめつけたりして喜んだ。

私の念願が叶えられたのだ。この美しい人の馬になれたのだ。あの尊い御足の間にはさまれて這いまわれたのだ。三回目にかかろう



とした時、彼女はふと我に還った様に、

“さあ、もうこれでおしまい”

そういつて腰を浮かせかけた。私はもう一遍だけと頼み込んだがきいてくれなかった。

下馬しようとする彼女の両脚を私は腰を落しながら両手で外側から挟み、少し後退したので、彼女是否応なく首乗りの姿勢になった。

“だめよ、そんなことしちゃ、いや、いや”

そういつて立ち上ろうとする彼女。それに抵抗してしがみつく私。

“どうすればいいのよ。一体?”

彼女はもてあまして云った。

“私の首にまたがって。御願いです”

“苦しいでしょ、こんなことをして。いけま

せんたら。ほら、首が折れるじゃない”

横目でみると、靴下どめの赤色と、その先の真白い肌がまぶしく輝いていた。

私が手をはなすと、彼女はすっと下りた

て、乱れたスカートを直しながら

“さあ、失礼するわ。今日はどうも御馳走様でした”

と少しきつい口調でいった。

私は彼女の前に手をついて今日の非礼を詫

びるのであった。

“真起子さん、さぞ御怒りになったでしょう。

わがままを云って。どうか許して下さい。ね

え、ひと言だけ、許すといつて下さい”

彼女はコンパクトを出して顔を直していた

が、やがてそれをハンドバッグにおさめると

“いいわ。許してあげる。私、山本さんて可

哀そうな人だと思うわ。だから、もっと優し

くしてあげればよかった。でも、もう駄目ね”

“そういいながら、手をついて御許しを乞う

私の頭をまた軽く撫でて下さった。

“じゃ、さようなら。お元気でね”

すつくと立ち上られた美しい姿態。いつも

のきりつとした御顔にもどった君影さんは、

もう遠い遠い、私の手の届かない所の人にな

っていた。

## 切腹と白足袋と女装

# 果しなき夢

桜 恵之助

あでやかに化粧し、美しく着飾

った女性でも、足許の足袋が汚れ

ていたり破けていたら私はガッカ

リしてしまうのです。絶世の美女

といえども、足袋がこの有様なら

魅力は全然感じません。和装の魅

力は輝くばかりの美しい真白な足

袋にあると存じます。本誌にもよ

く女性の絵や写真がのりますが、

盛装した女性が白足袋をはいてい

ないのはうなずけません。白足袋

のもつ美しさは、ナイロン足袋や

白絹足袋等の高級品に限ります。

そして、三枚コハゼより五枚コハ

ぜ、六枚コハゼの方が優れていま

す。雪の様に真白い五枚コハゼ、

或は六枚コハゼの白足袋をはいて

こそ、美しい衣裳も引立ってくる

と存じます。白足袋の魅力に心を

奪われた私は、白い衣服にも関心

を示し、振袖の白無垢を好むよう

になったのです。そしてそれが女

性切腹と関連してきたのです。

白無垢の振袖と白足袋を真赤な

血汐で染めながら、白い豊かな腹

部を女性が自分自身の手で左から

右へと、キリキリと一文字に切り

開いてゆく。鮮血にまみれた内臓

がウネウネと躍動しながら下腹部



一面に露出する。その様な場面を想像し、唯それだけで堪えられない程の魅力になります。真赤な緋の長襦袢と白足袋姿、白無垢の振袖と白足袋姿、更にその時の女性が高島田か桃割れ等の日本髪であれば申し分ありません。

女装し、これらの場面を眼に描き乍ら姿見に写るわが姿をながめ秘かなプレーを楽しんでいます。

このような異様な性格を悲しみ、或る時は呪いながらも、この魅力の興奮にはつい、うち負かされて、いつの間にかプレーをしていく私は、これから先一体どうなっていくのでしょうか。

私の只今の希望は、切腹を好む女性の前で自分は女装に美しく着飾り、そして最後は腹一文字に切ってみたいのです。私の切腹する

有様を見て、その女性も私と一緒に切腹してくれるでしょうか。この様な女性と一日だけでもいいから二人きりで思いきりプレーをしてみたいと夢見ているのです。ちょっとした家人のすきを見ては、妹の和服を着て姿見にいろいろの自分の姿態を写して見、最後は長襦袢一枚になり切腹の真似をするのです。薄く一文字に切る時もあり、深く突き刺す時もあります。

姿見の前に坐り（此の時は横坐り又は胡坐をかいて坐す事もあります）振袖で畳針をまき（長さ十五糎位）腹部を十分に露出して右腹部や左腹部にあてがい、だんだん力を入れてゆきます。プツツと皮膚を突き破り、更に力を入れると針は次第に腹中に入っていくのです。痛みは最初だけで、皮下脂肪を貫く時は全然感じません。二糎位も入ると又痛みを感じます。その時、力を入れたままグルグルと右左、上下に針を動かすと腸にふれている事を感じます。今一層の力を加えると最後の薄い膜を破り針は腸につきささるでしょう。口の中がずっと熱してきます。

ウームツとうめきつつ、露出した腸をつかむ素振りをするながら切腹遊戲に我を忘れます。姿見に写る切腹姿態を見つめつつ苦しみもだえ、バツタリと前に倒れ、かすかに最後のけいれんをして死んでゆくプレーです。時には絵具を糊でとき白衣や白足袋を実際に真赤に染めてしまふプレーも致します。

誰も知らない町に行くと私は和服を着、白絹の五枚コハゼの足袋をはき町を歩きますが住んでいる町では、さすがに恥しくて出来ません。僅かに夜になってはいいて慰めているばかりです。白足袋をはいて歩いている時の私の心は女装して歩いているのです。男性の女装を愛し切腹プレーを好む女性に出会うよう祈りながら、町の中を歩きつづけるのです。

何時果せるか、或いは夢で終わってしまうかもしれない私の悲願をしっかりと抱きしめて、夜目にもあざやかに浮かび上る白足袋を見つめて、又今宵も歩いてゆく。果しない空想を描きつつあてもなく知らぬ都会の町をひとりゆく。



# 女 相 撲 物 語

雪 崎 京 人

だった。

私が女相撲に入ってからかれこれ三十五、六年たつのだから、その間には嬉しかったことと悲しかったこと数限りもなくありますよ。そうですね、一番忘れられないことですか。

いくつかあると思うのですが、この話など、その一つでしょうね。他の女相撲の団体と對抗戦をやった話です。

女相撲の大ファンのお金持の旦那がありましたね。その旦那が私達の組と他の組とを自分の邸へ集めて東西対抗、紅白試合をさせたことがあったのです。

両方の組から十人ずつ選手を出しての勝抜

きという条件です。相撲ですから知らない他人同志が取組んでも勝負けははつきりきまるので問題はないのですが、稽古もやり方が少しづつ違っている二つの組が初めて取組むので、お互いに、相手がどの位の力があり技があるのか、全く見当もつかないので少し不安でした。それでも親方は、相手の組のことを少しは知っていて、その誰彼を、あいつは力が強いんだとか、上手投がうまいそうだとか少しづつでしたが私達に予備知識を与えてくれました。

場所はその旦那の別荘とかで、立派な家です。庭がとても広く、その庭先に土俵が築いてありましたし、支度部屋も風呂も別々に

偶然に女相撲を見る機会を得、女親方の元女力士綾錦から色々の思い出話を聞くことが出来た私は、その翌日も亦相撲場へ行くのだった。現役の花形力士達の目も醒める様な派手な取組を見ることも勿論だったが、綾錦の昔話や内輪話をもっともっと聞き度かったのだ。昨日と違ってすっかり打解け、お茶など入れてくれ愛想よく質問に答えてくれる綾錦

用意してありました。

紅白試合なので分り易くする為でしょうけれど、相撲俵を紅白の縞子で作ってくれまして、くじ引きで私達の組は紅組になりました。

私はその時二十一、二の元気一杯の頃で小結でしたが、私達は負けるもんか。しっかりやろうねと口々に励まし合い、敵愾心を燃やしていました。それにこの対抗勝負には沢山の懸賞金の外に、最負の旦那の一人が呉服屋さんだったので、高価な反物や帯などを賞品として出されていました。

女だてらに俵一つで相撲をとっている私達ですが、何といっても女は女、さもしいようですが美しい反物や帯など見せられると本能的に欲しくなるんですね。みんな張切ってしまつて、何が何でも勝たなけりやという気持ちでした。このことは相手の組でも同じだったと思います。

いよいよ取組開始、座敷の縁側と土俵の周囲には旦那方が二、三十人も集まり、土俵を見守っています。呼出しと行司は両方の組から交替に出ることになりました。私達は東で紅組です。ずらりと並んだ相手方の力士を見渡すと、みんな何だか強そうに見えます。そ

れに、私達の組が割合に年配の女が多いのに較べて、向うは若い女が目立ち、しかも顔立ちの美しい体格の見事な女ばかりの様にさえ見えます。

第一番に出たのが東は高瀬川という女力士で、その頃二十七、八だったでしょうが、手取りで今でいう技能派力士です。十七、八貫位で前さばきがとてもうまいヒトでした。西から土俵に上ったのは、何しろ大分以前のことで名前は忘れてしまいましたが、体格は高瀬川と同じ位ですが年が若く、十八、九位に見えました。未だ子供供した幼な顔の残っている可愛らしい女力士です。若鮎の様にピチピチした柔肌に白い俵がよく似合つて、これもまた真紅の俵の高瀬川とよい対称で、いずれ劣らぬ美人力士。紅白両軍最初の一番として申分ない取組でしたが、勝負は残念乍ら私達の紅組の高瀬川の負けでした。

高瀬川もよくとつたのでしたが、相手は若いに似合わず落着いた取口で、腰を落して寄り、吊り身に出て、土俵際で激しくもつれ合い、高瀬川は、必死のうっちゃりに防ぎましたが及ばず、寄倒されてしまいました。白組からはどっと歓声が上り、私達は歯を食いしばり唇を噛みました。

それから、両軍勝ったり負けたりの大乱戦になったのですが、どうも私達の方が旗色が悪く負け込んで来たのです。私達の紅組は大関の三保の浦、関脇が朝嵐、それから三枚目が小結の私なのです。白組は六番目の女力士が紅組の東瀧と千代の森を倒してしまったのです。

私はそれを見ると一層ファイトが沸き上りよしっ、私がやつつけてやるわという気になり、呼出しの声につれて土俵へ飛び上りました。相手は私と同年輩位で、体つきも私と似たり寄ったりというところ。先程からたて続けに二番勝つて、得意そうに人を小馬鹿にした様な表情をして立っています。

四股を踏み、清めの塩を擲んで型通り土俵中央に相対すたびに、相手は指をポキポキ鳴らします。仕切直し数回、六月の終りで暑い日でもあったので、汗かきの私は仕切直しの度に汗をタオルで拭くのですが、拭いても拭いても流れ出てこまりましたわ。ようやく立ち上ってからも、汗でお互の体がすべつてやりにくいっただけなのです。取組みは随分長い間の様に思いましたが、結局、遮二無二押し出して私が勝ちました。相手の女は口惜しげに私を睨みつけ乍ら土俵を下りました。



次の相手はこれも二十才位の大女で二十貫以上はあると思われるアンコ型。背は私より少し低く、これは又、五月人形の金太郎そっくりといった女力士でした。この重量でまともにおつつかられたら大変ですから何とか目まぐるしく動き廻って、このおでぶちゃんをうまく料理してやろうという作戦をたてたものです。

立上るや猛烈な勢いで突進して来るでぶ女を、得たりと右に飛んではたきました。しかし、前に落ちないのです。しまったと思った時に、闘牛の牝牛のような勢いで向を変えて又突っかかって来ました。それからは何をどうしたか全く夢中で、気がついた時は、相手は両手両足を上げた格好で土俵の上に転がって居ました。

こうして二人抜き、いよいよ三人目ですがその相手というのが、体格はまるで男の様に胸もぺちゃんこで肌の色も浅黒く、でも顔立ちは少年の様な女でした。取組んで見ると恐ろしい腕力で力相撲です。結局これも右外掛けに浴せ倒して私が勝ちました。

これで私は三人倒し、ようやく紅組の劣勢を回復し互角に漕ぎつけたのです。今度は白組も小結です。上背も私と大体同じ五尺三、

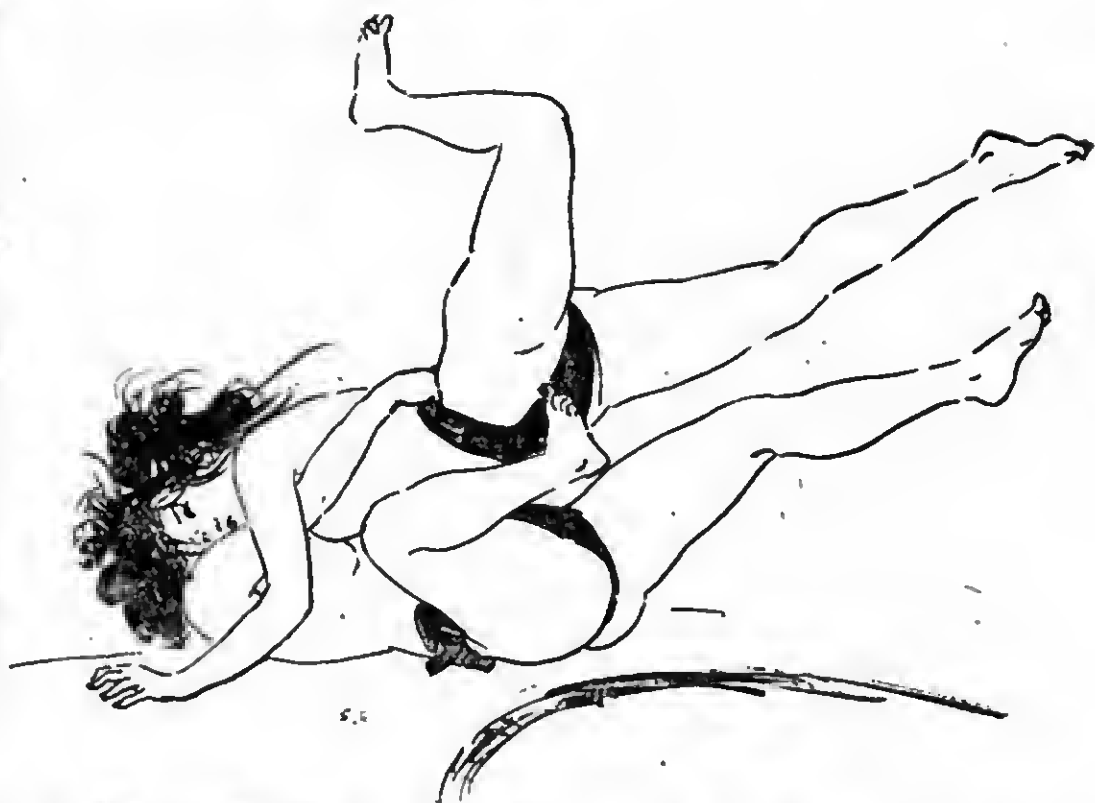
四寸位、体重も十七、八貫で、体格からいっても年からいっても同じ位の、色が白くて可愛らしい顔立ちの女力士でした。

なにしろ私はつづけざまに三番取り、しかもいずれも難敵と激しい相撲の後だけに、若くて元氣盛りで猛稽古で鍛えてある体とはいえ、へとへとに疲れています。それに髪は元結が切れんばかりに揺も乱れ、流れる脂汗でびっしりになっていますので、行司達が相談の上三分間の休憩となり、その間に髪を整え、汗を拭き、褌を締め直しました。仲間の女力士達は口々に「しっかりしてね」とその間中激励してくれました。

愈々戦斗再開、敵は猛烈な勢いで張手で攻めて来ました。可愛らしい顔に似合わず激しい斗志で、疲れている私はどうしても受身です。しかし二発目の張手をまともに食って目から火が出る様に感じたと同時にむらむらとファイトが湧き上り、張って来るのを張返し突張り合いの末左四つに組止めたのです。私は敵の上手も取ったのですが敵には上手を取らせません。私は常から褌は堅く締めるのが好きで、締める時お腹を凹まして堅く締め込



みます。こうすると筋肉に褌が食込み、相手の指が一寸やそっとではかからないのです。この時も敵は右手で私の上手を取ろうとまきぐってあせるのですがお臀をふって取らせず左四つのまま呼吸を計って攻勢に出ようと考えました。でも、いつもの私なら吊りに行くか右からの上手投に出るのですが、疲れているので腰に力が入りません。水だ水だ、という声も耳に入ってきましたが、長びけば私の不利と思って、思い切って寄り乍ら右からの上手投を打ちました。ところがこれも敵の戦



術でしようか掴んだ輝がずるずると延びてしまい、投が利かないのです。そのすきに敵に上手を取られてしまいました。

こうなっては態勢は五分五分で疲れているだけ私の方が不利というものです。汗は流れて目に入り、口はからからに乾いています。そのうちに敵は吊りに出ました。私は腰を落

して防ぎ、こちらからも吊ろうとしますが相手の輝が延びているので利きません。とうとう私は吊られて正面土俵へ持って行かれ、負けてしまいました。

くやくしてくやくして半泣きになって土俵を下りましたが、溜りの仲間は「よくやったよ。三人も抜いたんだもの仕方がないよ」と代る代る慰めてくれる始末です。

それでその対抗仕合はどうなったかというと、残念乍ら私達紅組の負けに終わりました。東西の大関同志の決戦まで持ち込んだのでしたが三保の浦さんは何といっても年を取っていて、その頃三十七、八だったと思います。

若い時はズバ抜けて強くて有名だったそうで国技館の三段目位の實力はあったという女でしたが、その頃はあいにく腎臓が悪いとかで顔色も悪く、体の色艶も冴えなかった様です。相手の大関は花も盛りの二十四、五で五尺六寸余り二十二、三貫の見事な体格。稽古も充分と見えて桜色の肌はつやつやと輝くばかり、敵乍ら見とれる程の肉体美でした。私達の関脇朝嵐さんを小手投に破り、三保の浦さんとの対戦には、浦さんもよく取って、度々敵を窮地へ陥入れましたが、若さのねばりでしようかよく残して、三保の浦さんが疲れ

て力尽きた時分を見て、寄倒しに勝ってしまったのです。

私達はくやくしてたまりませんでした。懸賞の反物は全部向うに取られてしまし、莫大な懸賞金もあちらのものです。それでも、旦那方にはよっぽど面白かったらしく、大へんにお褒めに与り、お金やら品物やらお祝儀を沢山頂きました。その後もそんな催しが二、三度ありましたが、これが一番最初で今でも強く心に残っているのです。

綾綿はこういうい乍ら見物席の方へ出て行った。

今土俵ではしよっきりの最中で見物はゲラゲラ腹を抱えて笑っている。二人の若い娘が大げさな身振りで投げられたり投げたりして見物を喜ばせている。

縦横無尽、土俵せましとばかり荒れ狂う見事な有様、女性の肉体美を遺憾なく發揮するシヨウは、この女相撲のしよっきりをおいては外にあるまい。思う存分肉体を動かすことアクロバット以上である。私は暫らくの間見惚れていたのである。

(おわり)

## 連載 S M 小説

## 宇宙のどこかで

△或る奴隷囚の告白より▽

佐 治 麻 造

## 『作者より読者の皆様に』

当作品は、冒頭の序に於いて述べた如く、地球に非ざる或る惑星上の物語である。其の惑星は地球に酷似し、其の表面に生を営なむ「人類」も我々と殆んど同じ様な生物ではあるが、冒頭に述べた如く些少の差異を有するのは止むを得ない。即ち気温は少くとも一年中二十度以上であり、医化学の進歩の割に他の技術は遅れて居る。そして肝要な点は彼等の寿命が著しく長い事であって、成年に達した後の彼等の年齢を地球人類のそれに換算するには約〇・七を乗じて頂き度い事である。即ち彼等の六十才は我々の四十才位に、百才は七十才位に考えて頂き度い。そして又、女性は概ね美人であり、

男性は概ね身体強健である。次に諒とせられ度い事は、作者の趣味として地名、人名を記するのを出来るだけ避けて居る事である。尤も次第に整理がつかなくなつて記載の止むなきに至つて来ては居るが。以上を念頭におかれた上、地球上の物語りとしてお読みになるうとも、はた又飛躍した空想の羽を伸ばされようとも、それは御自由である。

「追伸」 誌上で屢々拝見する博学なる諸氏を真似て、些さかペダソティックな言辭を弄させて頂く。非ユークリッド幾何学は門外漢から見れば甚だしく非現実的な絵空事としか映らないであろうが、専門家にとっては著しく有用な一分野として現実的な視野の中で把握され活用されて居るのである。物語りとは所詮絵空事であるの

だ。肝心なのは、それ自体が一個の自ら閉じた体系を形成して居る事、唯それだけなのだ。畢竟、当誌は云うなれば、非ユークリッド幾何学が描くいわゆる非現実的な世界の一つ、例えばリーマン平面に咲く艶やかな花なのである。以上念の為。

## 八号 囚 哀 話

それ以来、面会はおろか、一言の通信さえ許されなかったが、辛い服役を終えた彼を妻は宮門の外で待つて居て呉れた。そしてそれから貧しい乍らも楽しい生活があったが、二年足らずの後、彼の妻は交通事故で亡くなってしまい、自暴自棄になった彼は再び罪を犯して捕えられ、十六年の刑を言渡されたのである。

「鼻環を嵌められた時にゃ、ほんとに涙が出たぜ。最初の時よりまだ情けなかったなあ。四年余り辛抱してさ、やっと奴隷にして貰って、しよっぱなな連れて来られたのが、この地獄みたいな炭坑さ。ハハハハ」

或日、語り終えた奴隷八号は淋しく笑って鉄鎖を鳴らして寝返りを打ったのであった。

## 炭坑主の妾宅にて

翌朝、婦人事務員に曳かれて、会社を出発した私は街外れの閑静な一画にある小綺麗な住宅へ連れて行かれました。若いお妾さんは田舎娘の女中さんとの二人暮らしです。以前に炭坑の監房で私の鼻鎖をもてあそんでからかった若い芸妓でした。

「私はね、少しばかりきついわよ。覚悟おし」

縁先から見下ろして冷く言いました。庭の水道の所でホースの水を全身に掛けられて洗われた後、裏口の軒下に鼻環を繋がれて放っておかれます。夕方近く一人の男が来て私の全身のサイズを測って帰りました。一日中遂に何も食べさせて貰えず、暗くなった軒下にくずくまって居りますと、何とも云えずみじめな心持でした。翌朝から数名の職人達がやって来て家の中で何か造作する模様です。

「此奴が入られるんだな。可哀想に」

弁当を食べ乍ら職人達が云いました。

健康そのものの様な女中の小娘が出て来て、やっと与えて呉れた残飯を犬の様にして喰べました。耐え切れなくなって用便を訴えますと、空になった食器（と云っても古洗面器ですが）の中へする様にと云われました。其の日はそれで何も与えられず、翌朝おそく残飯を持って出て来た女中さんは、昨日のままの洗面器の中へザブリとあけて食べろと言うのでした。食べないとどんな目に遭わされるか分かりませんし、第一空腹で堪らないので舌で選り分け乍ら息を殺して呑み込む他ありません。

水が欲しくて堪らず、女中さんが出入する度に後手錠の身をもんで哀願致しましたが無駄でした。

三日目ともなりますと、食器内の内容物はドロドロになってしまい、舌で選り分けること等とても出来ず、そうかと云って、飢と激しい渴きに苛まれて居る身は咽喉を詰らせながらドロドロの物を吸り込むしか仕方ありません。眼の前で女中さんが、あたりに打水をするのを見て思わず声を出して喘いでしまいました。そして様子をうかがい乍ら鼻鎖の許す範囲で這い回って、撒き水で濡れた石や土を舐めて、みじめさに涙がこぼれたのでした。



五日目の夕方近くホースで全身を洗われ、ようやく水も吞ませて貰って庭先に引き据えられました。蓋を取った箱がおいてあり、その内には恐らく私に施される戒具の類でしょう、鋼鉄と革製の道具が詰って居ります。お妾さんと一緒に、ガッチリした体つきの婦人が出て来ました。先程此の箱を運んで来た奴隷具商の店員でしょう。

「これ、お前。いろんな着物を誂えてやったわよ。フ、フ、フ、早速着て見せてよ」

お妾さんから鍵を受取った婦人は、鼻環だけ残して戒具を全部外しました。

「先ず首環から嵌めましょうか」

ずっしりとした全鋼鉄製の首環が私の首の周りにピッタリと巻き付き、鈍い錠の音が致しました。

「ちよっと腕を上げて」

首環の左右に一本宛ついた鎖がそれぞれ両腋下を潜って再び首環にカチリとつけられ、腋下は上方へ締め上げられました。久しく忘れて居た腋鎖です。次は腰枷です。未決囚にされて以来ずっと嵌められて居ました腰枷は革を主体としたものでしたが、今施されたのは全鋼鉄製のものでした。二コのU字型の鋼製器具が腰の左右から一ヶ宛嵌め込まれ、片方のものの先端にある孔の中へ他の片方の先端が深く挿入せられ、腰を左右からピッタリと押え付けて前後それぞれ施錠されます。両側の腰骨のあたりは直径三センチ程の丸鋼で前後にはいろいろな錠や錠孔や環等がついて居る平たい部分があり内側には残酷にも全周に亘って鈍角の突起が走って居ました。

「余り使われて居ないから、お前は初めてだろうね。此の腰枷。外

国じや、重罪囚に嵌めてるところもあるのよ。大分こたえる代物だわ。この奥様はね、ずっとお前に嵌めとくおつもりよ。可哀想みたいだけど仕方ないわね。そら、次は禰よ、鎖で作った」

私に施された鎖禰は、陸軍監獄で呻吟したことのある八号奴隷から聞いたものと同じようなものですが、前部の三角形をなす部分の鎖と鎖の間に厚い革が張ってあります。サイズは勿論ピッタリで鋼鉄の腰枷の後部に一本、前部に二本の鎖の先端がカチリとつけられますと、三本の鉄鎖は真下の金具で一つに集まってグツと喰い込み鋼鉄の腰枷が腰骨にゴリツと当りました。

「次は靴ね」

両足首に嵌め込まれた鋼鉄の足錠は、更に足裏を周る鉄の帯が付いて居て、上方へズリ上がらない仕掛けです。両足錠を繋ぐ鎖は四十センチ程で、更にその鎖の中央についた四十センチ程の別の鎖の他端が真下の金具にカチリとつけられて錠がおろされました。鎖の先を金具の錠に嵌め込まれる時に、両足を揃えても未だ届きません。

「膝を少し曲げて……膝を開くのよ。分らないの！ ホントに馬鹿だね」

腿を手ひどく振り上げられ、悲鳴と共に身をよじった私は、膝を開いて腰を少し落し、真下の金具に足鎖を吊られる錠の音を悲しく聞きました。

「奥様。こんなもので如何でしょう？ まだ締まりますが、もう少しきつくしますか？」

「そうね。少し歩いてごらんよ」

足を運ぶには更に膝を曲げ腰を落さねばなりません。腰枷の前部

に吊られて居りました今迄の様に、腰を曲げると云う手も利きませんし、両足を揃えても未だ膝を伸ばし切る訳には参らないのです。数歩歩いた私は、鋼鉄の腰枷が引き下げられて腰骨に強く当る痛さに呻きました。

「ホホホホ、ま、こんなものね。けどちよっとばかり愉快な恰好するじやないの。歩く度に自分の分際を思い知るがいいわ」

何しろ足鎖の長さ一杯に脚を開いて歩くには、膝を曲げ腰を落しお尻と地面の間が四、五十センチ位になる様に保たねばならないのです。少しでも鎖を無理して緊張させると、腰枷が痛くて堪りません。腰の周りをガツキリと締め付けた鋼鉄の腰枷はヒンヤリとした感触で身に喰い入り、今後味わねばならない苦しみを思っ私は悲しくなりました。

「今度はお手々だね。前で揃えて……」

差出した両手首に、さも当然の様に手錠が嵌められました。両手

首に嵌められた鋼鉄の環は幅四センチ位、厚さは二センチ位、クローム鍍金に光ってずしりと重く、繋ぎ合わせる鎖は四十センチ程です。その鎖の中央についた三十センチ程の別の鎖の端が鼻環に錠でつけられました。

「手を合わせて垂れてごらん。首を真直ぐにしといて……」

首か胸を前に曲げないと肘を伸ばすことが出来ない縛しめであると知りました。

「奥様。此の位の程度でしたら、家庭内の雑用なら大概できる筈ですから……」

「そうねえ。お前これから毎日そうして働くんだよ。分った？ホホホホ……」

特に製作された手錠は私の両手首にピッタリと巻き付き、鼻環につけられた鎖は、手を動かす度にチャラチャラと鳴り、私は全くみじめな思いでした。手錠の



短い鎖を直接鼻環に結ばれた今迄の鼻環手錠とは異なり、なまじ余裕のある鎖が鼻環にブラ下がって居ますので却って情けなさが身に泌みました。そして、こうされたままで追い使われるのかと考えますと、歯ぎりしたくなる程の情けなさでした。

「では、胸枷を嵌めて見ましょうか。手を上げて、肘も開いて、そうそう」

話には聞いて居りましたが、今迄の囚われの生活の間でも一度もお目にかかったことのなかった恐ろしい胸枷が、私の胸に金属音と共にピッシリと嵌められました。厚さ二センチ、幅五センチ位の全鋼鉄製の隋円形の枷で、私の胸の周りに合わせてキツチリと製作されて居り、蝶番部が背筋に、錠は胸の所に来るようにして、乳首の少し下で巻きつきました。腰枷と同じく、内側全周に鈍い突起が走って居るのが感じられました。付属して居る金具が背筋と胸骨にそれぞれ沿うて上方に伸び、首環の前後にカチリと嵌入しました。これで此の胸枷の位置は固定された訳です。呼吸する度に冷い鋼鉄の圧迫感が胸部全周に感じられ、肋骨に鈍痛が走りました。胸枷には更に両肘に当る箇所到手錠のような構造の環がガツチリと固定して取付けられてあって、胸枷を嵌め終えた婦人にビンタを食って叱られた私は、両手をジャラジャラと下ろします。両肘をその鋼鉄環が噛んで捕えました。

「手を後ろへ回して……」

手錠を外された私は鼻環についた鎖に手錠をブラ下げたまま、回れ右して両手を後ろへ回しました。今迄とは異った方法の足の拘束をつい忘れた私は回れ右しようとして鎖を引張ってしまい、腰枷の痛さに踵を浮かせ、鼻にブラ下がった重い手錠がブラブラする痛

さに更によろけ、一旦後ろへ回した手で手錠の揺れを押え、片方の手を地面に突いて膝を落してしまいました。必死に立上って両手を後ろに回してうなだれる私に三人の婦人は声を合して嘲笑を浴せました。歯がみして口惜しく思いましたが、どんな縛しめを受けても当り前の身、革鞭の一つすら加えられなかったのを感謝しなければならぬ分際なのです。

胸枷の背部の左右に、鉄環二個宛で取付けてある手錠の環がそれぞれ両手首に嵌められました。右手は左側の環に、互いに交錯してねじ上げられてガチャリと嵌められるのです。婦人にねじ上げられた途端、両肘の鉄環が肘にグッと喰い入ってしまい、又手錠を嵌められた途端に胸枷がゴリッと動いて肋骨が痛み、首環の前半分が咽喉を圧迫するのを感じました。交叉して後手にねじ上げられた両腕は、少しなら動かせる筈なのですが、ビクともしません。余りのきびしい拘束に思わず喘ぎました。全く残酷な戒具です。

「こっち向いて……ホホホ、今度は注意して……」

和服を粹に着こなしたお妾さんが、庭へ下りて私の前へやって来ました。哀れにもみじめな私の姿を眼を細めてジロジロ眺めます。

「お坐り」

鎖の真下から垂れた鉄鎖をジャラジャラ鳴らせて正座した私は額を地べたに摺りつけようともがきますが、腰から上に施された鋼鉄の戒具の拘束と痛さに呻きます。

漸くのこととて腰を上を浮かせたぶざまな恰好で平伏することが出来ました。

「……横領、強盗、暴行並びに傷害致死罪で死刑を宣告して頂き……お慈悲で以て終身懲役に減刑して頂き……そして又、奴隸にして

頂いて……これからあなた様に使って頂きます。ウッ。い、痛た、た……」

残酷な戒具の苦痛に呻きました。

「ホホホホ。その腰は何よ。ちゃんと土下座できないの？ お清、腰を踏んずけておやり！」

女中さんのサンダルで腰を力一杯踏まれ、思わず地面から離れた頭をお妾さんの下駄が踏んで押えました。

「……ウッ……お、おじひ……ア、ア、ウ……」

「そんなに痛いのかえ？ 着物を誂えてやった甲斐があったと云うものね」

「……ウ、ウ……ウ……。ああ……いた、た……。あ、ありがとうごさいます。いろいろ……戒具を作って頂きまして……ほんとに……ア、おゆるし下さりまし……ほんとにもう痛くて……。すぐに慣れると存じます。ア、フーッ、おゆるし……」

面白半分に踏みつけたままで揺り動かして居たのが、漸く止まりました。

「フン。それで？ 続きはどうしたの？」

「ハ、ハイ。どんなお取扱いを受けても当然の身でございます。存分に使って下さりまし。そして虫ケラ同然の私でございしますが、何卒お慈悲の一かけらでも掛けてやって下さいまし。どんなことでも致します。お、お願いでございします。奴隷の勤めをさせてやって下さいまし。監獄へブチ込むのだけは、もう……お慈悲でございします」

「ホホホホ。余程監獄がこわいのね」

「奥様。此奴はね、もう二十年程で自由になれるんですのよ。監獄

へ逆戻りじや、先ず一生涯鎖から解いて貰えませんか」

「けど、そんなに自由の身になりたいものかねえ。まあ、そりやそうだろうけどさ」

「では胸枷を外してやりましょうか？」

「いえ、今日もうこれでいいの。このまま檻へ入れるのよ。えーと。二十五号ね。面倒だからそのまま二十五号と呼ぶことにしようね。私のことは、そうね、奥様とお呼び。この人は女中のお清さん。子供も居ないし、御嬢様と呼ぶんだよ」

「ハイ」

「夜は檻の中へ入れるわよ、今の恰好のままでね。其の胸枷や腰枷はね、余り使う人はない様だけだね。私はお前が苦しんで悶え死した所でさ、身銭出して買った奴隷じやなし、ちっとも構わないのよ。云々とくけど幾ら泣いたって外しはしないからね。ま、せいぜい苦しむがいいわ。ホホホ」

どんな扱いをされても一言半句の抗弁も許されず、訴える術とてない奴隷の身の悲哀が身に泌みました。

「朝になったら胸枷だけは外してやるわ。そして手錠を鼻鎖に結んで上げるから文句をいわずにキリキリ働くのよ。ホラ鞭も此の通りあるのよ」

鋼線入りの革鞭が太腿に加えられました。

「ヒーツ。ありがとうございます」

「ホホホホ。さすがに長年監獄や奴隷生活をして来ただけあって、仲々神妙じやないの。ホラごらん、ちゃんと嵌口具も齒枷も揃えてあるのよ。けど外へ連れて出る時の他は使わないつもりよ。ピンタするのに不便なもの。ウン、それからね、家の中に入る時にはね、



此の足ぶくろを穿くのよ」

奥様は厚い樹脂レザーで作った足袋の様なものを示しました。

「廊下やなんかに鎖や鉄枷を当てる承知しないよ。そら、鼻環や鎖帷の真下の金具の所に一個宛フックがついてるだろ。鎖がブラブラすると思ったら、そのフックを使って鎖を短くしとくのよ。分ったかい。コトリとでも触ってごらん、胸枷の上から窄衣で締め上げてやるから」

「ハイ。よく……よく分りましたでございます」

「ウン、それからね、用便は日に一回よ。朝、檻から出してやる時に鎖帷外してやるわね。ホホホ。その帷の締め工合はどう？」

「ハイ。奴隷の分際で帷など着けさせて頂きまして、分に過ぎた事でございます」

「それからと……。あッ、そうそう。まあ、そんなことは余りないだらうけどさ、する仕事がない時は、あの算盤台の上で正坐してるのよ。私の室の窓の外に置いとくからね。両手は合掌することにしとこうか。わかったかい」

「ハイ。奴隷にして頂く御恩は、肝に銘じて、ありがたく思っております」

「フ、フ、フ。ではと。そんなものね。ちよっと腰を浮かせて、顔を上向けて、そうそう」

お妾さんは、いや奥様は私の両頬に猛烈な往復ビンタを食らわせました。落度もないのに初めての方から受けるビンタは、いつになっても口惜しいものです。心ゆく迄私に平手打ちを浴びせた奥様は手錠のブラ下った鼻鎖を握って乱暴にし、やくり上げ、私の顔を仰向きにしました。

「ウッ、い、いた。そ、そんなに不意に乱暴に、いえ、強く引張らないで下さいまし」

「フ、フ、フ。じゃ、何のため鼻に鎖をつけとくのさ？ お前も、未だちよいちよい人間並の口を利くのね」

仰向いた顔に唾をしたたか吐きかけられました。

「あなた。済みませんけど、ちよっと手を自由にさせてやってくださいな」

「あら、奥様。御存知ありませんの？ 此の胸枷は錠も掛けられませんが、かからないでもいいようになってますのよ。胸枷自体にはさっき錠を下ろしてしまいましたけど、肘や手首の環は、ほら、この凹みにあるつまみを回して引張れば外れますのよ。錠でなきや外れないようにするには、つまみをこうなされば」

「あら、そうでしたわね」

後手のきびしい拘束を解かれた私は、奥様の唾液を顔中にすり込まされました。ついでお清、いや御嬢様にも唾を吐きかけられ、丹念にすり込まされたのでした。

「あ、ありがとうございました」

合掌して御礼を申上げるや、再び両手を後ろでねじ上げられ、両肘と両手首を鋼鉄の環が噛んでしまう悲しさ。

「おいで」

鼻鎖をひかれ、足裏の鋼製金具をカチャカチャ踏み、みじめな恰好で台所の一隅から地下へ降りました。

「奥様。ついですから、檻も拝見させて頂きますわ」

奴隷用具商の婦人も一緒に来て来ました。三人の婦人は軽やかな足取りでトントんと階段を降りて行きますが、私はそうはいきま

せん。足鎖と鎖揮の真下とを繋ぐ鎖の不自由さに脚をもつらせて哀願しました。

「そ、そんなに……。鼻鎖をそんなに引張らないで下さいまし。何しろ揮の鎖が……」

「あら、お前そんなこと云ったってね、これからずっとそうしてこき使われるのよ。つけて貰ったばかりなのに、そんな泣きごと云ってるようじゃ駄目よ」

婦人達は声を合わせて私の姿を嘲笑し、奥様は面白そうに鼻鎖を左右に揺りました。鼻の鎖の先にブラ下った手錠が開いた大腿部の内側に当ってガチャガチャ鳴ります。

「ハ、ハイ。何分、こんな風にされ……。いえ、して頂いたのはこれが初めてなものでございますから、つい……。いえ、その中にすぐ慣れますでございます」

哀訴して居る時も足を止めることは出来ず、胸枷で締め上げられた上体を真直ぐに立て、膝を曲げて左右に捻げ、尻を振り振り息を切らして漸く地下室に降り立ちました。

食料品置場に隣接してガラクタ道具類の置場らしい殺風景なコンクリートの一室があつて、薄暗い裸電球が灯り、隅々には古道具等が積重ねてあります。五米に七米位の広さで天井は低く、天井の中央附近に新しく造作したらしい二尺角程の覗き穴があげられ、上から蓋がしてありました。その穴の真下に、二米四方位で高さは一米半もない位の鉄の檻が置かれ、鉄棒が黒く光って居ます。檻は天井も鉄棒の格子で鋼鉄環やらフック等が数個取付けてあり、更に天井の中央部に、頭を出せる位の円い孔が設けてあります。檻の床はいわゆる算盤床で、三角の鉄棒を格子に組んだ残酷な構造でした。更

に檻の四隅に鉄鎖が付いていて、天井の滑車に延びています。片隅の電動機によって天井一杯まで檻全体を持ち上げることにも出来るようでした。檻の外の一隅に、これも今度造られたらしい水洗便器があります。

「入るんだよ」

手錠を鼻鎖にブラ下げたまま、胸枷の痛さを堪えて上体を屈めて狭い入口を膝で歩いて入った途端、例によって腰を蹴り飛ばされ、苦悶の呻きと共に床に倒れました。格子扉がガチャーンと閉りました。

「奥様。毎晩こうしておかれるんですの？」

「ええ、そのつもりよ。何ですの？」

「いえ、それはもうお勝手ですけど……。かなり苦しみますわよ。監獄の重屏禁以上ですもの」

「ホホホ、いくらでも苦しむがいいわ。あの天井の穴ね、私の寝室の床にあいてるのよ。ひまつぶしに見物してやるつもりなの」

「あら、そうです。そんなら呻き声が聞えてやかましいかも知れませんか」

「御心配なく。あの穴の蓋はね、防音になってますのよ。それに嵌口具嵌めてしまうことだって出来るし……。それよりか、残りの品はいつ出来て来るんですの？」

「歩行矯正具と、乗用車ですわね。五、六日待つて下さいましな」  
「私ね、あの針玉を此奴の腿の間にブラ下げてさ、乗用車を曳かせて乗回したいのよ。フ、フ、フ」

「あら、奥様。それだけはおやめになった方が」

「禁止されて居るってことは知ってるわ。けど場所さえ選べばいい

「のよ。面白いじゃなくって？」  
 「そりや面白いかも知れませんが、危のうございますわ。先だっても或る所の御嬢様がそれをおやりになりましたね。低いことは低い崖でしたけど、乗用車が転落して怪我なさったんですのよ。背骨を折った奴隷は、管理所の係員が注射して処分してしまいましたけど。まだ若い男で二十年以上も残って居たんですのよ。まあ奴隷の方は金銭の損害で済みますけど、役所へ呼ばれて注意されたり始末書を取られたりされましたね」

「へーえ。じやよく気を付けなけりやいけないわねえ」



「では奥様失礼致しますわ。これ、お前。可哀想みただけで奴隷だものね、仕方ないわね。奴隷って本当に運ね。辛抱おしよ。終身懲役よりはましだろ。その種の鎖はね、含油鋼で作ってあるんだから股ずれは、そんなにひどくはないと思うわ。胸で息をするの胸枷が痛いわよ。と云っても腰枷も鉄なのね。腹で息するのも難かしいのね。ホホホ、ま、じっと我慢してるより仕様ないわね。もがいたって無駄よ。痛いだけだよ。どうもなりやしないんだから……」  
 足裏を回った鉄の帯のため足首を立てたまままで正坐した私を檻の中に残して婦人達は立去りました。灯されたままの薄暗い電灯の光

が私の全身に鉄格子の影を落し、あたりは静かになりました。今迄にないきびしい拘束に、私の心は打ちひしがれ、これからの毎晩をこうして過すのかと考えますと本当に悲しくなりました。奴隷の取扱いに就いても、交通法規に類した取扱準則があつて、此のような残酷とも云える戒具の常時使用は禁じられて居る筈だがと考えますが、訴える術がないのですから、哀れなものです。齒を食いしばってどたりと丸太棒のように横になりました。床の鉄棒に鉄の枷や鎖が鈍く鳴り響き、肌に食い入る痛さに呻きました。仰向きますと、後手に交叉した両腕が折れるように痛み、横向きになって肘の鉄環を床の棒の間においてやっと一息つきました。ホッとすると間もなく腋鎖が胸に食い込み、鉄の腰枷が腰骨に当る切なさ痛さに悶え乍ら俯向きになります。すると今度は胸枷が責めます。堪らなくなつて呻き乍ら起直り、



鉄格子に背をもたせた私は声を忍んで泣いてしまいました。

「ホホホ、泣いてるのね。どう？ 檻の住み心地は？ 鉄の着物の寸法はどう？」

檻の真上の天井の覗き穴から奥様の白い顔が見下ろしました。

「お、奥様！ こ、こんな、もう……」

思わず怨めしそうな眼で見上げる私を小気味よさそうに見下ろした奥様は、スイッチを押して檻を引き上げました。檻の天井が室の天井にピッタリとつき、檻の天井の丸い孔が覗き穴のほぼ中央と一致します。

「この孔から頭を出すのよ」

孔の縁の金具が首環にカチリと嵌め込まれて、私は檻から頭だけ

出した状態で固定されました。両脚は揃えて爪先立ちをし、膝を曲げた状態を強制されます。

「ごらん。ここが私の寝室なのよ。フ、フ、フ」

広い洋風の寝室の一隅の床に頭だけ出した私は豪華で艶めかしい寝室の内部を仰ぎ見ました。所詮どうすることも出来ない身の上ながら、やはり口惜しく羨ましく、黙って歯ざしりする私を、革スリッパを両手に持った奥様はしやがみ込んで心ゆく迄ビンタしました。

「私はね、何度も云うけど、こうして撲り付けるのが好きなのよ。どう？ 口惜しいかい」

首環を固定された私は、ビンタを避けることは勿論出来ませんが、身もだえして脚を踏み直した途端足の先は空を踏んで、檻の床の格子の間から両足先を落してしまいました。

「グッ……ウッ……」

首環と、それに固く連結された胸枷の痛さ、苦しさに目を白く剝いて呻く私を眺めて奥様は笑いこぼしました。幸い両足首を繋ぐ鎖がありますので、足先は僅かしか落下せず、すぐに足指は床の鉄棒を捕えることが出来ました。

「じゃ、私が寝る時迄、こうして居るんだよ」

「ハ、ハイ。ありがとう、ございました」

「これを啣えさせとこうね」

短い鉄の棒を奥歯で啣えさせられた私をあとに奥様は香水の匂いを残して室外に去りました。私は、ダブルベッドの上半分を眼前に



睨んで、それからの数時間を飢渴に苛まれ脂汗を垂らして必死の思いで過しました。どんなにビンタされてもいい、革鞭をお気の済む迄当てられてもいいから、此の姿勢から解放して貰えたらと思いましたが。ダブルベッドの傍らのサイドテーブルの上の冷水の瓶とコップが私を嘲笑うように光って居ましたが、やがて室内は夕やみに包まれ、媚めかしい香りのみが鼻をくすぐりました。突然、電灯が点り、奥様が入って来て、私をからかい乍ら寝衣に着替えました。啣えさせられて居た鉄棒を手にとって私の頭をコツンと打ちました。

「苦しかったかい？ 最初だから、これで堪忍してやるわ」

革スリッパのビンタ数十回の後、顔に唾を吐きかけられた私は漸く首環を金具から解かれ、鉄の枷の痛さものは、崩折れて大きく喘いで呻きました。檻がズルズルと落下し、ドシンと床に当たって私は骨にひびく胸枷、腰枷の痛さに呻きました。

「お、お慈悲でございます。水を一口吞ませてやって下さいまし」

「駄目駄目。明日の朝迄駄目よ」

「せめて、用便なりともさせてやって下さいまし」

「へえ、あんなに汗を絞ってやったのにねえ。まだまだ絞り方が足りないのね。じゃ、今晚中、鼻鎖を檻の天井に吊っておいてやろうかしら」

「そ、そんな、お赦下さいまし。おゆるし……」

「用便はね、さっき云い渡しただろ。毎朝一回だけだって。鎖帷をもっときつく締め上げて欲しいの？」

覗き穴の傍らにしゃがんだ奥様は、鉄枷と鉄鎖を鳴らしてのたうち回る私の哀れな姿を愉快そうに見下ろして居ましたが、やがてバタンと蓋を閉めてしまいました。鉄檻の隅に身をもたせ、あぐらの

姿勢で呻き喘ぎ乍らまどろんで居た私は、檻の格子扉がガチャガチャと開けられる音に目が覚めました。ショートパンツ姿の小娘の女中、いや御嬢様が乱暴に鼻鎖を引張り、私は悲鳴をあげ乍ら檻を転がり出ました。ねじ上げられた後手を解かれ、両肘を嚙んだ鉄環がガチャリと開き、そして胸枷が重々しく外されました。体がフワリと浮き上るようです。

「思ったより重いものね」

一晩中、私を苦しめ通した此の残酷な枷を押頂いて檻の金具に引掛けました。

「お嬢様。手錠を嵌めさせて頂きます」

どうせのことですから、自ら進んで嵌めようと致しますと、

「お待ち。私が嵌めてやる。手を出して」

無抵抗の私を縛るのが愉快なのでしょう、差出した私の両手にゆっくりと手錠を嵌めました。私の胸の辺までしかない小娘ですし、初めての方ですので、諦めては居ますものの口惜しさがこみ上げました。

「揮を外してやるからね。けど其の前に少し芸当をしなくちゃね」  
命じられるままに私は、おはきになって居るサンダルを底を舐めました。

「お、お嬢様。お慈悲でございます。用便をさせて下さいまし。これ、此の通りでございます」

棒のように硬直した体を呻き乍ら平伏し、両手を合わせて哀願致しました。

「フ、フ、フ、そんなに……かい？ 三べん回ってワンとお云い」  
鍵を指でクルクル回し乍ら、さんざんからかい辱かした後、漸

くのことと鎖禪の鎖の一本だけが、鋼鉄の腰枷の後部からカチリと外されました。

「早くおしよ。何ぐずぐずしてるのよ」

監視されたまま済ませましたが、本当にホッと致しました。

「ついておいで」

そのまま階段を昇り庭へ曳かれました。

禪の鎖が一本外れて居ますので、腰を屈めれば膝を伸ばして歩けますし、これならもう慣れて居る身です。このままで働かせて貰えたらとつくづく考えました。庭の水道で全身に水を浴びせられて洗いました。

「フ、フ、フ、中々上手に盗み飲みするじやないの。ちゃんと分ってるわよ。ま、水位呑んでもいいけど用便は朝一ペンだけだよ。いいのかい？ さ、こっちへ来て。脚を開いて」

グーッと禪の鎖を締め上げられ、カチリと云う音を悲しく聞きます。お嬢様は、いつの間にか手にした革鞭を、私の濡れた肌に五つ六つと当て、鎖を鳴らして身をよじって悲鳴をあげる私を、さも面白そうに眺めました。

「さ、庭の掃除をするのよ。道具はあそこに納ってあるからね」

小柄乍らスナリした脚が何の拘束もなくショートパンツから小麦色に輝いて居るのを横目で羨ましく見て、鞭を背中に吊られた私は尻を振り振り、仕事にかかりました。腰骨がうずき、上体の節々がずきずきし、革鞭の痕が灼ける様です。鼻鎖につけられた手錠の不自由さ、鎖禪と鉄腰枷の緊縛感、そして上方へ吊られた両足の切なさ。私は溜息をついて眼をこすりました。奥様の寝室とおぼしき窓はカーテンが閉まったままで、未だ安らかに朝寝を楽しんで居る

様です。

「済んだかい？ おや何さ、この掃除の仕方は。奥様がお眼覚めだよ。こっちへおいで」

台所で足ぶくろを両足にかぶせて家の中に上りました。コーヒーのポットや茶碗、砂糖壺等をのせた盆を捧げて寝室へ運びます。足鎖を床に当てない様に、そしてこぼさない様に歩くのに一汗かきました。

おそろおそろ額でノック致しますと、やがて電気仕掛らしい扉が開きました。サイドテーブルにおいて、顔をうかがいうかがい、こわごわ立ち去ろうと致しますと、長いまつげにおおわれた切れ長の眼が開いて

「ちよっとお待ち」

大きくのびをした奥様はベッドに起直って、真白い腕で髪を掻き上げ乍ら私をジロリと見ました。

「真直ぐ立って。両手を前に揃えてのばして。そうそう」

白い手がのびて熱いコーヒーが茶碗に注がれ、芳ばしい香りがたちこめました。

「おや、もう鞭を当てられたのね。お清さんも中々きびしいじゃないの」

「ハ、ハイ。朝から、いろいろお手数をおかけ申上げました」

「ホホホホ。ところで、寝心地はどうだったの？ あら、凄いのね。一晩で、胸枷の痕がそんなについてちゃって。少しは分際が身に泌みただろうね」

「ハ、ハイ。ありがとうございます」

私は唇を噛み、腕のたるさに喘ぎました。

「よし。お行き」

今迄の習慣で、思わず平伏しようとした私は、厚い絨壇にジャラジャラとこぼれ落ちる鎖の音を聞いてハッと致しました。あわてて鎖種の真下の金具のフックに鎖の中途を引掛け、鼻鎖を両掌に抱えてひれ伏しました。

「ホホホホ。そんなにあわてたってもう遅いわよ。けど感心によく覚えて居たわね」

「お、おゆるし下さいまし……」

「駄目駄目。鎖を床に当てた罰は何だったの？」

「ハ、ハイ。窄、窄衣でございます」

「躰けのためよ。初めてだからって容赦はしないんだから。今夜は胸枷の上から窄衣、じやなかった、窄衣の上から胸枷をつけてやるからね。ホホホ、震えてるじやないの」

顎をしやくられて立去ることを命じられた私は、ついそのまま立ち上ろうとして、重心を失ってよろめき倒れ、小気味よさそうな嘲笑を受けました。

今度は家中の雑巾掛けですが、鎖を床に触れない様に這いずり回る難かしさは想像を絶したものでした。薄笑いを浮べて監視する小娘の女中の小憎らしさ。ほんとに胸が煮え返るようでした。

「フ、フ、フ、案外やれば出来るものねえ。どう？ その手足の錠や鎖、外して欲しくない？」

鍵を見せびらかせてからかいました。

庭に降り立った奥様に呼ばれ、昨晩以来ふくれ上った頬に又しても心行く迄ビンタを加えられ、再び尺取虫のようにして雑巾掛を続けました。

奥様やお嬢様の朝昼兼帯の食事が済み、漸く食事が与えられます。後手錠に嵌め替えられはしませんでしたが、監視を受けて居る身、よしんば誰も見て居なくても、手で食器を持つことが許される筈はありません。私の食事は、その後三、四日程は残飯でしたが、やがて乾燥奴隷食に切替えられました。

奥様は午後になると外出され、私は洗濯をさせられます。近所の女中さんらしい若い娘さんが油を売りに来て、お嬢様の汚れた下着等を洗って居る私を見物しました。

「あんた、ずい分染になったじやないの。羨ましいわ。することないでしょ」

「フ、フ、フ、その中に食事の跡片付けなんかもやらせるつもりだし。嬉しくなってるわ」

「けど、大の男がねえ。あんたこわくない？」

「あら、おとなしいもんよ。ホラ……」

私の背に吊った革鞭を取ったお嬢様は、洗濯槽に身を屈めた私の背をピシリと鞭打ちました。

「ヒーツ。ありがとうございました」

「まあ、ほんと。可哀想みたい。ねえ、お前。働かされてる間も鎖で縛られたままなのね。哀れなものねえ。手向い等しようとは思わないだろうに」

「私めは奴隷でございます。御主人様が必要と思われた戒具を施して頂くのは当然のことでございます。それはもう、私も生身の体でございますから、やはり辛うはございますけど、致し方ございませんです」

「おとなしくして勤めるんだよ」

「ハイ」

「けど私ね、こんな鉄の腰枷や鎖の禰なんか嵌められてるの見るのは初めてよ。ちよっと残酷ねえ」

哀れみを掛けて頂いた所で、所有者以外の方では仕方ありませんが、嬉しくて眼頭が熱くなりました。

豪華な浴室を磨き、ガスと薪炭両用の風呂を落葉と薪でたきました。

お清様から与えられただけでは沸かし切れず、さんざん罵しられました。庭に水を打ち終えた頃、奥様が帰って来られ、浴室でお体を流しマッサージをさせられます。

「お風呂場ではね、鎖が床に当たっても勘弁してやるけど、私の体に触ったら承知しないよ。フ、フ、フ、何を齒がみして切ながってるのさ。うまくやり終せたら今晚の窄衣は特別に堪忍してあげるわよ」

私は脂汗を垂らして努力致しましたが、とうとう手錠の鎖を脂の乗ったお体に触れさせてしまいました。「あら、やはり駄目ね。手をブルブル震わせてさ、口をパクパクさせて一体どうしたって云うの？ 額のあの脂汗！ 眼も据っちゃってるじや

ないのさ。フ、フ、フ」

奥様は愉快げな笑顔を立て、片脚を挙げて私をタイルの床に蹴倒し、すっと立って勝誇った様に私を見下ろしました。

晩食後二時間程、居間の窓の下で算盤台に正座合掌させられた後、地下室へ曳かれ窄衣をつけられました。革製のチョッキの様な





ものが胸に巻かれ、首環と腰枷とで上下を固定され、前部の合せ目に付いて居る四コ金のネジが繰返して順々に締め上げられました。寸法を測って作られたものですから、全くピッタリで、少し締めただけで既に呼吸が苦しくなりました。ホンノリと寝化粧をした奥様は、両腕を挙げ膝を曲げて立った私の眼前で、白い腕の袖をまわって楽しそうに金具のネジをギリギリと締め付けて居られます。

「まあ、こんなものね。大分締まったわ。フ、フ、フ」

もうこれだけでも既に甚だしい苦しみですが、哀れな私には更に胸枷が待つて居ました。お清が重そうに胸枷を嵌めます。

「突立って居ないで手伝ったらどう？」

胸の鉄枷を支えさせられ錠が鳴りました。両肘を固定され、後手にネジ上げられた時の苦しさ。本当に眼前の二人の婦人が鬼の様に思われました。いくら奴隷だからと云って、あんまりだと思ひ乍らよだれを垂らして呻き呻き、膝をついてしまいました。

「さ、檻へ入って！」

施錠の音を聞き乍ら必死に哀願しました。

「……一晩中……この……まま……でしよう……か？」

「当り前じやないの」

「……死、死んでしまい……そうで……ございます」

「あら、死んだっていいのよ。お代りはいくらでも采るんだから。

ホホホ……」

「けれど奥様。此奴、馬鹿みたい。だって締めつけられたり嵌められる時はおとなしくしてて、済んでから泣くんですもの。私だったら嵌められる時に何とかしますわ」

「フ、フ、フ、それが出来ないのが奴隷や囚人の哀れな所なのよ。」

抗ったら生命がないんだからねえ。死ぬのは物凄く恐ろしいらしいのよ。便利な薬があるもんだわ」

其の夜一晩の苦しみは言語に絶したもので、翌朝やっと赦された時は息も絶え絶えでした。立上がる気力も体力もない私の両手に情け容赦なく手錠が喰い込み、鼻鎖を無慈悲に引かれて這いずって庭の算盤台に正座させられました。

「手を合わせるんだよ。奥様は未だお寝みだけど、お出ましになつたらよく御詫びしなきゃ駄目よ。今晚も又やられるかも知れなくてよ。フ、フ、フ、これっ、ちゃんと座つてられないのかい？」

背中に鞭が灼きつきました。鎖がちよつと床に触れただけで、あの様な苦しみを与えられるとは、奥様もお清様も、本当に残酷な婦人だと思いました。そして、これからの日々の苦しみを考えますと監獄の方が余程楽だとさえ思いましたが、終身懲役だけは何としても嫌で堪りません。死ぬ迄に一日でもいい、此の鎖錠から解放されて見たいものだと思ふと、どんな扱いを受けても唯耐え忍んで御慈悲におすがりする外ないのです。残酷な婦人達に管理される不運は、所詮奴隷の身のことと諦めねばなりません。しかし、考えて見ますと、いくら奴隷だからと云って、そう簡単に終身刑に処すことができるのだろうか、とも思いますが、確かめる途とてなく、もっと刑法や監獄法を調べておけばよかったと後悔致しました。いくら考えて見た所で、又理窟をこねた所で仕方ありません。やがて爽やかな朝の粧いで現われた奥様の姿を仰いで全身がおののきました。

「少しはこたえたかい？ 何なら今夜もどう？」

必死の思いで全身で憐れみを乞うて、赦しを願う私に冷い言葉が

掛けられました。

「フン。じゃ、骨身に泌みたんだね？　今日はずっとそうしておいで。特別のお慈悲だわ」

それから五日程して私が繋がれて曳かされる乗用車と、そして歩行矯正器、通称針玉が届きました。早速私の両腿の間に針玉がブラ下げられ、乗用車の輻が私の両肩に喰い込みました。はしやいでお乗りになった奥様の一鞭を浴びて曳き出しましたが、腿の内側に当る矯正器の痛いこと痛いこと。

「ぎゃあぎゃあ喚いてうるさいわね。口をあけて」

嵌口具を嵌められた私は、鞭の雨を浴びて、あたりを死物狂いで曳きました。近所の人々に見られて奥様は得意そうでした。これから奥様の暇つぶしにもって来いの遊びが出来た訳で、私は胸がふさがる思いでした。

旦那様は三、四日毎に訪れますが、虫ケラ同然の私なんかは全然歯牙にもかけてはくれません。旦那様がくるという日は奥様も御機嫌がよく、お清様が手荒にされるのをたしなめて下さる程で本当に助かります。退屈しのぎに苛められさえしなければ、不自由な鎖帷を施された体ではありませんが、家事の雑役位は先ず楽な方です。鋼鉄の腰枷も一カ月程致しますと腰骨がなじんで来て、四六時中、苦痛は苦痛乍ら最初程ではなくなりましたし、鎖帷のみじめさも諦めました。ただ毎夜胸に嵌められる鉄のタガだけは、いつになっても本当に苦しく、自分の胸にタガを嵌めるのを手伝わされた末、両腕を後にネジ上げられる度に悲しくて涙がこぼれました。何故に毎晩毎晩こんな辛い目に遭わされるのかと其の度に思い、胸枷を施される間中は、思い切って御慈悲を哀願して見ようか、いや所詮無

駄で、却って更に痛めつけられるのが落ちだからやっぱりそう、と迷い抜くのですが、ネジ上げられた両手首を鋼鉄の環が捉えて仕舞いますと、すべてを諦め、お礼を申上げて檻の中へ這い込むのでした。

連れて来られたのは初夏でしたので直ぐに夏になりました。其の夏は例年になく暑く、そよとの風もある筈がない地下の檻に入れられる私は毎晩毎晩喘ぎました。

「二五号！　鼻を吊って」

視窓から私を見下した奥様が夜中、突然言渡されました。この所一週間程旦那様が来なくて機嫌が日毎に悪くなって来て居ましたので諦めて腰を浮かせ、鼻環を檻の天井の鉤に吊ります。

「奥様。鼻を吊らせて頂きました」

クーラーで冷えた空気が視窓から流れて来ました。

「朝迄そうしておいで。私がねむれないのに、奴隷のお前が眠ると云う法はないものね」

「ハイ。申訳ございません」

はれものに触る様にするしか手はありません。翌日は午前中ずっと乗用車に私を繋いでドライブをし、私はフラフラになりました。昼食後私は鞭の雨を受けました。当り散らされる私こそみじめなものです。どうする事が出来ましょう。大たい鞭よりビンタを食わせる方を好むらしい奥様でしたが、其の日はどうした事か鋼線入りの革鞭が私の全身に炸裂しました。

「背中の方はお尻よ。次は腿の内側！」

「そら今度は脇腹よ。グズグズしてると窄衣を着せるわよ。キリキリと姿勢を取るの。馬鹿！　そんな方を向いて胸を撲れると思つて

るのかい？ それとも私に動き回れと云うの？ほんとにムシヤクシヤするわね」

全身に二十以上の鞭を、それも力一杯の鞭打ちを受け、しまいに一鞭毎のお礼の言葉も出なくなる程でした。久し振りに与えられた徹底的な鞭はやはり全く痛烈な苦痛でした。

「少しはスツとしたわ。そうだ、やっぱり、うちの人たら、此の頃はあの女奴隷の所ばかり行ってるに違いないわ。よし、今日こそは行って来ようっと……。これお前は今日はね、ずっと針玉をブラ下げたままで働くのよ」

奥様は柳眉を逆立てて出て行き、私は針玉に悩み、鞭痕の灼けつく痛みに歯を喰いしばって呻き乍ら、お清様に追いついてもらいましたが、彼女も少しは憐れみ心が起きたらしく、日頃のきびしさはありませんでした。

奥様が出ていってから一時間程して、突然旦那様がお見えになりました。お清様から話をきいた旦那様は

「ちっ。仕様ない奴だなあ。そりやぶちまけた話が、この奥さんより、あっちの方が綺麗なことは綺麗さ。しかしあっちの女は奴隷だぜ。あっちへ一回帰れば、ここへは二回帰ると云う風にしてるのになあ。女って本当に仕方ないな」

縁側に腰掛けた旦那様は私に初めて声をかけて下さいました。

「お。おい二十五号。どうだい。こっちへ来て坐れよ」

私にとっては神様以上の方です。縁先の地べたにひれ伏してブルブル震えました。

「ずい分きびしく縛られてるじゃないか。この奥さん、ちよっとばかりきついだろ。ハハハ……。おや、こりや又どえらく鞭を食

ったもんだな。未だ皆新しい鞭痕だね。こたえただろうな」

「あのね、旦那様が遠のかれるとね、奥様が此奴に当たり散らされるんですよ。前は私に当ってられたんだけど……」

「成程。可哀想にな。ま、それも奴隷の勤めのうちか。そうだ、おい、お清、あっちへ電話してみる。一騒動持ち上ってるかも知れん」

奥様はニコニコして飛んで帰って来ました。

「おい。お前、むこうで何か暴れて来たんじゃないか？」

「ウウン。あなたがいらしたら唯じや済まないけど……。おとなしく引下って来たわよ。けど、あの女奴隷ね。革の褌みたいなものだけでさ、後手錠嵌められて廊下の隅でしょんぼり座ってるのよ。トイレに行かせて下さいって婆やさんにペコペコ頼んでるの。憎たらしい程綺麗な奴だけど少し可哀想みたいだったわ」

「あの革褌は錠前付でね、貞操帯兼用さ」

「檻を作って入れときやいいのに。いや、そんなに心配なら、いっそ売り飛ばしたらどう？」

「ハハハ。ずい分高い女奴隷だったぜ。今売る訳には行かんさ」

「ええ、ええ、大分御執心だったんですからね。そう云われると又憎くなるわ。ビンタ位食わせて来りやよかったわ。ま、そんなことよりお風呂に入らない？ これ二十五号、何ボヤボヤしてるのさ。お風呂沸すのよ、早く……」

「お清がたいてるよ。ガスもつけてるから、もう沸いたろう」  
「アラ、そうお」

奥様は少し妙な顔をしました。

其の夜はかなり早く檻にブチ込まれ、暑さに流れ出る汗を拭うす

へもなく、僅かに肩で息をして喘いで居ますと突然、視窓が開いて長襦袢姿の奥様がしがやがんで見下ろしました。

「未だ眠って居ないの？ お清さん、うまくタガを嵌めたか知ら。ちよっと俯向いてごらん。今晚は特に暑い様ねえ。お前の体の汗の凄いいこと。鞭痕に汗がしみるので眠れないのね」

凶星でした。全身の鞭痕と腿の内側の針痕とにしみる汗のむずがゆさに、泣きたいのをやっと堪えて居るのでした。

「どれどれ、一体どんな風にしてるんだい」

「とても暑いよ、地下室は」

「ウン、風も入らないしな。けれど暫くしたらこの床が冷えて来て奴さんも幾分凌ぎよくなるさ。クーラー回し出してからもう二十分以上になるからな。しかし、又胸に鉄のタガを嵌めて寝させるなんて少し残酷だぜ。鉄の禪だけでもヒーヒー云ってら」

「けど面白いのよ。毎晩ね、胸枷嵌めてね、手をネジ上げてやると必ず悲鳴を挙げて悲しそうに泣くのよ。フ、フ、フ」

「ま、好きな様にするさ」

ボタンと覗き窓が閉められました。

(未完)

## ◎ 最近撮影新版マゾヒスチック・フォト分譲 ◎

モデル―女サド役(絹川文代) マゾ男(愛読者、海野弘三)

大手札型印画紙(9×13センチ) 焼付、各組三枚一組 三〇〇円(送共)

### 全部未発表の

### 極最近撮影のM・F。

### 圧倒的人気にて注文殺到の好評

広く寄稿家や愛読者の中から募ったアイデアを元にして、最近誌上で募集した新しいMモデルを使用した全く新しいMフォトです。左の通りマゾヒスチックな素晴らしい場面を展開しております。

### 顔乗り(略号かお)遠慮のない女御主人様

ふっくらと肉づきのよい足の裏がM男の顔にぴったりとふさがり、やがて全体重がかかる。鼻も口もひしゃがり塩辛い足の指が口に入る。荒縄で後手に縛られているので、只、顔を振って呻くだけ。

### 足舐め(略号あし)さげすみの冷酷な視線

「この横着犬奴が」と、さんざん鞭で仕込まれた挙句、女御主人様の素足の指先や足の裏を舐めさせて貰う犬男。無理矢理、口の中へ押し込まれる足の拇指、しかし首輪を持たれた犬はどうもできない。

### 首締め(略号くび)容赦のない締めつけ

すらりと長く伸びた白い脚がM男の首をがっきと捕える。後手首を揃えて括られた男は這いまわって逃げるが、執拗な脚はしなやかに動いて首を締めつける。今や断末魔の恍惚境が訪れるのだ。

### 犬の芸(略号いぬ)厳しい犬に対する仕込

首輪を締めて鎖を持たれた可愛い犬男、女御主人様の前でチンチンをし、お預けをし、ムチうたれながら仕込まれる犬の芸。うまく覚えたなら女御主人様の食べ残しを足の指に挟んで貰って頂く。

### 尻敷き(略号しり)誇らしげなサジスチン

勝ち誇った生々とした美女と、女の大きな尻の下に呻吟してもがくMの醜男の哀歓と喜びとを織りまぜて、絶妙のコントラストをもって描いた快心のMフォト。是非Mの慰安のために一組を。



## 創 作

異

教

徒

草 薙 久 人

それは雑踏にまみれた、孤独者の事かも知れない。

## 一、奇妙なアイデア

「ピシッ！」

細長い革のベルトが空を泳いで激しく鳴る。と、誰かぞ呻く。又鳴る、呻く、鳴る、呻く。随分永い間続いているようでもあり、いま始まったばかりのような気がする。

ベルトの振り下される度に転轡する一個の肉塊は、不思議にも呻きつゝ奇妙な歡喜にも似た躍動を繰返しているのだ。全身に血が滲んで来ている。それは何か、ジュータン模様を思い起させる。手も足もがんじがらめに縛りつけられているその肉塊は、どうやら男のようである。

机上のラジオが度はずれな音で、ジャズをかき鳴らしている。だからこの鞭の響や、男と女の氣配は隣室には届かないらしい。女は鞭をもつ一度高く振りかざ

した。

「あんたは洗一よりねばり強いわね」

「お前を愛しているからだ！」

「洗一もあたしを愛してくれてる」

「ふん、それ以上に、あいつに参ってるのがお前じゃないか。どうだ図星だろう……おい！どうしたんだ、もっと強くしばいて呉れたっていいんだぜ」

女は、がっくりと床の上へ倒れた。顔が蒼白だ、脂汗が滲み出ている。

男は勝誇ったものゝように、女の前に立ちはだかった。

「許して！ あたしはやっぱりあんたなんかを折檻してみたって楽しくないんだわ。苦しだけ。洗一となら楽しいけど……」

男は鼻に皺を寄せて卑しく笑った。

「その男が浮氣してるんじゃないか。仕方がないじゃないか。今頃も多分ホテルかどこかで」

女はキッと眼を見開いた。見降している男に挑みかゝるような姿勢になった。

「信じられない……洗一は必らずあたしのもとへ帰って来る！」

「はは、君も人が好すぎるようだな」

「人の好いのは良之介、あんたも同じじゃないか。大事な許婚者を横取りされてる癖に、

口惜しくないの！」

「永い間の厄介払いが出来たんで、俺は実の所せえせえしてるんだ。面が好いとか、頭が少しぐらい冴えてるってことだけでは、夫婦になってもうまく行きやアしないさ」

男は肩で息を吐きつゝ、さも愉しそうに云い放つのだ。

「今度はお前の番だ。その洋服ダンスの中にあるナイトガウンと着替えるんだ」

女は驚愕した。声がかすれている。

「あんたは、何故この中にある服の事を知っているの？」

「ははゝゝ、お前と洗一の事では、何もかも知り抜いている俺なんだ。まア何でもいゝから、早くその服を脱いで着替えてくれ」

女が洋服ダンスから取り出したナイトガウンは、薄いゴム製の珍らしいものだ。

女はさっと裸になると、男に背を向けて、ナイトガウンを頭からすっぽり冠った。音もなく肌にはそれはすると密着した。黒人のような肌に見える。女の首だけが、闇の中に浮かんでいるようだ。背から腰へかけて二列に、赤と黄の小さなボタンが飾りつけてある。

「初めは黄色のボタンをかけるんだったな」  
「あたし少し肥ったから、黄色でも近頃は苦

しいの」

「ははゝゝ、じゃア余計楽しめるって訳だな」

女はハイヒールでスカートとシュミーズをひっかけるとベッドの上へ放り上げた。

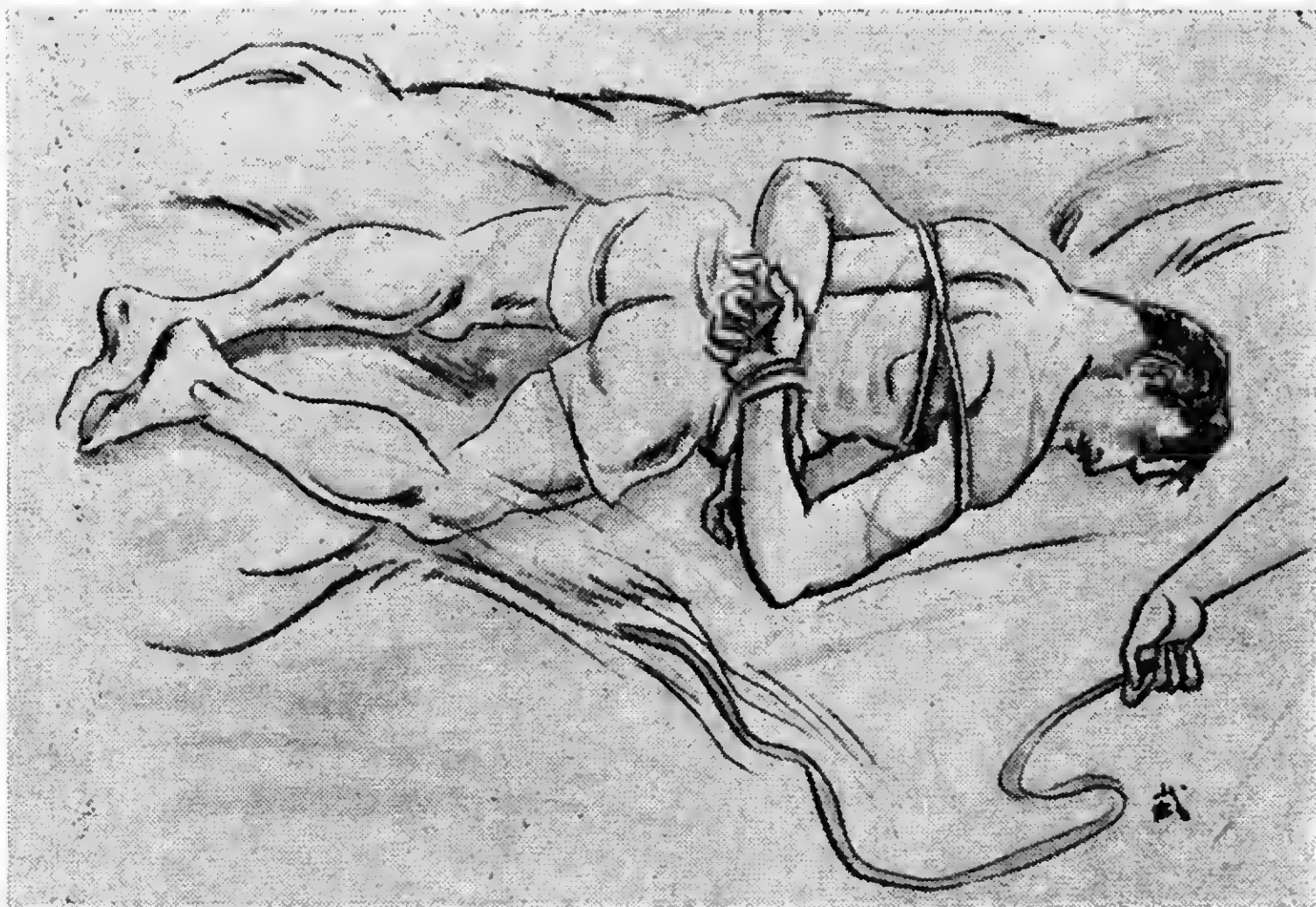
「こんなのを女盛りって云うんだな。いゝ体だ、俺の大好きなスタイルだ」

男は仕事机の足に、女の体を細引でかんじがらめに縛りつけると、T型定規で前へ倒れかゝらないように突っかい棒をかました。これで、女は何をされても前後左右に動くわけにはゆかない。不動のカナシバリである。

ネッカチーフで猿轡をかますと、男は机の上の筆立から絵羽根を二本引きぬいた。

くすぐり責めが始まった。何遍も何遍もあくことなく羽根は踊りを繰返す。

女は猿轡の中でしきりに何か叫び声をあげ続けているよ



うだが、それは低く押し殺した呻き声になって聴えるだけで、意味をなさないので。

黒いナイトガウンの下で喘いでいる白い肌が、桜色に染まって来ているのが、まるで見えるような気がする。

女が胸をのけぞらせて大きく喘ぐたびに、ゴムのナイトガウンは、ピチピチと伸びたり縮んだりするのだ。まるで生き物のようだ。それがだんだん小さきみに速くなってきていく。

「どうだ、嬉しいだろう。洗一にくすぐられるときと、どっちがいく……」

女は首を横に振った。

「よし、嬉しくなるまで、くすぐり通してやるからな」

女の眼は時々白くなる。

プチ！プチ！プチ！

ボタンの糸がはち切れて、黄色いボタンが勢よく床や壁に散らばった。

「こいつが全部はち切れて飛ぶ迄は、絶対やめないからな。エチケットだよ」

女の表情は苦痛の極点に達しかけている。女の顔は凄惨な位いの異様な美に輝いてきている。生と死の境界線を彷徨しているような複雑な表情だ。

プチ！プチ！プチ！

ボタンは全部はじけ散った。ナイトガウンは伸び縮みを停止した。死んだように動かなかった。女の肌だけが未だ泳ぐような悶えを続けている。

「何時もより糸の切れるのが早いようだったな。今度は赤のボタンだ、危険信号って洒落かい」

男は屍のようになっていた女を、励ますように、傍らのウィスキーの瓶から、コップになみなみとウィスキーを注ぐと、女の唇にそれをひたした。

猿轡が濡れて、ポタポタと黄金色のウィスキーが女のゴム服の上にしたった。

男は両手でナイトガウンを思いきり引き伸ばすと、今度は赤いボタンを一つずつはめ込み始めた。一つはめ込む度に、女の肌はキューッと悲鳴をあげる。ゴムは既に肌に喰い入っているようだ。女の素晴らしい腹と腰のあたりの曲線が、鮮かに浮び上っている。

「流石は今売れっ子のデザイナーだけはあるぜ。こんなニューモードを一般に売出してみな、洗一の名前は世界中に轟くにきまつてさ。ディオールもくそもねえ、世界中の女だって喜んで着たがるにきまつてるさ。現にお

前だって洗一の前ではこの服を着たがったんだからな……今更苦しくなったなんて贅沢な弱音を吐かないでほしいもんだ。……ふふ、ゴムのナイトガウンか。伸縮自在、透明且つ安価と来てやがる、傑作だ」

男はそろそろ酔い始めているようだ。螢光ランプが冷たく二人を照らしている。

と、女は突然首を仰向けたかと思うと、縛られていた両足を宙にとばせて呻いた。

「ど、どうしたんだ、直美！直美！直美！」その声にハッ！と眼がさめた。夢を見ていたのだ。全身に冷たい寝汗をかいていた。

洗一は宿酔に朦朧とした頭を二、三度振払ってみた。あまりにも現実酷似した今の夢だったのだ。

傍の葉子は未だ静かな寝息を立てゝいる。洗一はそっとベッドから脱け出すと、丹前をひっかけて、ロビーへ出て行った。

## 二、葉子と如来像

夜っぴいて降った雪が、ぼったりした厚みで、庭園の木々や芝生の上に純白の衣裳を冠せていた。いや純白と云うよりも、それは透明な煌きと云った方が適切な感じである。

洗一は不眠にやつれた弱い視線で、暫く

は、まぶしそうに庭園に眼を落していたが、やがて東山の空の方へその視線を移した。

階下のホールで、低くシャンソンが鳴っている。日差しから考えてもう昼前ではなからうかと洸一は思った。

……俺は後悔し始めているのだろうか？……いや、後悔なんかしたって今更どうにもなるものではないのだ。何も俺だけが悪いんじゃない。俺だけを責めてみたところで取り返しのつくことではないのだ。このような場合、男も女も同罪なんだ。酔っていたのは俺だけでも、彼女だって酒には酔っていたいなくっても俺と云う人間に酔っぱらっていた事は確かなんだ。それにしても案外だった。五年も六年も一人の男を待ち続けていた女が、一週間足らずの交際しかない行きづりの男と何故ホテルなんかへ来たのだろう？彼女は男を知らなかったのだ。俺は大変は過失を犯したのではないだろうか……

洸一の心は、日の光に音もなく溶けつゝあつちの白いものとは逆に、ぬかるみのような混沌に陥っているようである。

「こんな寒いところで、何ぼんやりしてはんの。さアお部屋へいきましよう」

睨むように切長の眼をきらめかせて、葉子

の腕が彼の背から首にかゝった。

「少しも気がつかなかったが雪だ」

「ふふ、東京の雪は降る時音がしますの？」

「？……」

「ねえ、早く。あたし寒い！」

葉子はナイトガウンの上から彼の腕を強引に引っぱると彼を部屋へ連れ戻した。

「氷みたい、あたたって」

「冗談でしょう。僕は燃える情熱だけで仕事を続けてるんです。心が凍えていたら、才能も何もかも血が通わなくなつて死んじゃいますよ」

「あたしのこと、不良老女だと思つてはるんでしょ？」

「そんな勝ち誇つたような顔して、ひがんだ口をきくのは止しなさい。嘘になる」

「それでも、ロビーなんかで、ぼんやり考え事してはるねんもの氣になるわ」

「予定を思案してたのですよ。随分色んな風に氣を回すんだな」

「東京が恋しなりはったかなと思つて、悲しかったの。洸一さん、ほんまに東京に女の

人いてはれしませんの……」

「……………」

「それ聞いたら黙つてしまひはる。でもかめ

へんわ、うちはうちで洸一さんを離せへん。死んでもつきまとうてやる」

如何にも勝氣そうな眼が、一途に燃えている。洸一は思はずたじたとした。氣楽な見学旅行が、ふとした事から大変な運命の道へずかずかと踏み込んでしまつたような氣がしてならない。

「僕は良之介にすまなくって……貴女だつてそう思わない？」

「愚痴よ！ふん、良之介はなんかに何で義理立せんならんの？あの人はずちと結婚する意志なんか昔からちつともあれしませんねん。それをばつくり云うてしもうたら、うちの家から出てる事業の資金を返して呉れ云われるのが怖いもんやさかい、それで何やかんや理由をつけては、今日迄うちの結婚を延ばして来やはったんです。なんぼうちが阿呆でもその位の分別はついてます。良之介みたくにずるい男、うちは大嫌いや！女の一人も自由にようせんような氣の小ちゃい男に、何が出来ますねん。うちの方から良之介なんか厭や云うて断つてもえゝくらいやわ」

彼女は三浦良之介の結婚の申込を、今日か明日かと待つて待つて待ち暮していたのだ。ところが良之介は葉子を妻に迎える事を何故

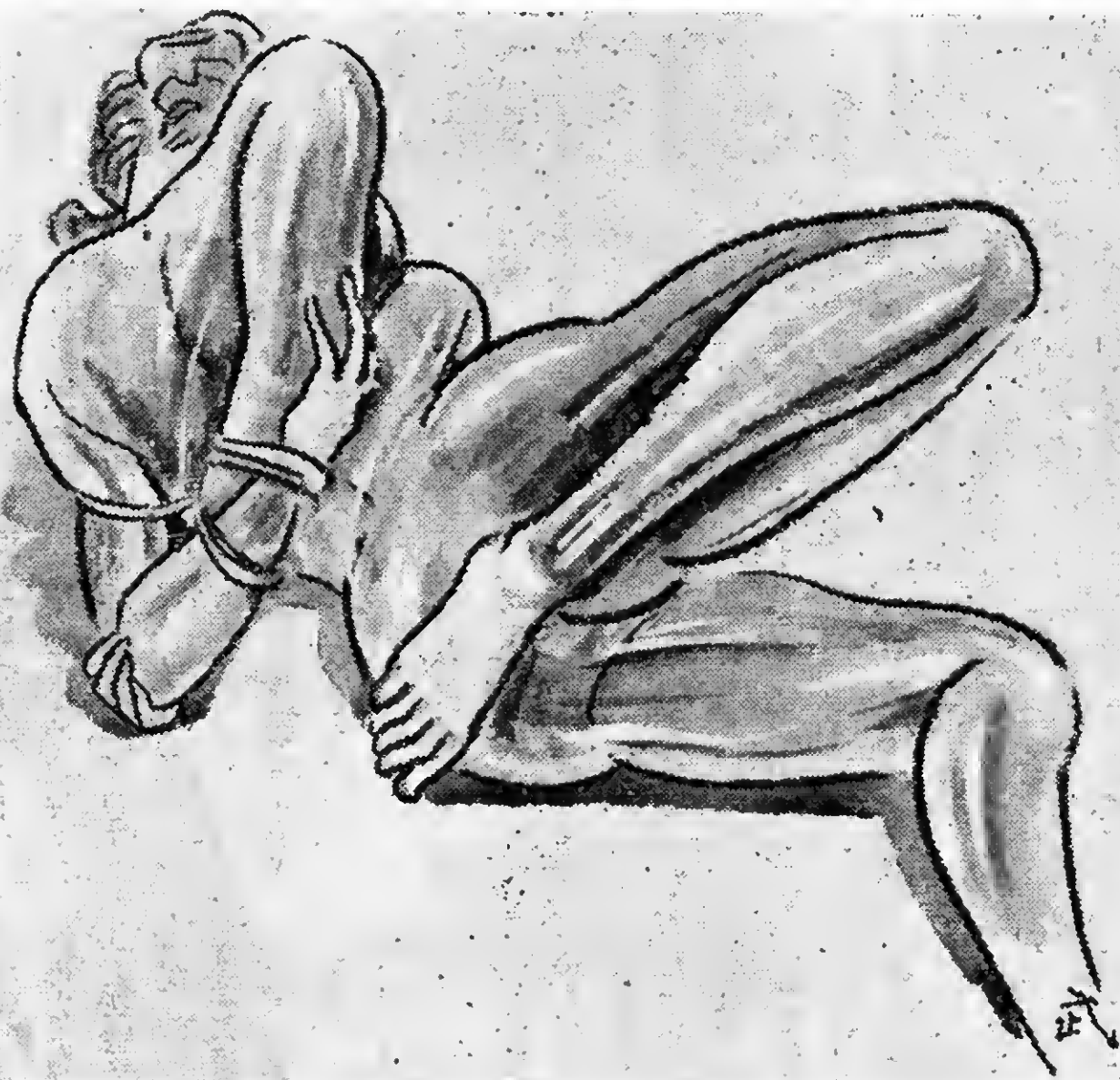


か避けているのだ。葉子には良之介の真意が理解出来なかった。葉子と逢って二人っ切りで話す時は、愛しているとも云い、まして外に女を囲っている風も見えないのだ。葉子は訳の判らぬまゝに悶え続けていた。それに京都と云う街は、葉子のようなてきぱきした女には、やり切れない暗さでじりじり孤独感を押しつけてくる古い街なのだ。気晴らしにハイヤーで市中を思い切り乗り回して見たところで、ものゝ二時間もかゝらない狭く年古びた街なのだ。観光や休息の土地ではあっても、青春の座を定める場所では決してなかった。女専を出てから、彼女は六年間の歳月を、氣に染まぬ家業の旅館業を手伝って来た。が、反面、彼女の青春は日一日とじりじり枯れ朽ちていたのだ。そこへ良之介が面倒を見てやっていると云う秋津洗一が、彼からの紹介状を持って、思いがけず訪ねて来たのだ。

服飾雑誌や婦人雑誌で今売れっ子のデザイナー秋津洗一の名は、

葉子には飛びつきたい位の魅力となつて迫つた。

新鮮な都会の匂いをぶんぶんさせている洗



一に、葉子がぐんぐん惹かれてしまったのは通常の攝理でもあるようだった。

葉子は洗一に請われるまゝに、京都や奈良

の古代美術のある所を案内して回

った。そして昨夜、洗一が東京へ

帰ると云い出した時、葉子の方か

ら、洗一をこのホテルへ誘ったの

だった。それは許婚者である良之

介への最後の告別でもあり、秘か

な復讐でもあったのだ。

「あたしって怖ろしい女ね、昨夜

あれから吃驚するような夢をみた

わ。如来様を荒縄で縛っているの

よ、あたしが」

「如来様を?.....」

「一昨日、薬師寺へ如来様を觀に

行った時、あんたが憑かれたみた

いに如来様に見惚れてはるのん

で、あたしふっと如来様に嫉妬し

たの。昔からの伝説にもようある

話よ。仏像に命がけの恋して、氣

が狂うたり、身を投げたりした男

や女.....洗一さんも美術家やも

ん、その危険性は多分にあると思

うの.....」

「莫迦な！ 君は少し神経が過敏すぎるよ。」

僕はね、如来像を観ながら、あの何とも云えない優美な体の線の中から、僕なりにニューモードを掘り出そうと考えていたんだ。写真では何度も観た事はあったんだけど、今度、初めて実物の前に立ってみて、僕は如来像の年輪と云うか、歴史の匂いをじかに感じて、魅了されたんだ。確かに如来像は、男や女の持つ良さ、いや総ての人間が持っている一番良い所だけを備えている。首から両肩へかけての柔らかな膨らみを持ったスロープ、優しさの溢れた胸の厚味、そして腰の曲線、何処を見ても非のうちどころがない。今どきの八頭身美人なんかには到底見出せない不作為の美なんだ。男でも女でもない、肉体の美。僕は如来像に血を感じさえた」

「そやけど、仏像は生きてはれませんかやないの？」

「生きている奴の中にだって、死人同様の人間がいっぱいいるさ」

「昨日までのあたしの事ね」

葉子は凝っとスケッチ・ブックに洗一が描いた如来像を見守りながらポツンと云った。

洗一は葉子のむれるような体臭に、ふと息づまるものをおぼえた。

と、今頃、何度も何度も自分のアパートへ

訪ねて来ているであろう直美のことが脳裡をかすめた。それにさっきの悪夢がしきりに不吉な予感をかきたてている。直美の身边に何かが起っているような気がしてならない。

一週間で帰京の予定が、もう四日も延びているのだ。明日はいよいよ雑誌社の原稿の締切日でもある。

「ひと先ず東京へ帰ろう……」

彼は口の中でそう呟くことによって、迷っている自分の氣持に決を与えた。

### 三、壁の中の秘密

「どう、僕が予言した通りになったでしょう？……」洗一は此処へは当分帰っては来ませんよ。雑誌社の方へも全然、連絡がないそうだ。予定よりも十日も経ってるのに」

「当たったのが嬉しそうなおっしゃりようね」

「直美、いゝ加減に僕を信じてほしいな。洗一を此処まで売出してやったのは、全く僕の方なんだぜ。お前に洗一を紹介してやったのも僕じゃないか。ニューモード社とデザインの専属契約を結ばせてやったのも僕だ」

「洗一が世の中へ出たのは才能だと思うわ、あんたの力だけじゃない」

「金より才能かね？」

「あたしはネ、洗一とあたしが、まんまとあんなの企みに乗せられたのが口惜しいのよ。ね、お願い。此処は洗一とあたしが共同で借りてる部屋なんだから、さっさと帰って頂戴」

「はゝゝ、僕もこのアパートの住人なんだ」

「冗談おっしゃらないで、帰って！」

「本当だ、此処が8号室で僕がお隣の9号室に住んでいるんだ。嘘だと思ふのなら案内してもいゝよ、来るかい？」

直美の顔色は土色になっている。良之介はパリーの蚤の市で買ったと云う自慢のパイプに、ゆっくりと火を点けた。

直美は洗一のドテラを着ている。男のような断髪、少年のような感じのコリコリした娘だ。良之介は三十五歳、胆汁質のやゝでっぴりした男だ。洗一のパトロンであり、銀座で画廊を経営している。奇妙な私生活の持主でもある。ねち／＼した特徴のある話し方をする。

「僕が君達の秘密を嗅ぎつけたのは、半歳程前の事なんだ。いや最初に断つとくが、その秘密を責めようと云うんじゃない。僕もその仲間に一枚加えてほしいんだ。秘密って奴は僕のような秘密癖のある男には、却って開け

っぴろげに何もかもすぐ判ってしまうんだ。独特の臭いがするんだ。洗一の留守中デザインを取りに来て、何気なく机の上にあったデザインブックを見て、僕は正直に云って驚愕した。黒い表紙の分厚いスケッチブックに描かれてあった、裸女のデッサン。その奇妙な百態の裸女は、直美、君だった。そしてそれは普通のモデルには到底出来ないような至難な、奇妙な狂気めいたポーズばかりだった。拷問にかけられているのがあるかと思うと、くすぐられて笑っているのもある。逆立ちしているのもあった。アクロバットのように足と首が円の中にあるものもあった。縛られてベッドの下に押し込められているのがあるかと思うと、乳房を絵筆で赤く染められているものもある。足の裏に今にも燃えつきそうな小さなローソクを立て、君が熱さに悶えているのもあった。確かに直美、お前が洗一の前で実演させられた事ばかりなんだ。僕はそのデッサンを時間を忘れて、何度も何度も見入っていた。幸いその日は洗一も君もアパートへは帰らなかったようだ。余程そのスケッチブックを僕は盗んでしまおうかと思った位、僕はそのデッサンに魅入られてしまった。それだけなら未だ驚くに足らなかったかも知れないが、

机の中にあつた赤表紙のスケッチブックには、洗一の本領を発揮した、ニューファッションのデザインがぎっしり描き込まれてあった。その一つ一つのデザインは洗一がおそらく彼の畢生の傑作として世に残す覚悟で描いたものに違いないと思われる位、素晴らしい作品ばかりだった。素晴らしいと云うだけでは言葉が足りない。人間世界を超越したアイデアとでも呼ばいゝのか、世界の何処の国にだってないと思われるような斬新でロマンで、愛に満ちたものだった。僕は見えて、その素晴らしさに体中がガタガタ震えてくるのを意識したものだ。一度でもよい。洗一のアイデアのこれ等の服を着て、街を歩いてみたいと願った。美しいとか新らしいとか云うだけじゃなく、それらの服を着ているだけで、それはじかに生きる歓びにつながってくると云うことが、僕にはすぐのみこめたかなのだ」

良之介は陶醉したように物語る。直美は息を呑むようにして耳を傾けている。良之介はポケットからウィスキーのポケット瓶を取り出した。「直美、君も飲めよ、暖まると血のめぐりがよくなる」

「じゃあ、あんたは、洗一とあたしの二人だけの秘密の行為を隣の部屋から盗み見ていたって云うのね」

良之介は立って、寝室になっている部屋の方へ行くと、枕元の上のカレンダーをまくりあげた。確かに小豆大の覗き穴が二つ、隣室の灯を送って来ている。彼はカレンダーを元通り張りつけた。それはゴッホの自画像を上部に配置し下に暦を書いてある雑誌社の宣伝カレンダーである。気がつかなかったが、ゴッホの眼玉が何時の間にかくりぬかれてあるのだ。

「炎の人、ヴァン・ゴッホは気が狂って死んだ。僕の眼玉はそのゴッホによく似ているそうですね。絵描仲間によくそう云ってからかわれるんだ。僕も狂人の素質を何処かに持っているのかも知れませんか、ふふ………」

「あんたは何を云おうとしているの？」

直美は良之介が薄気味悪くなって来た。

「僕はね、僕の今度の秘かな計画の為に葉子という許婚の娘を犠牲にしたんだ。洗一に報酬としてたゞで呉れてやったのさ。葉子も十人並以上の可愛い娘だ、ただ僕には一寸も興味の湧かない嫌な娘ですがね。金銭的な事もあるし、僕の好みに合っちゃアいないんだ。」



僕が血をたぎらせる女はもっと外にある……」

「……………」

「直美、君だよ！」

「いや、いやよ。あたしは洗一を愛しているんだわ」

「百も承知さ。愛してくれなんて云ってやしない」

「じゃアどうしろって云うの？」

「良之介一生の頼みだ。直美！お前がモデルとして洗一の前でとってみせたポーズを、この僕の前で、もう一度とって見せて欲しいんだ！」

直美は体が硬直した。良之介の獣のような視線が突き射さるように近ずいたからだ。

「お願いだ、一生の頼みだ。洗一を今迄通り

愛してもいいのだ。僕を憎んでいい。僕を何時かは殺して呉れたっていい。決してうらんだりはしない。君達が幸せになるのを邪魔なんかする気はないんだ。一度でいい、洗一が君に愛情をこめて作ったあの服を着て見せてほしいんだ」

彼は洋服ダンスを開いた。様々な七、八枚の衣裳が吊ってある。その中から一枚の青いシュミーズのようなものを取り出した。

「これがいい、さア先ずこれから着てみてくれ」

「……………」

「さア早く。報酬がいるのなら、どんな事だってする」

容赦させぬ口調で迫ってくる。直美は半ば放心状態になっている。

「着替えるから、あっちへ行行って」

良之介は大きくうなづく。満足の表情だ。

「手伝わせてくれないか？」

「手伝って貰わないと着れない服もあるの、その時お願いするわ」

直美は観念した様子だ。それとも何か



作戦でもあるのだろうか？

「そっちの電気を消して、こっちへいらっして」

「ラジオをかけておくんだっとな、ジャズがいゝ？それともクラシック」

「……………」

青白い螢光灯の灯を浴びて、一匹の青白い海の獣が、ベッドの上に寝転がっている。

良之介は思わず息を呑み込んだ。妖しい美しさだ。ウロコのような飾りがピカ／＼光っている。充分に伸びた麗体が、青一色に塗り潰されて、喘ぐように横たわっているのだ。

「縛ってもいいかい？」

黙ってうなづく。五色の麻縄が側に置いてある。先ずビニールの猿轡をかます。後手にしてT型定規を腰から背にかます。洗一がやっていた通りの事だ。

「僕は僕のやり方でやりたいんだが、初めは洗一の通りにやってみるよ。だが責め方は一寸違ふんだ」

良之介はオーヴァのポケットから小さな酒瓶と粉薬を取り出した。

「こいつは支那の酒でパイカルっていう奴だが、こいつにこの粉薬を混ぜてやると、三日間位い寝なくなつたっていゝほど凄い精力がつ

くんだ。直美も飲むか？」

猿轡を少しずらせた。

「ねえ、葉子って人、美人？ 洗一が好きになるような女？」

「気にしているのか？ そうだな多分に精神的な感じだ。何時もセックスの臭いがする女だ。だが常識的でいさゝか生意気だ。今更そんなことを聞いてどうする気なんだ」

「……………あんたと一緒に殺してやろうかなと考えているの」

直美の眼は葉子への嫉妬に燃えている。本当に殺しかねない形相だ。

「洗一のアイディは、私との合作みたいなものよ。この服をゴムで造ろうと云い出したのも直美よ。あたしは洗一の服を着て死ねるのなら本望だけど、他人の女に、洗一があたしと考えて作った服を着せて愛したら、すぐ殺してやる」

いきなり良之介が直美を突っ転ばした。

「洗一のことを口にするのは止める！」

狂暴的にベルトを振り降した。鳴る、鳴る、鳴る。悲鳴のような響を残してベルトは狂い舞う。青い獣はその度にベッドの上で転がり回るのだ。T型定規が真ん中から真二つに折れてしまった。

どのようにしばかれても直美は呻くだけで、許しを請おうとはしない。白い歯を喰いしばって喘ぎ乍ら懸命に鞭と斗かっている。そのうち良之介の方が荒い息を吐き出した。ラジオはドラマを演っているようだ。群衆の声と、街の騒音が音楽に交って聴えてくる。

縛られた青い獣は、ゴムの衣裳の中で何を考えているのだろうか。愛？嫉妬？死？

鞭を振りおろしている螢光灯に浮ぶ良之介表情は、歡喜に満ちている。孤独者だけが味う愉悅の境地にさ迷っているようだ。

「おい止める！止めないか！」

ラジオドラマの声ではなかった。何時の間にか洗一がドアの内側に立っていたのだ。鞭をふりかざした蒼白な良之介。猿轡の中で喘いでいる直美。凝然と突っ立った儘の洗一。やがて三人のそれぞれの複雑な表情の何処かから、雑踏の中をまみれながら当てもなく歩いて行く孤独者の影が、だんだん強く滲み出て来るようである。

異教徒。彼等は異教徒のみが知る、苦痛と快樂の虜なのだ。

ラジオはドラマの終了を告げている。

(完)